
ジサツ転生者

足洗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジサツ転生者

【Nコード】

N1241N

【作者名】

足洗

【あらすじ】

女神は下界を覗くのが趣味でした。

ある日、一人の男を見つけました。男は家族を失くした人でした。でも懸命に生きてました。男は財産を奪われました。でも懸命に生きてました。男は居場所を無くしました。でも懸命に生きてました。男は親友を亡くしました。でも懸命に生きてました。飼っている猫が殺されました。男は生きるのを辞めました。

女神は怒り、男を生き返らせました。女神は祈り、男の幸福を願いました。

転生者として生かされて、男は世界を渡り歩く。女神が望む男の幸福は果して何処にあるのだろうか？オリ主が色々なアニメやら漫画やらの世界で猫として生きます。

プロローグ 女神の独白

何も無い空間というものを自分は今まで見たことが無かったが、今日唐突にその未経験が埋まった。

・・・自身が望んだかどうかは別として。

「お前、死んだから。なんか能力付きで転生ね。転生先はランダムだから。ああ、でもアニメとか漫画ぐらいしか選らばねえから。え？なんでって？私の趣味。^{オレ}あゝでも、能力決めんのメンドイな・・・いいや、オレの頭ん中のアニメ漫画ならなんでも使えっからチート最強ってか。はははは！都合いい都合いい（笑）」

女は嗤った。心底愉快げに。

ところで、前述した何も無い空間について、真に残念ながらこの空間には二つ存在する。目の前で早口に話す女とオレ。特に後者は始末に悪い。始末した筈のモノがこのこと何をしているのだろうか。ましてや転生など

「え？イヤだ？いやいやいやお前に拒否権無いから（笑）暇つぶしって思つて、ね？付き合つてよ。頼むって！え？関係ない？勝手にやれ▲%#。って？だゝから、お前に拒否権無いのよ。まあ確かにね、人間社会にある基本的人権じゃないけど、天国・地獄つつう所にも魂的な権利は存在しますよそりや。人間だけじゃなくて動物とか植物とかにも平等に文句言う権利がある。ああ動植物の文句聞く為の措置つてのはあるよちゃんと？なにせ私神ですから。でもねえ、いるのよ。そういう基本的で最低限でいっつち番大事な

権利、捨てちゃうおバカが……だっってお前ジサツしたろ？
ジサツ、解る？自殺」

・・・・・・・・

「キリストさんここに自殺者は地獄行きって決りあるじゃん？あれはもつとややこしいお定めがあんだけど実際はもつと簡単なわけよ。『ジサツするような馬鹿に権利与えなくても良くね？』ってヤツ。ん？誰が決めたって？オレ！……ナニ？その、あく納得みたいな顔。まあいいや、兎にも角にもお前に権利無いよ。生前どんだけ善いことしてても関係ナツシング！いい加減諦めなつて。お前は、今日から、オレの、暇潰し。そうでもなきや可笑しいだろ？能力付転生最強主人公にしてやるなんて破格の待遇くれてやるんだからよ？道具並の扱いしてやるんだ、有り難さに泣きながら狂喜してるガキ」

一瞬で全身をズタズタにされた。

そんなとち狂った勘違いを来すほど、女の眼は俺を憎んでいた。

「……代えの利かねえ命を奪った結果だ。噛み締める。諦める。受け入れて絶望してる。もうお前が輪廻のサイクルから脱することは無い。現在は勿論、未来永劫、過去でさえ、お前はオレの玩具だ。ああでも自信持っていぜ？お前の生前は悪人じゃあなかった。人並、それだけだ。善くも悪くもねえ平穩無事な人生だ。詰

まらなくなてなかった。得難い幸福は確かにあったはずだ。みすみすそれを捨てたてめえはあろうとかそれに気付いてらっしゃったのになあ。ええ？退屈は人殺すって諺、作ったのお前？そうでなきゃ妙だよな。人ってのは日々努力して生きるもんだ。目の前に広がる当て所ない膨大な時間を一体どんな風に消費し活用し楽しむか。努力がいるぜ？これ。大多数の人間はその努力を多少の不満を抱きながら達成して死んでんだ。やり残したことがあんならまた来世へ、全うしたなら天界へ、罪を犯したなら地獄へと、なかなか巧いシステムだろ？……………例外、てめえみてえなヤツだよ……………」

例外。

ああ、返す返すも、この女は正しい。

得難い所ではない。幸福とは違う。生命は得られないものだ。あるうことか、それをこの俺は、捨てた。

……………なるほど、それを思えば、覚醒した瞬間から突き刺さり斬り裂かんと飛ばされる、女の殺意も肯けるのだ。

「……………じゃ、転生先だけど、どうすっかな。色々あるよな。アニメ漫画。目移りしちゃうわ……………あん？言っとくけどてめえの希望なんぞ聞いて……………あ？容姿？そりゃオレ好みの超イケメンっしょ！誰似にすっかな。」

今更、自分にそのような権利は無い。この場で口を開くことさえ許されないものを。おこがましいにも程がある。
だが

「衛宮かエミヤか、黒^{ヘイ}もいいよな、ん？シヨタ系でネギ君とかシンジ君？、ああでも敢えて女にすんのもオモレーか？レヴィでドンパチ、なのはでズドン。脱力系で銀さんなんかいいかもな・・・？最強なら孫悟空？ああでも純朴過ぎ、もつと鋭利な———だからなんだよさつきつから？今更・・・人間以外？はあ？んだそりゃ？・・・あ、お前そういや猫飼ってんだったな・・・容姿はいいか、どうせ後から変えられりや問題ねえし。おkおk、分かった。ご所望は黒猫な。陰気なてめえにやお似合いだ。おつとそりゃ猫に失礼か。お前なぞの願い聴くのこれでラストな？わあ、オレ超優しい！（笑）・・・んだよその目・・・」

「・・・望外の機会だった。まさか聞き入れられるなどとは思ひもしなかったのだが。恐らく、今自分は大層に間抜けな面を晒しているのだろう。女は何故か俯いてしまった。ぶつぶつと呟きを漏らしているが、生憎と聞き取れることは出来ない。」

「・・・じゃ！愉快なお話はそろそろお終い。今からてめえを輪廻に突き落とす。一生出られねえ生の地獄。お前にや上等だよな？・・・あ、そうだ。お前、名前・・・覚えてねえわな・・・」

名前・・・ああ、そう言えば。本当に今更だ。自分は自身が何者であるのか、奇妙なことに、一切『知らない』。まあ、別段重要でもあるまいに。

女は何故か（俺の、大して性能を期待できない目が狂っていないければ）寂しそうに、見えた。

「ふんっ、そんじゃオレが付ける。文句垂れんなよ？・・・
・レーフェン、ああレーフェンだ。てめえは今日からレーフェンだ。
生き地獄のレーフェン。はっ！上等上等！」

女は嗤う。愉快げに。楽しげに。寂しげに。哀しげに。

回転の速くも無い頭は、馬鹿の一つ覚えのように疑問を増産していく。何故、何故、何故。

ただ、その疑問を口にする時間が、この期に及んで与えてもらえるはずも無く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・精々生き苦しめ！この

阿呆が！！！！！」

心の底からの憎しみと怒りがあるだけぶつけられた様だ。酷く胸が痛む。いや、この痛みさえ俺には過ぎた物。

思考は一向に速度を増さず、俺はどうしようもない阿呆のまま、堕ちた。

・生きてよ・・・」

「・・・」

ブログ 女神の独白（後書き）

ぱつと見、意味不って言われても仕方ない文章です。

暇潰しにでも読んでいただければこれ以上の幸せはございません。

要は、転生者が色んな世界を廻るといってお馴染み展開です。少しでもオリジナリティを出せるよう精進いたす所存です……。。

第1話 火の海を散歩

目を覚ました先が火の海だったら、あなたはどうするだろうか。

瓦礫が道を塞ぎ、どす黒い煙と目に見えぬ煙が命をやんわりと削る。火の手は弱まる所を知らず、燃やして溶かしてその勢力をさらに広げ、人を何人飲み込んだやら。

現状が良いものであるはずはなく、此処はお世辞にも居心地のよい場所とは遠いものであると考えるまでもなく思い至った。脳内でクドクドと思考し続ける暇さえ本来は無いのdarうに。あの神と名乗った女は、どうやら本当に自分のことが嫌いなようだ。のうのうと生き長らえている自分をして、少々愕然とするのは、まあ勝手な思いだ。あれの言ったことは突飛であつたとしても徹頭徹尾正しかつたのだから。

「・・・・・・・・」

現状把握。

黒い体毛はこの業火の中にも関わらず焼けるどころか焦げる兆しも無い。

視線の高さが慣れ親しんでいたものから程遠いことに若干驚いた。随分小さくなったもので。

思えば、地に足を付けているのはいつもの事だが、それが四本となるとまた話は別だ。

ピクリと震える頭上の耳。周囲の音が以前よりも鮮明であることが知れた。

確認するまでもなく、この身はきつちり猫に収まっている。ご丁寧な事に生前飼っていた猫と同じ種のような（ボンベイだったか？）．．．．．自分の名前は思い出せないのに、猫のことは今でもありありと思い出せたのは幸い、なのだろうか。

周囲は見たところ建造物の中、比較的小奇麗だったであろう内装、散らばる瓦礫にはスニーカーらしきものやら電光掲示板の欠片らしきものが混ざっている事から、どうも空港らしい。一度、自身のいい加減な記憶を反芻してみたが、空港という所は果して火の海を作って客に提供するような場所だったか？

「．．．．．阿呆らしい．．．．．」

早々に思考を切り捨てた。と、ついでに声を、言葉を、操れる事が確認できた。姿かたちは猫だが、どうも常識からは適応外らしい。今更会話を楽しめる御身分でもなかるうに。どうでもいい。さて、これからどう

「．．．．．？」

気配があった。人だ。随分と小さ目だが。

これはどうやら能力の一つらしい。感じられるモノは一つではないが。氣だか魔力だかな。ついでに、血の匂いも。たらたら歩いて近寄ってみると、果してそれは人だった。少年．．．いや少女？．．．蹲りすすり泣くその子供は怪我を負っている。この場を蔓延している濃密な死者の血とは別に、比較的新鲜な血の匂いが鼻をく

すぐり、それがその子から発せられているのが分かる。

「・・・・・・・・下衆が・・・・・・・・」

自身の思考に唾を吐く。下劣な自身に悪態を吐く。

そついう体になっているのは解った。

「痛い・・・・・・・・熱い・・・・・・・・お姉ちゃんっ・・・・・・・・うつく・・・・・・・・」

周囲を包む熱気が肌を焼く。体のあちこちに出来た傷が動く度にズキズキと要らない自己主張を繰り返す。

生者の絶えた吹き抜けのエントランス。物言わぬ巨大な天使像が死に絶えた空気を見下ろすそんな場所で、少女は一人泣いていた。

「っ！っあう………帰り、たいよ………こんな、のっやだよ
お………」

彷徨い歩くその最中、少女は多くの叫びを聞いた。数え切れない死を見てきた。

折れ掛けの心を引き摺って、なんとかここまで歩いて来られたのは、ずっと家族を思い続けたから。しかしそれも最早限界であった。少女は彫像の下で蹲り、火の海の中をただ恐怖に支配されながら耐えている。

「………ッ誰か、助けてっ………」

少女は願う。ただただ請う。無駄だと知っていたとしても。

走る亀裂は彫像の台座に。巨大な天使を支えるそれは、掛かる重みに耐え切れず次々に砕けていく。背を向けて蹲る少女はそれに気付かない。ゆっくりと巨大な石塊が、小さな体を押し潰さんと迫り来る。数瞬後に残るのは少女だったモノだけだろう。

鈍い光を少女は見た。

顔を上げたその先で、倒壊した天使が、光の壁にもたれ掛っているのだ。正八角形を成すそれはまるで盾のように少女を守っている。思わず驚愕して光の壁を凝視する少女。とその時、少女は自身のすぐ傍らに気配を感じた。急ぎ視線を周囲に這わす。だが誰もいない。

「みゃあ」

「わっ！？」

思わず少女は飛び上がった。自分だけしかないと思われた場所に自分以外の生き物がいた。

それはすぐ隣で少女を見上げている。この業火の中でさえ艶やかな毛並を揺らして、金色の瞳を少女に向ける、一匹の黒猫。

普段ならば可愛い一言で終わってしまうだろう。でも、今はそうもいかない。状況の異常性が思考を乱しているのだろうか。

少女は、この猫が、確かに自分を救ってくれたのだと悟ったのだ。

(・・・ATフィールド、か。お詠えの能力だな・・・他にも色々、あるよな・・・)

無駄に大きな像を受け止めて、傍らで蹲っていた少・・・女を見る。

怪我はそこまで深くはない。打撲と火傷と裂傷が少々。少し煙を吸ったか。兎も角もすぐに医者へ診せれば大事無いはずだ。

「ね、猫・・・さん?・・・私を、助けてくれたの・・・?
」

「・・・」

随分と驚いている。この状況では無理もないか。一人ではないと知ってっただけ落ち着いたようだ。ま、所詮猫なんだが。

どちらにしろ、今はここを出なければ始まらない。生憎ここは談話を楽しむにしろ救助を待つにしろ、あまり適しているとはいえない。とはいえ、出口は塞がっている。玄関口を通って暇するのも難しいな。

「いつつ！つく．．．ね、猫さん。ここは危ないよ？．．．私のことは、いいからっ早く逃げて．．．．．！」

痛みに顔を歪めながら、少女は精一杯声を張ろうとしているようだ。体力は底を突き掛け、孤独の恐怖に晒され続けていただろうに。他者を慮る余裕は．．．ある訳もない、はず。

（特に痛むのは．．．膝か？）

よくよく見れば阿呆な勘違いだ。少女の膝は血だらけで、見るからに重傷だ。脂汗が額を流れ、涙を湛えたまま、少女は無理矢理笑った。またぞろ歪な笑顔で。

傷口に近寄った。キョトンとしてこちらを少女が見る。特に気に留めず、傷口を舐めた。

「ひゃっ！？．．．猫、さん．．．．．？」

ピチャピチャと傷を舐めながら、頭の中で都合のいい能力を引っ張り出す。治療、治癒、回復、復元、正直どれでもいいのだが。

（．．．ケアル）

「？ あれ？．．．．．痛くない？．．．猫さん？」

驚く少女を他所に、早々に身を離す。時間もそれ程ないだろう。そろそろ空港そのものが倒壊してもおかしくはない。天井を吹き飛ばそう。手早いし、楽だ。

(I am the born of my sword……
トレス
投影——ん?)

大きな魔力が近付いてくる。迷わず、真直ぐこちらへ。

(救助……随分、悠長な……)

しかし、これは至極身勝手な思考だ。えてしてこの混沌が支配する炎の地獄で、全ての人間を救助するのは難しいだろう。今この時多くの人間が等しく懸命なのに。手前の勝手な理屈に嫌悪しながら、少女に背を向け歩き出した。

「あ……………」

小さな呟き。伸ばそうとした手がゆっくりと下がっていくのを背中に感じる。また独りになるのが恐いのだろうな。それを必死に覆い隠して、気丈に振舞っている。振り返り一瞥した少女の顔は悲しみに満ちていた。

「あ、あの早く逃げて！ここ危ないから！は 「助けが来る」
・・・え」

「あとしばらくだけ、辛抱しろ」

「え！？猫さんっ・・・・・・・・猫さん！！」

言うことはそれだけ。今度こそ背を向けて、俺は火の中へ飛び込んだ。

「その子大丈夫！？助けに来たよ！」

背後でもう一つ声を聞いた。救助が来たのだろう。
ああ、もう大丈夫だ。

あとは、一つだけ。

長い長い通路を越えた先には、さらに長大な回廊が待っていた。先程の結界に魔力を使い果たした少女は歩くことさえままならない。だが、それでも、少女は進むのを決して止めない。

「っ！待ってて……今、行くから！……」

妹を絶対に助けるために、この少女の頭には半ばそれしかなかった。だからだろう、軋みを上げる鉄骨にも、亀裂が走る足場にも、このいつもなら聡い少女は気付くことが出来なかった。

瞬く間に、呆気なく回廊は崩れた。

「あ！？」

声を上げた時にはもう、少女は落下を始めていた。飛び散る瓦礫と共に高さ数十mを真つ逆さまに落ちていく。

少女の脳裏を掠めたのは恐怖だった。しかし、死への恐怖など微塵にも抱いていない。この少女が恐怖したのは、どうしようもなく怖かったのは、妹が何所かで泣いているという事実なのだから。

「つつ！！！！……え？」

当然落下に伴うはずの浮遊感をいつまでも感じない。少女は怪訝そうに固く閉じていた目を開けた。体の下に冷たい床の感触。その事実は少女をさらに混乱に陥れた。と同時に、少女は襟首に違和感を覚えた。先程からきつく引っ張られている。すぐさま顔をそちらに向けて、少女はさらに混乱することになった。黒い猫が静かな眼差しで自身の安否を問いかけてくる。

この反応にはもう慣れた。妙な場所で黒い猫に会えば、混乱もするさ。意志の強そうな瞳がこちらを捉え、何某か問いたげである。しかし、あまり構っている暇も無い。倒壊はまだ止まっていないのだ。この回廊も長くは持つまい。

（ATフィールド、形状は・・・・・・）

周囲数メートル四方で力場を形成。この場を離脱・・・・・・近場の

魔力の塊まで。

瓦礫の破片も巻き込んで、少女と自分の体が宙に浮く。

「つつ!？」

先程以上の驚愕が少女から窺えた。口を開けてポカンとしている。浮遊しながら少女を見やった。長い髪が埃で汚れ、所々に擦り傷も見える。そして、似た顔を見た記憶が。

「ね、猫!？どうして!？こここれって???」

「・・・・・・・・・・」

無理からぬ反応だが、適応力に欠けるな。いや、先程の少女が妙だったのか。

程なく、安定した足場のある通路に着いた。未だ混乱の渦中の少女は近付いてくる救助に任せれば問題ない。っと

「居た!そこの君!怪我は!？」

金色の光を纏ってやってきたのは、黒衣の女。少女を見つけると見るからに安堵した様子だ。

これにて、目的は達した。内部で生き残っているのは外部の数人を除けば少女二人だけ。ここにいても、もう無駄だろう。

「！猫？……あ！？ダメ！そっちは！！」

「ん？」

気付かれたか。女はこちらに接近して手を伸ばしてくる。動物でも救わねばならないという善意は立派だが、この場合は余計だろうに。

「待つ「優先すべきはお前の腕の中身」！？」

「疾く、失せろ」

こちらが口を利いたのが予想外だったのか、女はその場で固まった。だからさっさと行けと。

振り返ることなく俺は早々にこの場を離れた。

女神が一体何の意図を持って自分をこうしたのかは、未だ解っていない。ただ……俺は許されないことをしたのだろうと、なん

となく自覚している。

完全に思い出すことも出来ないとは、おこがましい限り。

第1話 火の海を散歩（後書き）

勢い込んで書いてみました。多分に好き勝手文章ですすみません。

これから先、色々と世界を渡る予定ですが、順調に行けるか・・・
無責任でホントすみません！

読んでくださりありがとうございました！

第2話 夜の森を散歩

火の海から出た先は森だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

こみ上げて来る疑問を早々に飲み下す。今更、考える、というのも実に時間の無駄だろうに。

鬱蒼と茂る広葉樹。匂い立つ腐葉土と微かな雨露。木々の間から覗く満月が満面の嘲笑を浮かべて見下ろす。静かな所だった。

たった一つだけ思考するのだとしたら、此処は先程居た場所ではない。勿論、単に『建物の外に出た』などとは数ミリたりとも思っていないが。

「・・・・・・・・人？・・・・・・・・」

それを裏付けるかのように、感覚は人の気配においをつぶさに伝えてくる。感覚の視野を広めれば、多少広大でも、生き物の分布程度は知れた。

（・・・・・・・・人が一箇所集まっている？）

並の数ではない。数百、下手を打てば数千は軽い。では、ここには何某かの収容施設があるということか。

・・・・・・・・刑務所？

トンチキな想像を巡らせながら、歩を進めていく。幸い、と言えるのか甚だ疑問を禁じ得ない状況だが、先刻のように目が覚めたら鉄火場だった、なんて言う巫山戯た状況、場面はない。虫の音や夜の冷たい風はむしろ好ましいほどだ。

願わくば、もうしばし浸っていたいもの

「・・・・・・・・」

そんなもの、俺に与えられはらずも無い、か。

状況は差し迫っている。

周囲はぐるりと円状に囲い込まれてしまった。数だけの雑魚と侮っていた数分前の自分を是非射殺したいと痛切に願うも、叶いもしな

い物事を口にするほど彼女は幼くは無かった。

最早扱い慣れて、慣れという言葉も通り越し、腕の延長だと豪語できる程に手に馴染む愛銃は、力なくスライドを開ききっている。それは、空腹でへたり込む犬を連想させる。早急にマガジンえさをやって元氣付けてやりたいのだが、生憎ギターケースは輪の外。

「取りに行かせて・・・・・・・・くれるか阿呆・・・・・・・・」

苦笑いが本当に苦い。思考はさつきからこれの繰り返しだ。無益で無体で無駄。

近接戦闘の頼み綱、相棒とははぐれ、彼女はここまでなんとか一人で凌いで来た。別段それは珍しいことではないし、問題も無い。適切な装備と万全の準備さえ怠らなければ彼女は一人で一騎当千と言えた。

しかし、前以て与えられていた敵情が、正鵠どころか隣の的を射抜くようなモノだった場合、どれほどの強者として唯ではすまない。

今回の情報伝達のミスは極々些細なモノだ。本当に極々。普段なら気にも留めないほど。そう、敵の数の桁数、0を一つ二つ付け忘れるなどよくある事さ。

状況も忘れて彼女は愉快げに笑った。クスクスと漏れる声は年相応で、彼女がまぎれも無く少女なのだと窺える。

「ふふふふ・・・・・・・・じじい、覚悟してろ。倍額請求したら後頭部に鉛玉ぶち込んでやる」

微笑みは天使、瞳は般若だった。

下らない思考に終止符を打ち、拳銃をホルスターへ仕舞う。拳を握りコキリと小気味よく骨を鳴らす。彼女が知る近接戦闘の術は齧った程度のマーシャルアーツと実直な相棒から盗んだ不出来な剣術くらいか。

自身より一回り、基、倍はありそうな鬼ともオーガともとれる化物を相手取るには

「ま、十分か」

ゆつくりと腕を回しながら手近な一匹に狙いを定め、一気に駆けた。緩慢な動きから一転、瞬時に距離を詰められた鬼は虚を衝かれて反応が遅い。腰を捻り右足を最小の動きで正面の間抜け面の少し下、顎を蹴り碎いた。

ごしゃりっ

人間と脳の構造が同じならさぞ揺れを楽しめたらうに。音もなく鬼は消える。が、彼女はそんなものの既に視界の外へ追いやっている。止まっている暇は無い。止まればそこで終わりなのだから。

追い込んだと思われた鼠に突然噛まれた、そんな面を鬼達はしていただろう。

密集地は避け、なるだけ単独で突っ立っている鬼を次々殴り、蹴り倒す。威力が足りず、送還出来なかった者もいるが構いはしない。この蛮行の一番の狙いは、混乱で包囲を乱すことにある。敵にとって数の多さを仇とさせるのだ。

「はあっ！ぐ！はっはっはっ！——」

土台、無理だ。

走り回れば体力はすぐに底を突く。人間などという脆弱な生き物とは違い、鬼共の皮膚は岩石の如く、その爪は刃に非ず、掘削機なのだ。人並はずれた戦闘力を持つが特殊な眼を使いこなそうが年齢不相応なプロポーションの持ち主であろうが、彼女は真正正銘『人間』であることに違いは無く、ただ触れるだけでも傷を負う。拳と足の痛みは彼女の意識を覚醒させてはくれなかった。出血は体から熱を奪い、原動力たる酸素を失くす。彼女の意味とは裏腹に動きは精彩を欠いて、あと僅かで足も、止まった。

唐突に影が落ちた。冷やりと背筋を悪寒が走る。振り返らずとも背後にはいる。原始的な鋼鉄の棍を振りかざし、枝葉のように自分を揺り潰そうとする巨大な鬼。

（回避、不可。受け止める、論外。……ふんっ、祈るか？）

高速で打出される思考を彼女は投げた。スローモーションという錯覚に浸りながら、望みもしないのに脳は勝手に思い出を引っ張り出してくる。絶望でも諦めでもない。少女はそつと目を閉じた。

暗闇の先には、誰か待っていてくれるだろうか。

少女は見た。闇を切り裂く無数の剣閃を。

円の一角と一匹のデカ物を破壊した。遠目から確認した通り、中心で睨みを利かせていた唯一の人間はコレらと戦闘を行っていた様子。硝煙の臭いが鼻につくあたり、先方の主武装は銃火器。にも拘らず拳闘を余儀なくされているのは故障か弾切れか。どちらにせよ状況は芳しくない。連続投影で確実に四分の一程度は消し飛ばせたが、何処から湧いているのか、化物は未だうじゃうじゃと犇めいている。さらに連続投影で蹴散らすか……。。

「猫・・・・・・・・・・はっはは、夢でも見てるのか？私は・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

否、女は見るからに満身創痍。逃走の為の体力すら危うい。予備動作が無視できないからこそ連続投影は奇襲に適しているのだ。だが、致命傷が、無い？

裂傷と浅からぬ打撲。出血は辺りの草葉を汚し、苦悶に歪む表情は焦りを催す。しかし死にはしない。手当てさえ適切なら医者に掛かる必要もないだろう。なんだ、この傷つき方は。

ニヤつき下卑た笑み。どす黒く、皮膚に纏わり付く様な悪意。興奮に息を荒らげる者もいる。そんな者共らの視線の先には

「・・・・・・・・・・」

満身創痍の女。所々切り裂かれ破れた服から覗く柔肌は、滴り落ちる赤い血がぬらりと染めている。小麦色の肌は度重なる戦闘によって上気し、なるほど女の肢体は確かに官能的だろう。種族が違えど、その辺の欲求は変わらない、か。

要は、楽しんでいるのだ。傷ついていく女を見て。自分達に屈服するまで、ずっといたぶり続ける気だろう。

「お前・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

女の前へ出た。化物は一応自分に一瞥をくれるが、すぐに視線は女に向かう。まだまだ足りない。もっともっと。

・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・助けてくれるのかい？猫くん・・・・・・・・君が強いのは解ったよ。でもね・・・・・・・・」

女がよろよと隣に並ぶ。口元には余裕を示すための笑み。残念ながら、致命的に説得力を欠くが。

「私は犬派だが、猫だって嫌いじゃないんだよ？」

「・・・・・・・・・・」

血の滲む拳を握りこみ、構える。

闘争を心得た者は、その矜持を捨てることは出来ない。この女にとつては、守られるという事実がどうしようもなく許せないのだろう。俺風情が、その誇りを踏みにじっていい道理は、無い。強い意志の宿る瞳を見据える。女はすぐにこちらの視線に気付き、笑みを返した。

「・・・・・・・・・・弾倉はあのケースか？」

「ああ、残念がらね。ここからじゃあのデカ物共に足止めをつて！？喋るのかお前！？」

女の引き締められていた表情が緩む。どうもこっちが素のようだ。先程とは違い、幾分幼く見える。思っているよりもずっと若いのかもしれない。と、今は詮無い事だろう。

「道を開ける。補充・装備が整い次第援護を。数をあらかた散らした後、各個撃破。異存は？」

「・・・・・・OKだ。ははは、よかったら今度組まないか？報酬は弾むよ」

「・・・・・・考えよう」

そんな呟きを垂れた瞬間、眼前に化物共が迫る。話し込んでる隙に距離を詰められていたのだろう。隣で息を呑む声を聞いた。

（ATフィールド・・・・・・存分に喰え！？）

山吹色の光の槍。踊りかかって来た化物共を一匹残らず飲込んだ。皮膚を焼き、肉を千切り、骨を砕いてもまだ光は止まぬ。化物共の末魔の聲が辺りに響く。

黒いケースの直前で、フィールドは停止した。こちらの足元からケ

―スまでの距離十数メートル。地面を抉って一本、道が走っている。ちなみに余波だけで全体の半数が消えてなくなったのは、少し予想外だ。

「・・・・・・・・力み過ぎたか？」

「やり過ぎだ！」

叱責が飛ぶが仕方が無いといえばそれまで。何せコレを使ったのはたったの三度。それだけで能力の全容を把握し切れと言うのは、少々酷ではないだろうか？

しかし、えてしてそれはこちらの都合。彼女の怒りは至極当然か。

「すまない」

「はあ。いいや、まあ嬉しい誤算と言うやつさ。ふむ、しかしこれ程とは・・・・・・・・冗談抜きで、仕事しないか？この手際なら相應の報酬が見込めるんだが・・・・・・・・」

「いや・・・・・・・・」

どうやら本気らしい。身の上が身の上だけにおいそれと肯けないのだが。

化物共は随分静かになった。脅威という感情が果してコレらにあるのか疑問だったが、きちんと備わっているな。それは恐怖も同じこと。

女はいつの間にかケースを手に使っていた。予定とは少し違ったが、些事だ。やる事に変更はない。全部、潰す。

「トレース
投影、開始」

投影するのは巨大な両手斧。化物の威容にさえ全く屈しないその異様。存在するだけで他者に、秘められた破壊力を示すことが出来る。ケースからサブマシンガンらしき物を取り出しながら、女が目を見開いてこちらを見ている。

「FN P90・・・物騒だな」

「君にだけは言われたくないな」

軽口はこれまでと、俺は視線を外して斧の柄を噛んだ。大きさに少々の難があつたが、齒を食い込ませれば別段問題も無い。

言葉は交わさずとも役割は決まっている。自分の相手は3メートル級のデカ物共。女は人型の比較的小さい者共。

ふとその時、女がこちらを見ていることに気が付いた。

「・・・真名だ」

「？」

「私は真名。君は？」

意図が読み取れない。それが名前であると気付くのに少々時間を要してしまった。

名前、名前か、俺の名前は……。

押し黙ってしまった俺をどう捉えたか、女、真名はそれ以上問うては来なかった。既に周りの敵を睨みまわしている。

……。思い出せない名前なら、大した価値もなかったのだろう。ならば、与えられたモノを使うまで。

「レーフェンだ」

「！……。そうか、いい名前じゃないか？」

「ああ、生き地獄の」

「え？」

疑問符を浮かべる真名を無視して斧を振りかぶる。大きさに反して重さを感じないのは斧ではなく俺が異常なのだろう。

何のことは無い。目の前のアレらと同じ、俺も、ただの化物なのだから。

「トリガー 投影、オフ 装填———セット 全工程投影完了———ナイライブスブレイドワークス 是、射殺す百頭」

「た——！——たっ——！——……龍宮——！」

「あ……」

「龍宮！？しつかりしろ！」

「うん……」

陽光が光に慣れ切らない目を焦がす。完全に働ききっていない頭を誰かが揺する。

薄目を開けたその先には不安げな仔犬、ではなく見知った顔の少女。呆としながらも真名は現状を鑑みた。身を預けていたのは木の幹。節々の痛みがそれを肯ける。目の前で必死の形相を見せてくれるのは、はぐれた相棒だった。

「やあ、刹那……そっちは片付いたかい？」

「ああ、召喚師を取り押さえたしもう終わった。それよりも大丈夫なのか！？怪我は！？」

「ははっそう大騒ぎするな。あちこち擦り剥いたが大したこと・・・！！！？え？あれ？」

出血が無い。骨にまで響いた打撲も無い。裂けた服の下にあって当然の傷跡が無い。この痛みはどうも寝違えたからのようだ。真名は混乱の呈で傍らの相棒を見やった。

「レーフェン！これはお前が！？・・・レーフェン？・・・」

「レーフェン？誰のことだ？」

首をかしげる相棒に真名は曖昧な笑みを返した。

どうも常識外な有り様に失念していたが、あれもまた猫らしく神出鬼没なようだ。不可思議な出来事には事欠かないこの地でも、まだ自分の知らない不思議があった。

一夜限りの相棒は、無愛想で慇懃で優しく可愛らしかった。

「なあ、刹那・・・」

「？　なんだ？」

もう一度会いたいと願うのは、とても少女らしいわがままなのだろう。

「猫、飼わないか？黒くて目が金色のヤツ」

こうなって以来、初めて名前を交わした。自分のモノであるはずの名前は酷く不安定で、収まりの悪さはどうにも無視できない。これが自分のモノになった時、俺はようやく俺になるのだろうか。与えられた名前を享受する自身を、愚かと思うのは無理からぬこと。

第2話 夜の森を散歩（後書き）

勢い更新！長くは続かない！……すみません……。

リリカルなのはに続いてネギま。次にどう繋げようか悩む日々です。

次回も読んでいただければ幸いです！

第3話 街の路地裏を散歩

「……………いい加減、慣れた」

呟きは薄闇を彷徨い、程なく消えた。

湿り気を帯びた空気が肌に纏わり付く、そんな薄暗い路地。人の気配の絶えた此処は表通りとはある意味合いにおいて断絶されている、と言える。

深夜の、こんな空気の死んだ場所に人は寄り付かない。こんな所を歩くのは、犯罪者か殺人鬼か黒猫ぐらいか。

真名に治癒を施し、早々にその場を離れ、森を抜けた。

一歩踏み出した先は市街地の路地裏だった。

……………三度目ともなれば流石に気付く。意思とは関係なく自分は明らかに『移動』しているのだ。しかも、単なる遠距離の転移、跳躍とは異なる。もっと根本的な意味において。

そうでもなければ、いきなり真名の気配においが消えるのはおかしいのだ。以前出会った少女二人も然り。

徐々にだが、自身の感覚の視野が把握出来つつある。数万キロ程度なら、対象の気なり魔力なりを覚えてしまえば位置を見失うことはまず有り得ない。……………随分と自信過剰に聞こえるのが酷く忌々しいが事実だ。

であれば、何某かの意思が働いていると考えるのが一番真面目まじめだろう。

(・・・女神、か・・・)

増産されていく疑問は何の意味も無い。この問答は既に諦めている。今この時『何故』を繰り返すのは愚か以外の何物でもあるまい。

一先ず今、確実に自覚していなければならない事象は『条件』だ。知覚不可能な距離を跳んだにせよ世界を移動しているにせよ、それらは生憎と自分なぞの意思とは全く無関係なようだ。しかし、息も吐かせぬほど唐突か、と問われればそれは違う。必ず俺は誰かと出会、大なり小なりの出来事イベントを体験する。そして段落の後、何時の間にか善くも悪い別天地をさ迷い歩いているのだ。要は、ここでも何かある。それだけだ。

(気配におひは三つ。一つは男。一つは女。もう一つは・・・)

もう一つ、気付いた事がある。

これは、憶測の域を未だ出ない・・・ともすれば、何とも押付けがましく卑しく下衆な想像だ。過去二つの出来事を終えて感じた違和感。三度目の今回で、それは確信に変わるだろうか。

(・・・衰弱している)

でなければ可笑しい。有り得ないだろう。この体がいくら都合よく捏造されたモノであったとしても、こうも連続して?・・・。

（この先か）

不必要な程に奥まり、三度目あたりから数えるのを止めた曲がり角を、もう一つ曲がる。

人のままなら無明の闇黒が広がっていただろう。しかし猫の眼を以ては昼間以上に鮮明だ。コンクリート製のビルが三方を囲い込んだ袋小路。コの字型のちよつとした広場は、とても静かだった。

だらりと力なく垂れ下がった腕。焦点の合わない瞳。肌は血色が薄れ、青くさえ見える。そして、首筋を伝う二筋の紅。

まず始めに、ソレがこちらを見た。

足元まで届く程に長い髪を揺らす、奇妙な衣裳の女。見た、と表現したもののその眼はバイザーで隠され、表情や視線を窺い知ることには難しい。しかし女は明らかにこちらに気付いた様子だ。

「？ 何してんだライダー。さっさと全部食っちまえよ。もうそいつ、要らないからさ」

傍らの男がなにやら喚くも、女はそれを無視してこちらを注視し続けた。それが気に食わなかったのか、途端に男が怒鳴り散らす。憶測でものを言うのはあれだが、少々短気なようだ。

「おい！！聞いてんのか！？ライダー！僕の命れ「下がりなさいシンジ」え？」

静かで艶のある、冷酷で寒気を催す声音で以て女は男を黙らせた。到底人間は発せられぬであろう冷氣が空間を急冷させていく。まだまだ不確かだが、殺気の矛先は間違えようも無く自分だろう。そして、予想は的中した。目の前の女は人間に非ず。

「な、なんだよいきなり。あ？猫？ど、どういづつもりだよライダー！？おま」

「何者ですか？あなたは」

喚く男を女はまたも無視した。いよいよもって向けられる殺意は明確に明瞭に、ナイフのように突き刺さってくる。

まあ、無視したが。

「・・・・・・・・」

床に寝かされた女、否、少女はぐったりとしている。目立った外傷は無く、精々が首筋にある二つの小さな穴ぐらいだろう。しかし、時を追う毎に衰弱は進んでいる。体温が極端に低い。唇はチアノーゼを起している。そして明らかに体内の魔力が本人の大きさに見合わないのだ。このまま行けば確実に衰弱死する。何故？考えるまでも無い。

「!？」

「なっなん!!?なんだよコイツ!!!?」

猫の身が落とす小さな影が、堰を切ったかのように溢れ出す。

安寧だった暗闇は、どす黒く濁った黒が飲み下す。

地面を、壁を、影を伝い、袋小路は黒で塞がった。

「ノスフェラトゥ吸血鬼……!？」

女はじゃらじゃらと何処からとも無く鎖付きの鉄杭を取り出した。

同時にこちらは、自身の両側の影から二本の腕を這い出す。ぬらり

と取り出すのは二挺の拳銃。銀十字を鑄溶かして製造された13?

爆裂鉄鋼弾と法儀式済水銀弾頭を腹に収めた対化物戦闘兵器、45

4カスールカスタムオートマチックおよび13?拳銃ジャッカル。

白と黒、巫山戯た大きさの銃口を、迷い無く対する化物に向けた。

「ひいっ!!?じゅ銃なんてっひ卑怯じゃないか!?おお前サーヴ
アントなのか!?ライダー!!?な、なんとかしろよ!!!」

血の気が失せた様子で腰を抜き、必死に地を這って後退る男を背
後に、女はこちらを見据えている。こちらの出方を窺い、攻め方を
考えあぐねているのだろうか。待ってやる道理は無い。引き金に指

を掛けた。

「っ！」

女が飛び上がったのと銃が弾を吐いたのはほぼ同時。

一気に吐き出される弾丸を女は驚異的な速さで壁を蹴ってかわして行く。コンクリートの壁は女が通った形跡をなぞる様に抉れ砕け、ばらばらと破片を撒き散らす。と両拳銃のスライドが開き切る。弾切れか。

見過ごすはずは無い。女が壁を蹴って跳んだ。目標は黒猫の本体。接近しながら女は鉄杭を投擲した。噛んでおいた銃剣で杭を弾き飛ばす。

「な!？」

武器を構えていた事が予想外だったらしい。驚愕して女は勢いをそのままにこちらに向かって飛んで来る。杭を引き寄せるのはこの距離では不可能。予想外の武器の切先が女を狙っている。表情を歪めて女はそのまま防御の姿勢を取った。俺は女をやり過ごした。

「!?!しまっ——」

女の声を背後に聞きながらへたり込んだ男へ向かって駆ける。一瞬

で距離を詰めた為か、男は呆けてこちらを見るばかり。

銃剣で上着を切り払う。横一文字にバツサリと斬られた男の服から出てきたのは、小さな本だった。本を咥えて倒れ付す少女の傍らへ。男は尚も呆然とこちらを見ている。胸元へ視線を落とした。もう一度こちらを見た。目を見開いて身を震わす。口がぱくぱくと動いているが、出すべき言葉を忘れてしまったようだ。

初めから、あの女とこの男を繋げる『糸』のようなものの存在は知覚していた。そしてその糸が男本人に繋がっていない事も。意味があるかどうかは半ば賭けだったが、どうやら勝ったらしい。女は動きを止め、男は顔を真赤にしてこちらを睨んでいる。

「か返せ！！それは僕の物だぞ！！ライダー！そいつから本を取り返せ！！！」

「・・・・・・・・」

声を張り上げる男に対して、女は無言だった。身を切るような冷たさは鳴りを潜め、代わりに男へ今までとは種類の違う凍て付いた視線が向けられている。

男は更に吼えた。

「何してんだライダー！！僕の言うことが聞けないのかよ！？僕はお前のマスターなんだぞ！！その畜生殺してさっさと本を取り返せよ！！？」

「いいえ、シンジ。あなたはもうマスターではありません。偽臣の書を奪われた今、最早あなたの負けです」

頭が沸騰したかのように怒り狂う男とは違い、女は奇妙なほど冷めていた。何処までも対照的な両者。男の熱は冷める兆しも見えない。見知らぬ用語が飛び交う会話の内容にさして興味は湧かなかったが、いつまでも待ってやる義理は無かった。

再装填したジャッカルで男の足元の地面を撃った。強烈な銃声と同時に地面が吹き飛ぶ。

「ひゃあっ！！！！？」

13？などというこれまた巫山戯た弾丸は地面に小規模のクレーターを作った。

奇妙な叫びを上げて男が飛び上がる。ガクガクと震えながら銃口を見上げ、次いでようやくこちらの視線に気が付いた。

暗所故に光っているだろう鋭利な瞳孔は、相手を威圧するにも効果を發揮してくれる。俺はなるだけ声を低めて、冷たい声色で以て言葉を紡いだ。

「失せろ」

引き攣ったような音を男の喉から聞いた。碌に立たない足腰を無理矢理引き摺って、男は路地から出て行った。

.....

「.....まだやるのか？」

女は無言でそこに立っている。今のは一応両者に向けて言ったのだが。
こちらの言に何故か女は首を傾げた。まるで不可解、とても言いたげな風情で。

「.....あなたは、サーヴァントではないのですか？」

「違う」

先刻男が言っていた言葉に自分は該当していないだろう。半ば投やりにも取れる即答を返す。
思考を頭から追い遣った。目の前の少女はそろそろ危険だ。体内の魔力が枯渇している。体力回復は可能だが、魔力の補充となれば.....

「エーテル」

咄くと同時に薬瓶が目の前に現れる。瓶の内部で揺れる液体は飲んだ者の魔力を瞬時にして回復させる。便利なもので。
俺は早速瓶を.....

「・・・・・・・・・・」

「？」

瓶の蓋を開けることは可能だ。中身が多少零れるが、極少量でも摂取すれば命は取り留める。

では、その極少量を、己はどのようにしてこの少女に飲ませる？

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

焦りが全身を覆い出した。思考をフル回転させ魔力回復の手段を探す。しかし脳内の雑多な情報から吉報が送られてくる気配はない。決して好きではなかったが、今この時はつきりと俺は俺を憎悪した。愚かしいにも程がある。無能は害悪とは誰の言葉だったか。是非とも自分にのみそれをぶつけて欲しいものだ。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・あの・・・・」

未だ背後で立つたままの女が不意に声を掛けて来る。それが自身に

向けられたものだとは理解できず、数瞬反応が遅れてしまった。

「なんだ」

「それを、飲ませれば良いのですね？」

「？ ああ」

いつの間にか女は自分の隣で屈みこんでいた。女は薬瓶を手に取り、とコルク栓を抜き、一気に呷った。

頬が幾分膨らみ、口がもごもごと動いている。女は少女の頭を持ち上げ、そのまま深く口付けた。

少女は一瞬苦しげに身を引き攣ったが、しばらくすると大人しく薬を嚥下していく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ふう・・・・・・・・これで良いですね？」

「ああ、すまない」

別段何の問題も無い。気絶した人間に薬を飲ませるには多少コツがあるもの。その点口移しは効率と言う観点において非常に優れているだろう。女がなにやら不敵に微笑っているのも大した意味は無いのだ。

だがこれで、この少女は助かる。外傷は無いに等しい。自身の愚に

よって誰かが死なずに済んだのだ。こみ上げて来る安堵に意図せず息を吐いていた。

傍らの女を見上げる。女はしばし不思議そうに自身の体を見下ろしていたが、こちらの視線に気付くと表情を消して向き直った。

「ありがとう」

「え？」

「おかげで助かった」

礼の言葉は簡単なものだったはずだが、女は難しい顔をして困惑の体でこちらを見下ろすばかりだった。或いは酷く、極まりが悪いと言いたげな。

生憎とその悩みに付き合っている時間は自分には無い。おそらく、そろそろだろう。

少女の襟首を咥えた。早々に路地裏を出る。深夜とは言え表通りなら人がいるはずだ。と

「・・・・・・なんだ」

「運ぶのでしょうか？私がやります」

女が少女を軽々と抱きかかえてしまった。今度はこちらが困惑に駆られる。その表情が愉快なのか、女は薄く微笑んだ。

「仮初とはいえ、マスターに負担を掛けるのはサーヴァントとして承認できませんので」

「マスター？……なつた覚えがない」

女は少女を抱えたまま器用に指で地面を、こちらの足元を指す。

濃い土色の素朴なデザイン。厚さのわりに比較的小ぶりの本が無造作に転がっていた。もう一度女を見た。無言で見返された。……

・成程。これは縛るモノだったか。ならば仕方が無い。

本を咥える。女は小さく頷いた。本を女に投げ寄越す。女は素直に本を受け取り、何故か固まった。

「？……では、お任せする。ああ、その薬は差し上げよう。魔力の回復に役立つはずだ。副作用も無い。……世話になった」

「いや、え、ちょっま、あの」

「その子を頼む」

背を向けて歩き出す。人一人の安否を全て他人任せにする自分は無責任も甚だしいが、何となく、この名も知らぬ人ならざる女は信用できる。手前勝手な心象に、今回は頼ろうかと思う。

目の前の角を曲がれば、その先は

「待つて！違う！そう言う事じゃ！」

艶のある、黒く細い背中に手を伸ばす。突然出会った不思議な存在。何故自分はこうも、それを惜しいと思ってしまうのか。去り行く背中をこのまま黙って見送れば、自分はきっと後悔する。そんな気がする。

「待つ——あ……………」

角を曲がったその先には、猫の子一匹待つていてくれなかった。ただ薄暗いコンクリートの道が入り組んだ迷路のように伸びている。力なく、伸ばした腕が下がっていった。

「……………ふう」

息を吐いて、少女を抱き直す。仮初でも命令は命令。自分にはそれを完璧にこなす義務があるのだから。

「あ……………」

その拍子に本を取り落とした。パタリと地面に落ちる魔道書。自身を縛る忌々しいだけの本はしかし、何故かその時だけは、ひどく大切なモノのように思えた。

奇妙な出会いはこれで三度目。全てに傷や戦いがあった。しかし決してそれだけでは無かった。これだけは、断言してもいい。……………だが、一つ確信が出来た。当たって欲しくは無かったもう一つの『条件』。俺は、他者の、『生命の窮地と危急』を食い物にしている。

女神が与えるこの卑しい切っ掛けに、縋って掴んで耽溺する俺を、

どうして嫌悪しないでいられる。

第3話 街の路地裏を散歩（後書き）

更新の勢いが段々死んできました！・・・すみません・・・。

リリカル↓ネギまと来て次はF a t e。欲張るのも大概にしろって話ですね。お付き合いいただいて本当に幸いです。

それでは、読んでいただきありがとうございました！

第4話 暴走する列車を散歩

日の光を見たのは、なにやら随分と久しく思えた。

過去三度に亘る『移動』は、全て夜半だった所為か、木々の間から漏れる陽光がひどく眩しい。だが、決して不快ではない。柔らかな光は全身を緩やかに暖め、抗い難い眠気を誘った。或いはこのまま

「・・・・・・・・・・過ぎたる話・・・・・・・・」

そんなもの、俺に許されはしない。

何故なら俺は、他者の安息を踏み躪って今此処に立っているのだから。

世界を移動する為の『条件』。自分がそこにいるということは、誰かが命を落とさんとしているということ。

「・・・・・・・・」

女神の所為だ、などとほざけるはずがない。自身は既に、自ら生命を捨てた身なのだ。今更この身には境遇を呪う権利さえ有りはしない。俺に出来る事はこの、身に合わせ持ち腐れた能力ちからで以て、傍迷惑も甚だしい俺の罪惡に巻き込んでしまった人々を助けること――

――ただ、それだけだ。それ以外、無いのだ。

罪がどうのと悩めるのは真っ当に生きて死んだ者のみ。女神は言っていた。生き苦しめと。ならば俺は甘受しよう。罪を贖えなくとも、

せめて

「・・・・・・・・見付けた」

気配は多数。どれも高密度の魔力だ。奇妙な事にそれらの全ては等速で移動してる。多少の動きはあるが、ほぼ等間隔で動くとなると・・・・・・・・大型車両か。

そして更に遠方にはこれまた高高密度の魔力が二つ、戦闘を行っている。

「・・・・・・・・覚えがある」

大型車両に乗っていると思われる魔力の一つと、おそらく上空にて戦闘を行っている二つの魔力は以前に一度、嗅いだことがある。

さりとて、別段行動に変更点はない。あらゆる事態を想定し、全力を以て対処に臨む。この身を一々顧みる必要は皆無。最優先は何に代えたとしても人命。自身の何を削ったとて、一体何処に問題があるろう？

・・・・・・・・ほんの僅かでも命を繋げたなら、黙してこの世界を去ればいい・・・・・・・・。

林を抜けた先は切立った断崖だった。数十メートル眼下には線路が敷いてある。成程、貨物列車だったか。

多数の魔力達は、凡そ列車が出すべき速度を軽く超越してこちらに向かってきている。お詠えのタイミング。吐きそうになる。列車を目視した。俺は跳んだ。

「……巫山戯んなよ玩具……俺は生き苦しめつつた
んだよ……苦しむだけで、許してやると思ってたのか……
・!!!!?」

貨物コンテナは、外観のイメージに比べればかなり広大と言えた。
一人が全力疾走して最高速に乗る程度は造作も無い幅と奥行き。
更に貨物列車とは名ばかりに、積載された貨物の少なさも相まって、

少女二人が内部で大立ち回りを演じたとしても何の支障も無いはずだった。その、はずだった。

「ティア後ろ！？」

「分かってる！！」

碌に正視もせず振り向き様に少女は引き金を引いた。訓練時なら即刻教官に怒鳴られるような粗い動きだったが、この瞬間においてはあまり関係が無い。

背後の敵機はつい今しがた穿たれた穴から煙を吐いて床を転がっていく。嬉しくも何ともない。

「止まるなバカスバル！！」

「ティア今度は上！！！！」

狙いも定めず二挺の拳銃を天井に向けて連射。拳闘の少女はそんな傍らの相棒へ近づく有象無象を次々殴り、蹴り飛ばしていく。一連の動作だけで、6体ものガジェットドローン？型を一掃出来た。初陣の、しかもまだまだ経験の浅い彼女達からすればこの手際は快拳と言える。

「あははは……でも全然嬉しくないかも……」

「ばやいてる暇があったら一機でも多く破壊しなさい！こんな数、市街地に逃げたら大変な事になんのよ！？」

背中を合わせて二人は周りを取り囲む敵機を見た。うようよと何本ものケーブルが蠢き、無数の無機質な黄色の眼が二人を注視する。薄闇の中で、ソレらは酷く不気味であった。しかしそれ以上に

『ガジェットドローン？型、更に——後方車両！？まだ増えてます！！』

『空域に増援！？型です！スターズ1およびライトニング1交戦続行！』

ロングアーチから聞こえる通信は、切迫した現情をつぶさに伝えてくる。作戦開始から現在、情勢は一向に好転していない。

『気をつけてください！スターズ03スターズ04にガジェット接敵！！』

「ええ！？まだ増えるの！？」

「くっ……スバル！備えて！！」

貨物車に各分隊が取り付き、幸運にも車両前方に積まれていたレリツクの確保が迅速に完了して以降、一様に『これ』の繰り返しだった

た。

作戦開始前の索敵によって敵機の数の凡そは把握できていたはずの今回。唐突に流れは狂いだした。

まず第一に、車両内に潜伏していたガジェット？型の反応が何の前触れも無く突然『増えた』。第二に、高町一等空尉およびテストロツサ・ハラウン一尉が掃討したガジェット？型に突如として増援が加わり、今もって完全に足止めを受けている。

「だああー!!」

ギアを唸らせ鉄の拳を眼前の敵機へ叩き込む。対する装甲は紙細工のように拉げ、紫電を吐くと途端に爆砕した。

「っ!」

収束した魔力弾を発砲。コンテナ内部を縦横無尽に飛び回ったオレンジのボールは犇めく敵機を端から順々に貫き破壊した。

「こんのおお!!!!」

ローラーの回転^{トルク}数を上げる。高速の蹴りが空を走り、居並ぶ鉄塊を横一文字に切り裂いた。

バックステップで距離を取り、スバルは相棒の元へ。いつの間にか二挺拳銃でクロスミラージュを構えたティアナは今日何度目かになる溜息と悪態を同時に吐いた。

「くつ、執こい！全っ然減らないじゃない！！」

「うん、なんかまだ増えてるってリン曹長が言ってた。特に後ろがひどいって……」

「後方車両か……ってことはエリオとキャロが危ないわね……」

苦虫を噛み潰し、ティアナは唸った。敵の足止めとレリック確保の為、二手に別れたのは失策だったかもしれない。無理を通してでも全員で事に当たっていれば、この数相手でもここまで難儀しなかっただろう。舌打ちを一つ。たればはティアナの最も嫌う物の一つだ。頭を振って眼前敵機の動向に注視する。

しかし、アーチから送られてくる焦りの声は、こちらの焦りを写し取ったかのように耳朵を打った。

『っ！？敵機捕捉！新型です！車両中央に一機——！？い、いえ反応増加……さ、三機です！？ああもうまた！！』

「……ええい！！」

地団太でも踏みたいと切実に思う。

とそこで、ティアナは違和感を覚えた。いつも不必要な程大騒ぎするヤツが、ここに到って不気味な程静かなのだ。思わず背後の相方を見やってしまった。

相方、スバルの視線は眼前の敵機に向かっている。しかしその瞳は対敵を見てはいなかった。要はボケツと突っ立っている。ティアナは肘でスバルの脇腹を貫いた。

「がっふ!？」

「呆つとしてんじゃないわよ!あんた現状解つてんの!？」

「ご、ごめんティア……でももうちょっと手加減して……」

脇腹を押さえながらもなんとか姿勢は崩さなかった。今倒れてしまえば敵にとってこちらは恰好の的になる。
しかし未だ、スバルの瞳は過去を見るのを止められなかった。頭を過ぎった大切な記憶が何故今この時に、じわりと胸を満たしていくのか。

「……猫さんが来てくれたのも、こういう時だったなあ……」

「はあ?またその話?いい加減聞き飽きた」

「ええ!?ティアひどい!」

途端に発せられるスバルの苦言も、ティアナは早々に切り捨てた。訓練校時代から聞かされ続けてきた話だ。高町隊長の他に命を救ってくれた、不思議な喋る黒猫。魔法が発達したミッドチルダにおいて、喋る動物は別段珍しくもない。誰か救助隊の隊員が使い魔を持っていただけだろう。そう何度も言っただけ聞かせるのだが……

「違うよ、猫さんはそう言うのじゃなくてもっとう……不思議で、優しくて、頼りがいがある……」

「ああああ、もういいもういい、もうお腹一杯だから」

何故かいつも惚気話に成り代わっているのだ。頬を染め、子供のように、心底嬉しげに語る様は恋する乙女そのものだが、相手が猫というのは一同僚として非常に心配になってくる。

同僚の心労を知ってか知らずか、スバルは尚も想いを馳せていた。予感にも似た期待。

「……猫さん……」

ロングアーチ内の空気は、乱れに乱れていた。索敵のミスがあったに違いないと自責に圧される者。事態の変化の目まぐるしさに混乱する者。

眼を細めて眼前のモニターを睨む者。八神はやては椅子に腰掛けながら自身のデバイスを握り締めた。傍らの補佐、グリフィス・ロウランもまたモニターに苦い視線を投げている。

「……一体、どうなってるんだ。貨物車内部に転移魔法の痕跡、いや、魔導師は？」

「さっきから探査を^{サーチ}掛けてますが捕まりません！というか、いるかどうかさえ……」

「っ！……」

正体不明の危急。無意識にグリフィスは拳を握っていた。敵の正確な戦力も掴めない、時間が経てば数で劣るこちらがいずれジリ貧になる。まるで暗闇に石を投じているかのように、不安ばかりが急ぎ立てられた。

「大丈夫だよ。あの子らはそう簡単に崩されるような子じゃない。……それに、いざとなったら私自ら出てく」

不安の払拭を図ったはやての微笑みはしかし、その強まる瞳の力強さが意味を取り去ってしまった。この場において誰よりも危惧を抱いているのは、他ならぬ、彼女なのだ。

「……なに、これ……」

「シャリーリー？どないしたんや？」

窮していた思考は、コンソールに向かうシャリオ・フェニーノの眩きによって中断された。シャリオの声はよくよく聞けば驚くほどに弱々しく、そのあまりに啞然とした口調が実際より大きく、はやての耳に響いてきたのだ。

シャリオはモニターを見ていた。長い長い貨物車両が岸壁に沿って高速で走行している。・・・否、彼女の目は画面中央の大写しを見ていない。画面の端、敵機の反応を赤いマークで記した貨物車両の略地図？・・・。

「・・・・・・・・！？ シャリーリー！報告を！！」

「あつ！はい！さ、最後尾の、車両内のガジェット反応が！——
今、消えました・・・・・・・・っ！？次の車両もです！！」

「なんなんだよ！？今度は何だ！？」

最早内心の混乱を隠すことも出来ずグリフィスは叫んだ。是非はやてもそうしなかったが、今は一刻も早く事態を正確に把握しなければならぬ。

急速に消えていく赤いマークを見据えながら、はやては祈るような心地で椅子に掛け直した。

噛み締めた黒い大刀——始解の斬月を真横に薙ぎ払った。鉄屑は避ける素振りを見せるも圧倒的に速度を欠いている。一気に4、5体の鉄塊が爆発と共に粉々になっていく。……。破壊出来るのは幸いだが、一々火を吹かんでもよいのではないか、などと愚考してみる。

最後尾の車両に続き、二両目の掃討も終わった。数は多いが、強度も速度も攻撃力も特質すべき点はない。強いて言えば黄色い目から熱線が出る程度。能力の行使は不要と判断し、構成する霊力だけで十分に力を発揮できる斬月を以て対処している。

貨物車に飛び乗った後、敵が最も密集していると思われた最後尾から掃討を始めた。機械仕掛けの兵器と思われるそれらは、こちらを視認？すると迷うことなく攻撃してきた。ケーブルの触手に付いたアンカーによる単調な打撃がそうそう当たるはずも無く、少なくともここまでは順調だ。

「問題は、デカ物三匹」

三つの知らない魔力が、現在そのデカ物三体を同時に相手取っている。前半は非常に危うい戦闘だったが、途中傍らの小さかった魔力

が急激に増大したことで、なんとか持ち堪えてはいたのだ。一体目までは。

「……挟撃か」

車両前半側に一体、後半側には二体、件の二人と一匹はちょうど中央の車両に陣取っている。位置関係を見ると最悪と言わざるを得ない。せめて車両を移動……否、不用意に飛び上げれば熱線のいい的だろう。

ならば話は早い。俺が後ろからその二匹を叩き斬れば好い。

「っ！」

床を蹴って跳ぶ。天井を斬り飛ばした。天井に穴を穿ち、再度床を蹴り付けて跳び上がる。

轟々と風が唸る車上に降り立つと、早速目的のデカ物を少し遠目に確認した。球状だと一応当たりは付けていたが……以後ボールと呼ぶ。こちらに背？を向けるボールからは、先程相手にしたカプセル状の敵機と同様の赤いケーブルと、野太い鉄の触腕が二本伸びている。主立った攻撃手段はあれのようだ。或いは熱線か。

一つ明らかなのは、カプセル状の鉄屑とは比べ物にならない程強化が成されている、ということぐらい。

「はぁぁぁあ！……！」

対するのは、槍を掲げた年端も行かぬ幼い少年。生半な斬撃では到底届かぬであろう対敵の装甲に、而して少年は断じて退かなかった。血の焼ける匂いがする。見れば幾筋もの青い閃光が少年を狙い放射されている。傷口からは血が滴り、少年が動く度車上を赤く汚した。

「フリード！ブラストレイ——ファイア！！」

対するのは、巨大な白い竜に跨った同年代であろう少女。竜を必死に手繰り、魔力を崩すあの不可視の壁を前に炎が掻き消えようと、その目は決して戦気を失わなかった。しかし恐怖はある。竜が傷付く度に少女は怯えたように顔を歪める。まるで自身が傷を負ったかのように。

.....

「——」
「正解」
「——」

自分の招いた結果に、怒るべきか、嘆くべきか、悲しむべきか。

『下らねえ事考えてる暇があんなら疾く動け阿呆』

背中を押す、所か突き飛ばす程の懐かしい憎まれ口は、錯覚だったのかもしれない。

新型、とだけ呼称されるこのガジェットドローンは装甲の厚さ、単
純な出力、搭載されたAMFの完成度など、あらゆる機能において
旧型を凌いでいた。生半な構成の魔法は構築した端から分解され、
対魔導士戦では間違いなく脅威となるだろう。

そして勿論、硬い合金で覆われた堅固な装甲を魔力の補助無しで傷
つける事など、まして斬り裂くなどありえない。仮にも槍使いに身
を置くエリオ・モンディアルは今の今までそう思っていた。

「……………あ」

数秒の間、声の出し方を忘れてしまっていたようだ。エリオは眼前
の光景を改めて認識する。

大上段からガジェット新型は斬り裂かれていた。熱したナイフでバ
ターを溶かし切る様に。切断面はとても綺麗だ。

文字通り二つになったガジェットは、ゆっくりと列車の両側に落下。
そしてガジェットの代わりに現れたのは、鍔も柄も刀身さえ黒く染
まった異様の剣を咥える、剣以上に黒く、黄金の双眸を持つ猫だっ
た。

驚愕してこちらを見る少年。

悪いが無視させて貰おう。瞬歩を使い眼前に居たボール二匹を越え、まず少年が相手にしている一体を破壊した。次いで、残りの二匹の元へ急ぎ駆ける。

通り過ぎ様に少年にケアル。

「え……あれ！？傷が！？なん、ちょっ——」

無視させて貰う。

上空には巨大なワイバーンとそれを操る少女がいる。ボールのケールも触腕も届かぬ距離ではあるが、黄色の目が竜を見ている。青い光がレンズに集まり——斬月の刺突が深々と突き刺さった。態々撃たせてやる道理が無い。

バックステップで距離を取り、ボール二匹を見据える。熱線の穴を潰しただけなのだから前方の一匹は当然まだまだ元気だ。ただし標的が上空の彼女達からこちらへ移ったが。重畳。

「え！？なんで猫が！？」

少女が聞くからに驚愕した声を上げた。無視・・・は出来ないか。
『掃討』に巻き込む訳にはいかない。

少女は尚も困惑の様子でワイバーンを手繰って列車に併走した。視線が調度こちらと合う。話が早い。

「あの！あなたは使い魔の方ですか！？味方の 「離れている」
え？あの」

「離れる！！」

「は、はい！！？」 『きゅくー！！？』

与えられた靈力を天鎖斬月は貪欲に喰った。途端に溢れ出す黒い靈圧が列車をさらに震動させる。意思があるとも解らない眼前のボールは、或いは何かを感じ取ったのか、触手を伸ばして俺に迫り来る。刀は下段に

「・・・・・・・・月牙・・・・・・・・！！」

全身に力を籠めて、体は車輪のように回転。列車の天井を斬り裂きながら、刀を正面へと斬り上げる。

「天衝オオオ!!!!!!」

黒い牙が、列車の半分を飲込んだ

長さが元の半分になった貨物列車は程なく停止した。
後ろの車両にいる鉄屑を全て破壊する為とはいえ、列車ごと斬ったのは粗末に過ぎた。手際の悪いことこの上ない。

「あ、あの……………」

恐々とした声は背後から。振り返れば、先の少年と少女が困惑の眼差しでこちらを見ていた。

この子らが組織立って動いているのは解っていた。誰かの指示を受けて任務をこなしている。それともこの世界における警察機構のようなものだろうか。何にせよ、消える前に俺はしなければならぬ事がある。

二人にまっすぐ視線を合わせ、頭を下げた。

「すまない。出過ぎた真似だった。本当に今更だが、謝罪する」

「え……………ええ!? いえ、そんな!？」

「あああのそんな私達は別に！！」

目に見えて、気の毒な程に二人は取り乱した。謝罪しているのはこちらなのだが、その様が随分と可愛らしく思え、不遜にも笑みが零れてしまったのは無理からぬことだろう。

一応のけじめだけは付けた。この程度で片付く事ではないが、自分にはこれ以上何も出来ない。無能。

時間も残り少ない。謝罪する以外何も出来ない自分に酷く唾棄したい気分だが、子供がいる手前自重するしかあるまい。

「……いや、一つだけまだしていない。これこそ不遜以外の何物でも無い行為だ。しかし、しないままにいる事は俺が耐えられないのだ。居住いを正し、少年達に向き直った。不思議そうに首をかしげている。」

「………ありがとう」

「「え」」

無事でいてくれて、ありがとう。

少年と少女、エリオとキャラは呆然とその場に立ち尽くしていた。目まぐるしく流入する様々な事象が二人の頭の中を駆け巡り、理解も納得も追いつけない。

スバルとティアナは小走りでそんな二人に合流した。

「二人とも！！今なんか物凄い揺れ！つてええええ！！？列車が無いよ！？」

「・・・・・・・・さっきのはこれか・・・・・・・・これ、フリードがやったの？」

仰天するスバルに比して、ティアナは幾分冷静に二人へ向けて問いかけた。多少損害は大きいが、敵機の数増加量を鑑みれば、成程確かに効率的ではあった。線路も無事なようだし。

しかし、返答はいつまでも得られなかった。エリオもキャラも、まさしく心がここに在らず。ティアナは怪訝な面持ちで再度口を開きかけ

「猫が、いたんです・・・・・・・・真っ黒い・・・・・・・・」

「それから、突然、私達の目の前で消えて・・・・・・・・」

「・・・・・・・・え」

「猫？」

四者の在り様はそれぞれ。エリオとキャラは未だ混乱の最中に、ティアナは現状の不可解さに思わず顔を顰め、スバルは望郷とも喜びとも付かぬ感情に涙を湛えていた。

薄暗い室内を照らす灯りは壁一面のモニターのみ。コンソールを異常な速度で叩く男は隠しきれない喜色に口元を歪め、傍らから発せられる呼び掛けに対し、しばし反応を示すことがなかった。

「博士」

「やあ、君か。どうかしたのかね？」

「刻印No.9、護送態勢に入りましたが。追撃戦力を送りますか？」

「ああ、今はいいよ」

「・・・・・・・・・・」

ようやく返答を寄越した男のあまりに無関心な物言いに、モニター上の女は数瞬言葉を失くした。

「・・・・・・・・彼女達のデータを取れたから、ですか？」

「くつくく、それも今は些細な事さ・・・・・・・・！」

キーを押す軽快な音がしばらく続く。貨物列車を大立ち回る少年少女達の画は程なく消え、一瞬で画面は黒に切り替わった。愉悦に男の顔が歪む。視線の先で存在するモノを信じられないという目で眺めている。

「-の前には全て些事だよ！AMFも装甲も-の前では意味を成さないじゃないか！？魔力ではない未知のエネルギー！何者も追いつけない速度と体躯を超越した力！！極めつけは最後だ！ジャミングを掛けられた訳でも対象が死んだ訳でも無い！こちらの機械的、電磁氣的、熱的、音響的、化学的、魔力的なセンサー全てを掻い潜って対象は消えた！？^{ロスト}神の御業としか思えない！！興味深い！興味深いよ！！猫君！」

「・・・・・・・・・・」

女は知っていた。男のこの悪癖が出てしまった以上、物事が簡単に終わるはずがない。趣味を謳歌する己が主人を、女は溜息混じりに見守ると決意した。

事情さえ語らず、年端も行かぬ子供に謝罪と感謝を押し付けた。女神が一体何を望んでいるのか、『何故』が頭の中身を抉り、酷く頭痛を来す。

子供達が無事だったと安堵する自身を、卑しいと罵り詰るのは、これで幾何千回目。

第4話 暴走する列車を散歩（後書き）

いつもより長いです。どうかお時間のあるときにでも読んでいただければ幸いです。

別に自分は大した量の小説を書いているわけではないのですが、主人公の苦悩を描くの初めてかもしれません（自分の小説の主人公は基本悩みません）……………。
整合性がやばいかもですが、生暖かく見守っていただけると作者のチキンハートは安泰です。

それでは、読んでいただきありがとうございました！

第5話 血の海を散歩

松明が目を焼いた。

月が陰り星さえ暗雲に覆い隠された夜空は、先程までただただ濁った暗闇によつて森を包んでいたはずだった。

金属が擦れ合う耳障りな音と、いなか嘶く蹄の音が周りを取り囲む。焼けた松脂の臭いは噎せ返り息苦しかったが、何より息を詰らせたのは甲冑に隠された男達の目。

「なあおい、さつさと済ませよう。もう虫の息だ」

「いいや、まだ油断出来ん。相手は真正銘の化物だ。首を切り落としたとて、首だけで逃げ果せるかもしれん」

弓を構えた男が一人、隣の大剣クレイモアを握る男をせつつく。大剣の男はそれを諫め、周囲の仲間へ同意を求めるように声を張る。反意を示すこそが異常、とでも言いたげな沈黙がそこにはあった。蹄の音を響かせて、馬に跨る騎士甲冑が言葉を繋いだ。リーダー格らしい。

「手順はいつも通りだ。心臓に杭を打ち込み、首を切り落とした後、焼いた死骸の灰を川へ流す。二度と地獄から舞い戻ることのないように」

朗々と、甲冑は慣れた口ぶりで語る。今まで幾度も行ってきただろ

う古来よりの駆除法。

「だが、早々に済ませたいのは私も同じだ。もう二、三本足に打ち込め。そうしたら首を落とそう」

騎乗の甲冑が手を上げる。弦が引き絞られる音がして、甲冑が今度は手を下ろし――

「ひぎいっ!!?」

灼熱に晒されていた足に、今度は溶岩をかけられた様だ。元から針山のようなだった足に三本の矢がまた新しく生えた。うつ伏せのまま足を見やる。血で真赤だった足は赤を通り越してどす黒い。ただ、数十の矢は手当たり次第に肉を削いでいったため、むしろ白い骨の方が目立っている始末。

「ふう、ようやく終わりか。うつ、今夜は冷えるな……帰ったらワインで温まるか」

「そこは、女の手料理、だろうが。冷たいなおい。ヨランダが悲しむぜ」

貫かれた腹の穴からは血が止め処なく流れて、地面を這った跡に倣って赤い道を描いていた。

「いいんだよ。ワインの後ちゃんとあれで包んでもらって温まるかな」

「ははは！言ってるこの助平！」

先刻ハンマーで叩き折られた右腕から、もう痛みは送られてこない。ぶらぶらと揺れて煩わしいだけだ。いつそ引き千切ってしまうのか。

「その二人、無駄口を叩くな。残念ながらこの後は隊総出で宴会だ。女を抱けるのはまた今度だと思え！」

林が笑いで包まれた。男達の低く大音な声は打撲と瘤と矢傷だらけの頭に酷く響き、内側から激しく鐘を鳴らされたように痛んだ。

「あつぐ!？」

「よつと」

髪が引つ張り上げられ頭を起された。ぶちぶちと音がした。頭皮が引き攣る。頭は内側からの痛みと相まって、まるで痛覚で出来ているようだ。いつそ叩き潰してしまおうか。

「まずは首だ。外すなよ。喚かれたら煩い」

「へえへえ、それじゃ。よっこらせつと！」

頭上には鈍い金色。炎に照らし出された銀の大剣は、揺らめく緋色でその重厚さを増していた。

（ああ、死ぬな、これ……）

既に色彩を欠き、白黒の映像を垂れ流すだけの機能不全な脳が、要らぬ回答を寄越した。

自分はここで死ぬ。それはもう呆気なく。枯れ木のように。雑草のように。私の命は刈り取られる。

最初に感じたのは安堵だった。

やっと終わる。苦しいことから開放される。もう、人を怖れながら隠れ生きる必要もない。住処を追われるのも、忌み嫌われるのも、傷付けられるのも、傷付くのも、今日で最後なのだと。

「……っつー！」

安堵は一瞬で恐怖に成り代わった。

嫌だ嫌だと心の内で叫ぶ。終わる恐怖で体が震える。傷付いて、沢山痛い思いをして、今まで何千何百回と涙を流して、結局自分は何なのだ。

周りの甲冑から覗く目に映っているのは傷付いた生き物ではない。目の前を飛ぶ羽虫、通行に邪魔な細木だ。ただ目に付くから、在るのが気に入らないから、殺す。憎しみも怒りも、まして復讐心なんて暖かい感情、そこには無い。

笑って冗談を言い合いながら、道端に落ちているゴミを掃除する。ゴミに誰が、感情を剥き出しにするだろうか？

死ぬのより、傷付くのより、私はその目が、何よりも怖い

「おい、ちゃんと上げる。暗くて見辛い」

「わるいわるい、これいきなり重くなって・・・よっと！」

「づつ・・・」

抗う力などそもそももう無い。力任せに引っ張られた髪がまたぶちぶちと何本か抜ける。振り上げられた剣を見上げる力さえ無い自身は、ただ次に訪れる死を待った。

闇が濃くなった。

「失礼」

化物と呼ばれる者の首筋、薄皮一枚で男は思わず剣を止めていた。普段なら声を掛けられた程度では力を籠めて振り下ろした大剣が止まるはず無い。

もし止められていなかったら自分は死んでいた。

馬鹿な妄想だ。男はそれを脳内で一蹴する。

声がしたと思われる方向へ一斉に男達の視線が集まる。隊員達の付き合いは決して短くは無い。先の声は聞き慣れたどの仲間の物とも違う。

木々と林のそう遠くない位置から声は聞こえた。しかし奇妙。あたかも黒い壁が一枚空間を隔てているように闇は濃く、声の主はその姿を一切確認できない。兵長が闇に向かって声を張った。

「何者だ！姿を見せろ！」

「………ただの、通り掛りの旅の者にて」

兵長の大声に比べれば蚊が鳴く程に小さなはずの声は、何故かその場の誰の耳も聞き逃すことがなかった。
静かな声は続く。

「聖俗の方々とお見受けする。斯様な時間、斯様な場所で、一体如何な御用向きか？」

「ああ？見て解らんか。我らが主の怨敵、人民の安寧を脅かすこの化物を、正義の名の下に討伐しようというのだ」

当たり前過ぎる疑問に対し、少々の嘲りを含めて兵長が叫び返す。
しかし、声に誇らしげな色もまた含まれていることはありありと知れた。

静かな声に少々の困惑が混じる。

「・・・・・・・・・・化物？・・・・・・・・・・そこで怪我をしている娘子が？」

「ああそつだ。数年来に亘って領地内に潜んでおったのを見付けたのよ。年を経ても成長しないのを不気味に思った町人が報告し、発見に到った。ふんっ！数年とはいえ同じ街で生活をしていたかと思うと背筋が寒くなる。命拾いしたわ」

兵長は隠すことなく眼下のソレに唾棄した。

人為らざるモノ。人に害なす化物。死者あるいは不死者。吸血鬼。魔女。悪魔。呼び方は数え切れず、そしてそんなものに意味など無

い。この兵長、あの兵士、ここな兵団、彼らの領地に住まう多くの民、取り分け人間にとって、それは忌むべき象徴でしかない。

遙か古来より人の中に寄生虫の如く隠れ潜む化生の一匹を今まさに討ち取れるのだ。兵長他、兵士達は皆頷きながら喜びに笑顔を浮かべた。晴れやかに、武勇を誇り、剣を打ち鳴らす。

「・・・・・・・・・・ほう・・・・・・・・・・」

闇が、膨らむ。

静けさを増した森は風に揺れる葉音が響くのみ。虫一匹、獣・小動物の足音、月と星さえ見えず聞こえぬ今この時を、兵士達は気にも留めなかった。

静かな声は、また問うた。

「・・・・・・・・・・その娘は、どんな罪を？」

「うん？ははは！我々がそんな事を許すはずがない。こやつが悪逆非道を振舞う隙など与えることなく、ここまで追い込んだのだ」

今度は兵長ではなく、傍らの若い兵士が言葉を繋ぐ。自分達の迅速かつ適切な『処理』に、ただただ満足げだった。

凍てる声は、意図せず口を付いた。

口上を中断され、苛立ちを隠そうともせず兵長は怒鳴り散らした。鍛え上げられた体に裏打ちされた声量。大気を震わす程に大きなそれは、しかし、森を響き渡ることには無かった。木霊が無い。否、それ以前に、どうしてこの森はこれ程までに暗い？

ここに来てやっと、ようやく、初めて、兵士達は周囲の異常を意識に収めた。

「十字架を埋め込んだ銀の甲冑に銀の刀剣、ホワイトアッシュ白木製の杭と弓矢に大蒜が一束。皮袋の中身は聖水か？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

声は問う。誰一人として答えはしなかった。

声の静けさは相も変らぬ。しかし、先刻から聞いていたそれは、耳朶を打つ度に背筋を氷柱で突き刺すような刺激を催す、そんな常識なモノだったか？

「成程、対化物戦闘に特化した武装だ。見事と言える。ああそれと、こちらの方が本題なのだが・・・・・・・・」

そも、兵士達は自分達の今までの問答が酷く間抜けだったことを今になって思い知った。

真夜中の、それもこんな森深くで、どうして人間に出くわすはずがあるう？こんな場所で出会うのは季節外れの熊か、はたまた幽霊か、あるいは――

「お前ら、ここから生きて帰れると思うなよ?」

悲鳴を喰らい、絶叫を潰す。

血は森を汚し、血よりも紅い無数の目で空を覆う。

向かって来る大剣を折り砕き、刃向う心を叩き折る。

傷を、痛みを、絶望を、恐怖を、こいつらに必要なのはその全て、こいつらに見合う罰はその全て

——到底足りない。

弓を構えた男の手首を両方銃剣で切り裂いた。切断はしていない。

しかし半端な痛みを与えた心算もない。男は悶え涎を垂らしてその場に蹲った。

剣を捨てて逃げようとした男の足を落ちていた矢を投げて地面に縫い付けた。男がそのまま転び、地面に刺さったままの矢には脰の肉だけぶら下がっていた。

落ちた松明の火は木々に燃え移り、ドーム状の『影』を良く映し出している。逃げ惑う兵士が黒い壁に取り付き、必死にその向こうにある逃げ場を求めた。逃がす道理が無い。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

馬の足を影に沈めた。逃げる勢いをそのままに急停止した馬から甲冑の男が転げ落ちてくる。鎧が体の震えに合わせてカチャカチャと音を立てていた。そんな些細なものでさえ今この瞬間だけは極めて耳に障る。背中からジャッカルを握る腕を吐き出した。

「ひいつ！？あ、お、お前の望みはなんだ！？かか金か！？りよ領地か！？おおオレ俺は兵団長だ！！今すぐはやれんが領主にだってか顔がつき利く！！く国総出でお前にはさっ最高の待遇を約束する！！！」

撃鉄を起した。

「つつつつ！？！？！？おお女！！女だな！！？ななら国一番いや國中の女はお前のものだ！！それならどうだ！？な！？なあ！？や

やめろやめてくれっ！そそうかあのガキ！ああの小娘だな！？くれてやる！！好きに使え！っっ！！お俺は手なんて出しちゃいない！
！兵達が勝手に！お願い！許して！？たの――」

足を撃った。

大き過ぎる口径が足を貫通することではなく。脛を半ばから破砕。奇妙な叫び声を上げて、男は気を失った。地面を汚す液体。アンモニア臭が鼻につく。

周囲に紅く染まった視線を這わす。

既に目の前のコレ以外にも気を失った者が多数。それを踏み散らし、気が触れたかの様に俺から距離を取らんとする者が多数。

聞こえてくるのは恐怖の叫びと惨めな命乞いだけ。隣にいるのは最早仲間などではなく、目の前の化物にくれてやれる供物なのだと、その場の誰もがうわ言の様に語っていた。

コイツヲサシダスカラタスケテ

アイツハコロシテイイカラタスケテ

ミンナコロシテイイオレハタスケテ

ガキヲヤッタノハオレジャナイコイツダ

タスケテタスケテタスケテタスケテタスケテ――

救い様が無い。救う心算も無い。

「拘束制御術式参號、貳號、壹號……………！！！！！」
クロムウェル

擗り潰す。噛み砕く。飲み込んで狗の餌にしてやる。

「開ほ——！！」

体を縛る鎖を引き千切る最後の言葉。あと一言、あと一文字、あと一音節空気を震わせればここに地獄を作り出せる。簡単なことだ。容易いことだ。たったそれだけのこと

「だ、め……………！！」

体を包んだ血の暖かさは、炎熱したこの身には冷水にも等しかった。振り返り仰ぎ見る。

「——あ」

「だめ、だつ……………そんなこと、しちゃ、だめ……………っ！」

ぽたぽたと落ちて顔を濡らした。噎せ返るほど濃密な血の匂いが満ちたこの場所で、あまりにも弱く軟く微かな滴。

「猫！お前、が．．．．．そんな、なつこと．．．．．しなくて、いいっ！」

体を包む弱々しい細腕は、この身には何よりも強力な抑止力だった。この少女の傷は、愚かな、本当に愚かなことに俺はまだ癒していなかった。だのにこの少女は、ここまで這ってきたのか。意識はほとんど薄れ行き、血を欠いた体は凍える程に冷たいのに。

「もう、いいよ．．．．．怒ってくれて、ありがとう．．．．．
．．．．．」

「――」

痛みに耐え、涙を湛えた目を細めて、優しく微笑んだその少女に、正真正銘畜生の化物の汚らわしく賤しく唾棄すべき俺如きが――
――、一体何を言えようか。

夢を見た。黒猫の夢だ。

黒猫が私を見ている。ただただじっと、静かに、真直ぐに、悲しげに・・・優しげに。

嬉しかった。

初めてなんだ。『こう』なって以来、私を見る時の目は何時だって、恐怖か、嫌悪か、怒りしか、色が無かったから。

お前、一体誰なんだ？

「・・・解らない。どうも、その質問には答え難い」

じゃあ、名前は？それくらいあるだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・無いのか？・・・・・・・・

「いや・・・・・・・・レーフェン、という」

レーフェンだな。よし、覚えたぞ。早速だがレーフェン、私の物にならないか？

「無理だ」

・・・・・・・・即答かよ・・・・・・・・

「すまない。一身上の都合により、一つ処には留まらない」

どんな身の上だ。浮き草を『強いられる』って。

「・・・・・・・・すまない。・・・・・・・・そろそろ時間だ」

え・・・・・・・・・・そうか・・・・・・・・・・また、また会えるんだろう
！？

「・・・・・・・・・・」

なあ、おい！

「・・・・・・・・・・ああ、生きていてくれたなら、いつか」

よし！言ったな！？約束だぞ！いつか絶対に会いに来る！私が生き
ている限り！

「・・・・・・・・・・ああ、約束だ」

私は生きる！絶対に生き延びてお前を待っている！だから、お前も、
絶対に死ぬことは許さんぞ！！

「ああ・・・・・・・・・・ありがとう」

バカ！私の台詞だ！！

「マスター、風邪を引いてしまいます」

「んっ……………」

テーブルから身を起す。無理な体勢で眠っていた所為でズキズキと節々が痛みを訴えた。

窓の外からの日差しは、もうすっかり茜色。傍らの従者の心配そうな顔を見るに、結構な時間眠っていたらしい。

「まったく……………何百年前の夢だ……………」

「マスター？」

溜息混じりに出た呟き。不思議そうに従者は首を捻るばかりだ。愚直に約束を守り、あれから五百余年になる。あの、強い癖に弱気な黒猫は、今頃何処で何をしているのやら。

(……………おい、私は約束を守ってるぞ)

そして今なお生き続けているのは、偏に、会いたいからだ。

「生きて、会いに来い……バカ……」

空の茜は逢魔が隠し、何れ夜闇が包み込む。黒い夜空を見上げるたび、固く信じた約束を思い出してしまう。忘れる事など出来やしない。

彼女は今日も、黄金の優しい目を待ち続けている。

人命？何に代えても？助ける？守る？
嗤えるな。今しがたそれを喰おうとした畜生が。本当に救い様が無かったのは、俺だったのだ。

幸い、と安堵を得ることさえ卑しい事この上ないが、少女は一命を取り留めてくれた。自身の間抜けをここまで呪ったのは初めて、ではないか。無責任も甚だしく、少女が完全に目覚めるのを待たず俺は此処から消えねばならない。

・・・・・・・・最後の約束に、有ろう事が安寧を見出した自身を、果して俺は赦せるだろうか。

第5話 血の海を散歩（後書き）

勢いの減速度合が尋常じゃない、こんにちは足洗です。

すみません。遅れていつてます。更新頻度が本当に落ちてまいりました。

現在もお付き合いいただいている方々には感謝のしよつもございません。

読んでいただきありがとうございました。

第6話 武家屋敷の庭を散歩

街灯が疎らに道を照らす。家々の灯りは疾うに消えて、深夜の住宅地はとても静かだった。

ただ、住宅地と語ってはみたものの、この辺りは建物自体が少ない。静けさに拍車が、と言うよりは死んだように人の気配が無かったのだが。まあ構うまい。

「・・・・・・・・日本、だな」

それでも確認するだけなら十分だ。家々の様式や道々に立てられた標識から、ここが真正正銘“現代の”日本の何処か、ということに間違いはない。いい加減世界の『移動』には慣れたつもりでいたが、前回の体験からその認識を早々に破棄すべきと判断した。まさか世界移動だけではなく時間まで遡行するとは・・・・・・・・。

次回からは、縦しんば目覚めた場所が中世の欧州であろうと春秋戦国の唐土だろうと打石器と磨石器の使い分け時期の日本列島だろうと冷静にして沈着な対応を。

「・・・・・・・・出来るか」

脳内で繰り広げられる愚かな思考に終止符を。自身が断じて有能から程遠いという事実は、記憶が無かるうが既に知っている。

それに

冷静沈着？笑わせるな。人殺しが。

あの後、兵士達の傷は塞いだ。止血を施し、断った手足を繋ぎ直し、泣き叫ぶ声を背にして少女を連れて逃げ出した。身体の傷をいくら癒そうが、心に刻まれた恐怖が消えることはないものを。もう、あの者らが兵士として生きることが、出来ないのだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

後悔なぞ、烏澁^{あじ}がましさの極地だ。

殺そうとした。明確に、確実に、一辺の迷いさえ無く。少なくともあの瞬間、俺は目の前のモノを生き物などとは思っていなかった。ただ目の前にそれが存在することが我慢なら無かった。切り刻み、叩き潰し、跡形残らず消し去りたい。頭を占める感情、思考、反応はそれだけ。あの娘が止めてくれなければ、今頃は――

結局は俺も、あの兵士達と何も変わらないのだ。

「っ」

錯綜し混濁するぐちゃぐちゃと煩い頭を手近な電柱に叩き付けた。多少は力を籠めた心算だったが、傷付いたのは頭ではなく電柱。小さく亀裂が走る。

自身の下らない悩みに貴重にして有限の時間を割くのは無駄以外の何物でも無い。

高密度の魔力が近付いてきている。尋常の速度ではない。家屋の屋根を音も無く瞬時にして駆け抜けながら、どうも一箇所を目指して――目の前の武家屋敷に入って行った。

（屋敷の中には……人間が一人）

この種の魔力の組成には覚えがある。一度だけ対峙した、奇妙な衣裳の女。では、あの女に類する者か。

「！ 魔力が……これは、襲っているのか！？」

門を叩く暇も無い。塀を乗り越え、屋敷内に跳び込んだ。

息が上がる。震えが止まらない。大した運動量ではなかったはずだ。居間の床を転がり、縁側から庭の真ん中まで数メートルを全力疾走して、前転しながら死の刺突を死に物狂いで避けた。

そう、大した運動量ではなかったのだ。だのに、この心臓は持ち主の意に反して狂ったように鼓動を叩き込んでくる。冷たい汗が顎を伝って地面へ。震える体と荒くなるばかりの自身の息遣いが酷く癪に障った。

思考する暇を自分は今与えられている。目に前で薄笑いを浮かべる青い男は、先の数秒で七回は自分を殺せていただろう。

「どうした坊主？もう終わるか。さっきみたいに抵抗していいんだぜ？」

「っ！はあ、はあ、はあ………」

奇襲に反応し、続く槍の刺突を稚拙な魔術で以てあわや回避した一連の動きで、向こうに興が乗ったらしい。

こちらがまだ何かしらの反抗に及ぶのを見ようと言う腹か。全く迷惑極まりないが、それで今この瞬間の命を繋いでいられるのだから、下手に文句も言えやしない。

破天荒な姉代わりが持ってきたトンチキな土産物を握り直す。相手が油断していてくれるならそれに越したことは無い。何んとしてもこの状況を打破して、今は兎も角も逃げなければならぬ。

「ああ、そうかよ。何もしねえってんなら……もう殺すぜ？」

「っ!？」

殺気が膨れ上がった。鳴りを潜め、男が抑えていた濃密なソレは、密度はそのまま、巨大な覆いの様に自分を包み圧殺せんと纏わり付いてくる。ただでさえ苦しかった息が、今度は呼吸困難の様相を醸した。

（逃げる逃げる逃げる逃げる！戦う？そんな選択肢あるか！あと一回でいい次の一撃だけは絶対避けて――）

「じゃあな」

声を置き去りにして青い軌跡が眼前にあった。

紅い魔槍は引き絞られて、自身の心臓にもう狙いを定めている。避ける？逃げる？隙を突く？この青い獣に、自分が速さで勝てる道理が有ると？

迫る絶対死の前に、オレはただ、待つ事しか許されなかった。

「なに!？」

「え」

男が驚異的な速さで跳び退る。ほぼ同時に、男が直前までいた場所には深々とナイフが突き刺さった。驚愕して男を見る。しかし、男はもう自分を視界に収めてはいなかった。

「・・・・・・・・あ」

男の視線の先、月を背にしてこちらを見ている黄金の双眸。闇よりも濃い黒猫が、そこにいた。

状況は解らない。が、青い衣裳の男が少年を殺そうとしているのは自身の愚鈍な思考回路でも早々に理解が及んだ。相変わらず脳内を『何故』が跳梁跋扈するのは、いつもの事だ。

こちらを睨み据える男は、困惑しながらも既に槍の切先を自身へ向けてきている。放出される明らかに人外級の殺意は、今や少年を無視して自分一人・・・・・・・・一匹に殺到するのを感じた。好都合だ。標

的は移った。

「てめえ・・・・・・・・何モンだ？」

「・・・・・・・・」

男の問いには答えず、俺は未だ驚愕を顔に貼り付けたままの少年の前に出る。

先程投擲したプログレッシブ・ナイフを噛んで地面から引き抜いた。高振動粒子製の刀身が薄闇に淡緑の光を放ち、線を描く。

対する男が数歩身を引いた。同時に、まるでこちらへ来いとでも言いたげに顎で庭の真ん中を示す。槍の性質を考慮して、と言う風情ではない。どうやら、誘っているらしい。

是非もない。少年からはなるだけ距離を置きたい。

「——あ！？猫！？え、ちょっと待て！一体なんだってんだ！
？なあお前——」

少年が混沌の海から帰ってきた。次いですぐに混乱に陥っている。

訳も解らず、有無も言えず、つい今しがた生死を彷徨ったのだ。落ち着けというのは酷だろう。しかし状況を理解していないのはこちらも同じ。彼の疑問に答えてやることは生憎と出来ない。

今はただ、目の前の危急を退ける。

「お前、あいつを知ってるのか！？この街でなにが「蔵」の戸は開い

ているか？」……え」

「しばらくはそこで隠れている」

「で、でも……あちよっ——」

引き下がる気配も無い為、早々に無視させていただこう。

青い男へ向かって駆ける。背後で少年もまた蔵へ向かって駆け出したようだ。

……大人しく隠れていてはくれない。蔵から武器になりそうな物を物色して飛び出して来る……。会って数十秒の名も知らぬ少年の瞳は、存外雄弁だった。腹立たしい程に。

長々しい問答は不可能。一瞬で男との距離を詰めナイフを振り抜いた。当たる筈も無いが。

「おっと！いきなりじゃねえか！」

真紅の槍が刃を阻む。この体では鏑迫り合いなど出来やしない。刃と共に弾かれ、大きく後退して着地。

下段へ槍を構え直し、奇妙にも、男は酷く楽しげに笑った。

「へへっ成程、あのガキに出て来られる前に終わらせようって腹か？」

「……………この場を退いてくれるのなら、そちらを追う意思はない」

別段、戦闘に拘りなどありはしない。そのような矜持^{プライド}、俺には不相応もいい所だ。そして恐らくそれは、眼前の対敵にこそ相応しいモノであるのだらうと、碌な理解能力も備えぬ自身の脳ミソが訴えるのだ。

故にこの愚言

「聴く訳ねえよな!!」

「っ!」

五間の距離を一息で越えて男が跳び、紅き刺突は正確にこちらの喉笛を射貫かんと迫る。

横合いに避けながらナイフの刃で槍の柄を往なすが、既に『次弾』は装填されていた。

「避けたなおい!上等だぜてめえ!!」

陳腐な喩えを宛がうとすれば、鉄鋼弾を込めた機関銃^{マシンガン}で以て狙撃される、と言った所か。強すぎる、速すぎる、正確過ぎて話にならん。次々にばら撒かれる刺突を刃で受け止める度、ナイフを噛む歯が軋む。そも、このナイフの刀身は接触する物質を分子レベルで分離、切断する兵器のはずなのだが……………。

一瞬で避ける事に重点を置くべきと判断した。三合も受ければ顎が持たない。

「はっはあ！！どうしたどうした！？避けるだけかよ！」

秒間数十合と放たれる紅い弾丸に隙など無いだろう。刺突を避け且つ反撃に出るには、この間は余りに短く余りに速い。

ならば止めよう。ナイフを全力で振り下ろした。

「っんだと！？」

劈く金属音。軌道を変える槍の切先。先の三合の目算通り。素晴らしい威力で以て槍は深く深く、地面を柄の半ば程まで抉り刺した。男の驚愕を眼前に捉え、更に槍の柄を駆け上がる。刀身が欠けていようと大いに十分。対敵を袈裟懸けに――

「舐めんなああ！！！」

「かはっ！？」

横合いから拳が腹に減り込んだ。このちんけな体躯で、況して滞空した状態では、その衝撃に耐えられる道理は無く。俺は無様に吹き飛ばされ、次いで背中から『無事』着地できた。遮蔽物が無かった

事には感謝すべきだろうか？

（・・・・・・ああ、無駄に丈夫だったな。この体は）

傷らしい傷は無い。臓器も骨も問題無く稼働する。不意を打ち合った形なのだ。拳に十分な威力を乗せ損ねたのだろう。さて、この身がどう傷付いたか語ったとて誰が興味を示そうか。さつさと立ち上がり対する男を見上げた。

「・・・・・・てめえ・・・・・・ランサー槍兵に拳を使わせたな・・・・・・」
「！」

怒りに燃え盛り、紅い眼光が更に鋭くこの身に突き刺さる。

成程、中近距離戦闘においてこそ発揮される槍使いの力。蹴り飛ばせたならまだいい。それはまだ槍の間合。だが拳は、その間合からの接近を許したということ。彼なりの矜持が有ったのだろうな。

ただまあ、相変わらず口元は笑みを浮かべていたが。心底楽しげに、愉快げに。

「けっ！しみたれたマスター、しみたれた命令、いけ好かねえ弓兵野郎ときて、お次は何かと思えば猫かよ。それも飛び切り強えときてる・・・・・・」

「？」

喜色はそのままに男はつらつらと語る。．．．．．もしかしなくとも愚痴だろうな、これは。そして、一抹程の

「はあ、なあおい、おめえ人間に化けられねえのか？せめてよ。頼むぜマジで」

「いや．．．．．生憎と試したことは無いが．．．．．」

「試しとくだろそこは！ったく、妙な化猫だ。この国じゃ人間を化かすって聞いてんだがな」

自分の言葉が可笑しいのか、男はそのまま豪快に笑った。非常識さを笑っているのだとしたら、この男とて十分化猫に引けは取らないのだが。

唐突に、男はこちらを見た。異様な程真直ぐ、射抜く、などと生易しいものではない。貫き決っても尚進行を止めぬ、正しく武人の眼光か。

「俺なりの手向けだ。避けさせる気はねえ、が、おめえならどうか．．．．．なんてな」

「！？」

紅い槍に血が巡っているようだ。魔力が刃先に集中、凝縮されてい

る。それは殺意もまた然り。濃密で鮮烈で鋭利なソレを槍に集めて手繰り寄せ、ある一個の目的にのみ特化したモノ、絶対の概念が編まれていくのが、見える。

アレは出させてはならない。アレをやらせてはならない。でなければ、終わる。氷結した思考が狂ったように警鐘を鳴らす。防がなくては仕留めなければ。或いは、もう遅いのか。

「刺^{ゲイ}し穿つ」――

「ATフィールド……」

防ぐ。なんとしても。でなければ、あの少年は、もしかすれば、もっと別の誰かが。そんなものを許容できるか。
盾ではなく、聖域を分かつモノなら或いは――

「なにつ!？」

「!」

突如として剣閃が男を襲った。構えから一転、瞬時に男はそちらへと相対した。しかし完全に不意を突かれてはどうしようもない。防戦のまま男は一気に後退を余儀なくされる。

「っ!七人目か!?……くっそ!」

唾でも吐きかねない程顔を歪めて男が睨みつけるのは、蒼い衣裳に銀の甲冑、黄金の髪を夜風に靡かせ、凜として対する男を見据える少年だった。

「…………ちつ、ええいクソ！ようやく胸糞悪い令呪無しでやり合えるつてのに！」

「…………生憎だがランサー、ここで討ち取らせてもらっ」

「抜かせセイバー……………」

顔見知りという雰囲気でもないが、両者とも全くの無関係ではなさそう。互いに互いを同一視、敵視、している。ますます以て不可解。

「……………あ……………たく！白けちゃった。どうせてめえ相手じゃ本気も出せね……………目的も達したしな」

「！ 逃がすと思うか！？ランサー！」

「じゃあな猫！この勝負預けたぞ！！」

捨て台詞を一つ置くと、男は異常な瞬発力で屋根に飛び上がった。速度も然ることながら跳躍が弧を描かず成されたことに驚く。隙を見せず、且つ最小の動きで離脱するか。阿呆が如く思考する間に男

は既に夜闇へ消えていた。

甲冑の少年も速度は相当だったが、あれには及ばないらしい。追跡は断念した様子。こちらに歩み寄って来た。

「失礼。あなたですね。我がマスターの窮地を救ってくれたのは」

「………またマスターか………」

聞き覚えのある用語だ。未だ意味を理解出来てはいないが。

少年はその場で膝を付き、こちらの視線に合わせようと身を屈めた。律儀な。

「サーヴァント・セイバーです。使い魔殿とはこれより先、共闘の関係になるでしょう。どうか見知り置き下さい」

「丁寧な対応痛み入る。ただ」

「はい」

少年は膝を付いたまま首をかしげ、続くこちらの言葉を待った。引き締められていた表情から一変、年相応のまだ幼い容貌。印象は仔犬といったところか。まあどうでもいい話。

「俺は使い魔ではない。序^{ついで}でに言うと、恐らく貴殿の主人とも面識はない」

「・・・・・・・・・・は？」

ふむ、不意打ちだったらしい。口を開けて啞然としている。

しかし、これもまた好都合。サーヴァントとは仕える者を指すのだろう。この少年はどうも先程の少年に仕えているらしい。先刻の動きを見る限り、この少年は強い。並大抵なレベルを大きく超えて。

・・・・・・・・・・また、俺は他者へ事を任せたまま去るのだな・
・・・・・・・・・・。

少年が瞬きを一つ。こちらの表情から何かを感じ取ったのかもしれない。

「あの、では、あなたは一体・・・・・・・・・・？」

「外に二つ、大きな魔力がいる」

「え!？」

少年の疑問を逸らす様な物言い。反吐が出そうだ。

少年が正門に視線を向けた。

「・・・・・・・・・・襲撃に来た、という風情でもない」

「・・・・・・・・・・はい、正面玄関から中へ入る積りのようです」

表情に厳しさが増してきた。血気盛んとはまた違うが、少々猪突猛進な感があるな。

最後に一つ、釘を刺すでしょう。

「貴殿の主人との対話を望んでいるのかもしれない。交戦に移るのはそれを確かめた後だ」

「……ええ、そうかもしれませんが。ですが、警戒に越したことはないでしょう」

「ああ、そうだな。あの少年の事を頼む」

「え」

一瞬だけ、振り返った少年と目が合う。会話の内容が唐突だったからだろう。ひどく戸惑いの色が窺えた。

碌に謝罪の意思さえ伝えられない、その権利さえ希薄なのだ。せめて頭を垂れるくらいしか、俺には何も出来なかった。

せめてこの少年達が、無事であるようにと願い祈ることさえ、畜生には蓋し不相応^{けだ}だろうに。

第6話 武家屋敷の庭を散歩（後書き）

不定期更新ごめんなさい、足洗です。

今日の舞台は衛宮さん家の庭。未だに本編の方向性すら曖昧な中、どのルートへ行くかも決めていない始末……。

そろそろ流れを変えないといけませんね。意味不な小説に貴重にして有限のお時間

割いていただき、真にありがとうございます。

幕間1 そして女神の独白

「ちゃんと生きてるかい」

「・・・・・・・・・・」

「またぞろ、手前えのこつたろーからどーでもいいことで悩んでんだろ」

「・・・・・・・・・・」

「生きてりゃ、苦しいことなんて腐るほどあらアな」

「・・・・・・・・・・」

「でもさ、人間ってのは、そういうのの真っ只中で手前えの幸福を見付けてんだぞ？」

「・・・・・・・・・・」

「散々つばら苦労して、痛え思いも沢山して、悲しんで怒って泣いて喚いて、最後に一辺でも笑えりや、そりゃ幸福なんじゃねえかな。不幸に見合う幸福ってのは、案外難しいからさ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・なんで笑えなかったんだろなあ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「一回だけでよかったんだ。一回だけでもさ、笑えてりゃさ、お前——」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・大丈夫だ。もう失敗しない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いいか！好かれるには努力するのが必要だ！転生先でハーレム、

なんてのは魅了^{チャーム}の呪いか、媚薬盛るか、ギットギットの主人公補正ぐらいだ！（ただしイケメンに限る）てめえこの野郎、相変わらず猫のままかよ・・・猫のイケメンってなんだよ。それで射止められるのって雌猫と精々人のイノセンスだけだぞ・・・いい感じに私^{おれ}のこと無視してんだろ。いいじゃんイケメン、夢持てよ、チャンスだよこれ？・・・ったく・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・次はちよつと長期滞在だ。切欠は作った。フラグは・・・・・・・・まあガンバレや・・・・・・・・信頼は、自分で勝ち取れ。あと飯食いやがれ！睡眠もちゃんと取れ！一睡もしてねえぞてめえ！必要ねえとか割り切んな！・・・・・・・・人助けて、助けてもらえよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「卑しいって言うかな。あざとって怒るかな。烏滸がましいって嫌になるかな・・・・・・・・ああそうだ、私はそういう奴だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「生き苦しめ、レーフェン。生きるだけじゃ駄目だ。苦しむだけでも駄目だ。・・・・・・・・大丈夫、そっちの世界は、案

外優しいんだ――

夢と断ずるには現実味を帯び過ぎている。されど現実だと理解するのを頭は受け入れてくれない。

必死に投げ掛けられ、形を成していた言葉は、耳の中へ入っても脳に届く頃には砂と化していた。ただ、触れた手の暖かさは忘れられない。そしてあと半時もすれば、俺は全部忘れるだろう。優しい言葉も無事の親愛も、女の顔も。

せめて、生きて苦しむことの意味だけは、それだけは、忘れなくなかったのに。

幕間1 そして女神の独白（後書き）

意味不な文パート2

・・・・・・・・ごめんなさい、書きたくて書きました。後悔はしてません。異議は随時承ります。でも嘲られると作者は泣いちゃいます。

女神さんの目的は何のか、レーフェン君をどうしたいのか、そういうのはもうちよつと後ということで。

それでは読んでいただきありがとうございました！

第7話 一つ目の再会

来賓が列を成し、それぞれ受け付けに招待状を提示する。目当ての品を求めて集まったそんな好事家達の一団の中、一際視線を集める三人がいる。

提示された身分証を目にして、鼻を伸ばした受付担当の係員が息を呑んだ。見目の麗しさからは到底想像出来ない。時空管理局内でも指折の魔導士、孤高のエース達は美麗な衣裳に身を包み、微笑んでいた。

「警備、問題ないみたい。一般的なトラブルには十分に対処できるよ」

「うん。外は六課の皆で固めとるし」

広大なホールを回廊から見下ろしながら、一先ず警備の確認を終えた高町なのは、八神はやて、フェイト・T・ハラウンら三人は息を吐く。

本日開催される骨董美術品オークションの出品に、取引許可済のロストロギアが多数ある。昨今問題視されているガジェットドローンは、搜索指定ロストロギア『レリック』を目的として行動するよ

うプログラムされた兵器であるが、その探査の精度上、ロストロギアとされるものならば容易く誤認してしまうのだ。

故に今回、機動六課隊長陣およびスターズ・ライトニング分隊らはここ、ホテル・アグスタの警邏の任を帯びた。

「取りあえず、警備の体裁は整ったな。あとは無事オークションが終わればええんやけど……んで、その後、スバルはどないなっとなる？」

ホールに這わせていた視線を傍らの同僚達へと移す。意図せずして声音に恐々した色が含まれてしまうのをはやては自覚していた。そして返って来たのは、苦笑いが二つ。

「元気だよ？ つい昨日も、リボルバーナックルでホログラムのビルを半壊させてたし。それからこの前は食堂のスパゲッティをタバスコで山ほど『一人で』食べてたし。提出を頼んどいた書類がびっしり猫さん猫さん猫さんで埋ってたし……」

「私が見た書類には絵が描いてあった。うん、とっても上手だったよ？」

予想はしていたし、実際はやても目にした事である。それでも、胸一杯の溜息が漏れるのは無理からぬことだろう。うん。

先のレリック回収任務の折、様々な意味で現在六課内に影響を及ぼしている謎の黒猫。厳密に言えば六課のフォワード陣、スターズ分隊フロントアタッカースバル・ナカジマ二等陸士に。

「………解った。来てくれるかは五分五分やけど、なんとかして今日捕まえよ。噂の猫君………」

「にはははは………うん、正直今日の任務にも連れて行けるか心配だったんだ。早くその猫さんにスバルを元通りにして貰わなくちゃ！」

固い決意が密かに結ばれた瞬間だった。本人の意向は別として。一抹程の不安を抱きながら、フェイトは一つ頷いて見せた。

「それに、あの時のお礼もしくちゃいけない」

「あ、そっか、フェイトちゃんは会つとるんやったね。空港火災の時だけに………」

「うん。ギンガを助けられたのもあの猫のお陰だから」

記憶の反芻は、案外簡単だった。フェイトは瓦礫に向かって駆け去って行く猫の黒い背中をよく覚えている。

「ふむ………これはチャンスかもしれへんな………」

「？ どういうこと？ はや——」

腕を組んで何やら思索するはやてになのはが疑問を投げかけるのと、
念話が三者の頭を走るのはほぼ同時だった。

周囲をぐるりと森林に囲まれたホテル・アグスタの立地はお世辞にも
好い物である筈は無く。隠れ潜むのに有効なはずの乱立する木々は、
攻め入るガジェット達にとって好都合な隠れ蓑に過ぎなかった。
今この時に到って、急激にその機動性が向上した対敵には尚更の事。

「っ！」

光弾は空しく敵機の脇を通り過ぎて行った。

無意識に舌打ちが漏れる。間髪入れず更に次弾をくれて漸く、一機の
腹を撃ち抜いた。火を吹く鉄屑には目もくれず、次を探して瞬時に
視線を周囲へ這わす。

ティアナ・ランスターは酷く苛立っていた。

「ティ、ティア！？前に出すぎだよ！囲まれちゃう！」

「後手に回っても結果は同じでしょ！アンタこそポケットとして被弾しないでよね！！」

同僚の制止の声さえ今はこのもどかしさを煽るだけ。林を駆け抜けながら二連発マガジンを投げ捨て、新たなマガジンをクロスミラージユに再装填する。

そんなティアナの背後から、ローラーを加速させてスバルが併走した。

「ティア！あんな数相手に一人じゃ無理だよ！」

「無理かどうか、やってみなきゃ解らないでしょ！？今行動しないで一体何の為の訓練よ」

木々の間を縫って接近してくる無数のガジェットをスバルは見やる。その更に向こう側で、紫の召喚陣が続々ガジェットを吐き出し続けている。破壊できる数を増加量が易々と上回っている今、前線を包囲されるのも時間の問題と言えた。

スバルの言に対してティアナは冷ややかな程冷静だった。

「カートリッジを使って一気に『狙撃』する。全機の破壊は無理だけど、包囲の一角だけでも落せられればヴィータ副隊長の加勢まで粘れる！」

「そ、そうだけど……でも！だからこそ皆一緒に――」

「言ったでしょ。され掛けてるんじゃない。もう私達は包囲されてるの。エリオやキャロに背面を守ってもらわなきゃ前線は持たない。ホテルの隊長達を当てにして、防衛線を越えられるなんて私は真つ平御免よ……やるなら今しかない」

遠方の空には、滞空してこちらへ向かって来る8機のガジェット？型。黄色の眼がギョロリと光沢を放ち、それらは確かにティアナとスバルの二人を捉えていた。

熟考の余地はない。ティアナはカートリッジをロードした。その数4発。魔方陣を展開し、オレンジの電荷を帯びた二挺の銃口を迫る敵機へ突き付ける。

「……わかった。アタシも手伝う！」

「……なに？いいのよ別に。アンタはそのまま、日課通り猫さんの事思い出して呆つとしてなさいな」

前後上下左右、あらゆる角度に魔力の弾丸が生成、圧縮、装填され、その全てにティアナは一つの意味を籠める――ランスターの弾丸は、敵機を撃ち抜き破壊する。

（……アンタにだって、アタシは『実力』で証明

してみせるから………)

辛辣な言葉、それでも、スバルは一切退かなかった。最近のこの体たらくは、他の誰より自身が一番理解している。頭を過ぎる度、目の前にある物事に手が付かなくなる。今の自分の心の原典とも呼べる存在は今も何処かで生きていて、それどころか手が届きそうなほど近くにその影は見えたのに。

会いたい、とてもとても。すぐ飛び出して行つて森の中を風潰しに探し尽くしたい——でも

「だからこそ」

「え？」

「猫さんの事、思い出すから、絶対絶対ティア一人でなんて行かせない!!」

振り返り、ティアナはスバルを見た。見慣れた光がその目に宿るのが分かる。比較的久しぶりに、我侭な頑固者がそこに現れていたのだ。不退転、この少女にはこれ以上無い程に似合いの言葉だ。

条件反射よろしく溜息が漏れたのには、我が事ながら呆れた適応力だとティアナは思う。既に視線はスバルから離れ、バラついた敵機の陣形とも呼べぬ散乱が目についた。

「………クロスシフトA。準備には、まだ掛かる………
・頼むわよ」

「応!!」

間髪入れず、今度はスバルが空を翔けた。

回転数^{トルク}を上げる。風を切る。生成した蒼い道をスバルは高速で走り抜けた。

頭上を過ぎ行く獲物を前に、続々と蠢き出でるガジェット達がその矛先をスバルへと向ける。高所の敵に近付くことが出来ないコレ等は次々に青い熱線をスバルへ吐きかけ、焼き払わんとした。

散り散りだった鉄塊共の動きに一つ方向性が現れ出したのをティアナは見逃さなかった。紫電が銃身から腕へと伝い、焼け付くような痛みを訴えた。それでもティアナは、押し固めた魔力を更に圧縮し凝縮し固定していく。対敵のAMFを確実に突き破るために。明らかに許容範囲オーバーの魔力行使。ロングアーチからシャリオ・フェニーノが声を上げた。

『ティ、ティアナ! 4発ロードなんて無茶よ! これじゃデバイスもティアナの体も――』

「行けます。……必ず、撃てます!!」

そしてティアナ・ランスターに、止まる気など最初^{はな}から有りはしなかった。

ホテル・アグスタの屋上は見晴らしが良く、周囲一帯を一望できることから作戦指揮を執るのに最も適していると言えた。

ロングアーチとの遣り取りも合わせて、シャマルは眼前の画面を溜息混じりに確認した。

現在、ティアナ・スバル兩名から一番近い位置で戦闘を行っている隊長格はヴィータただ一人。そしてそのヴィータでさえ、敵機の数の中に中々合流を果たせないでいる。

「ティアナ・・・・・・・・」

シャリオの制止も空しく、モニター上では少女が魔力操作に悪戦苦闘を繰り返している。技術も経験も未だ完成とは程遠いフォワード陣。そんな中、今回のティアナの行動は余りにも無謀であった。

「・・・・・・・・魔力操作、誤らなければいいんだけど・・・・・・・・」

「

呟きは意味を成さず、不安はただ募るばかり。しかし不安を謳って

ばかりもいられない。自分は作戦指揮と同時に、敵情・戦況の報告は勿論、味方の情勢さえも正確に把握していなければならないのだ。広域探査魔法の反応にシャルセンサーは感覚を這わせる。敵機はその数も然ることながら、何より厄介なのは広域に展開している点だった。

これでは否が応でも人員を各地点に割かねばならない。機影を示す赤いマークがホテルを中心に無数に蠢く地図を、苦々しくシャルは見つめ

「・・・・・・・・・・・・・・・・つ！？シャリオ！」

『はい！見えてます！北西に展開していたガジェットドローン約50体、消失しました！！』

「・・・・・・・・来た、の？」

碌に捕捉してもいない相手。これ以上無い程唐突な出現。だがしかし、シャルはソレが目指そうとする場所がありありと見て取れた。赤いマークは、ただ一箇所を目指して次々に消え去っていく。

「クロスファイアー……シュート!!!」

山吹色に輝く無数の魔力スフィアは、堰を切ったが如く一斉にガジェット達に襲い掛かった。

手始めに近場の一体を、隣のもう一体を、更に向こう側を飛ぶ一体を、穴を穿ち、装甲を砕き、貫き、潰し、破壊する。

「だあああああああ!!!」

それでもまだ足りないとはかりにティアナは引き金を我武者羅に引き続けた。視界に収まる鉄塊共全てを、容赦無く、躊躇無く、一辺の迷いさえ無く、ティアナは撃ち続けた。まるで、何かに急ぎ立てられているかのように。

（天賦の才が無かったって……!!）

こちらの攻撃に反応してアンカーを振りかざし接敵してくるガジェットを片端から撃つ、撃つ、撃つ。

（レアスキルが無くたって……！！！！）

装甲が拉げ、煙を吐き出し、バラバラに吹き飛ぶ鉄屑。感慨なぞ湧く筈もない。ティアナは最早無我であり夢中に在った。

「凡人だからなんだ！？アタシは！立ち止まるわけにはいかないんだ！！！」

ガジェットの一部が逃げるように上空へ。飛行は出来ずとも多少の高度を跳躍することは出来るらしい。勿論

「逃がさない！！」

銃口を瞬時にガジェットへ向ける。もう既に近辺一帯を掃討したのだ。今更一匹だって逃がしてやらない。ティアナは引き金を引いた。迷う事無く、次の瞬間には地面に転がり散らばる鉄屑を信じて疑いもせず。

射線のその先、ガジェットの更に先、敵影の向こう側を翔ける相棒も見えずに――弾丸はガジェットを掠めもしないまま、真直ぐにスバルを襲う。

スバルが振り返ったのは偶然だった。

敵機の攻勢が止んだ地上で、相棒の作戦が巧く運んだことに安堵して眼下を見やろうとした瞬間であった。山吹色の見慣れた魔力光がすぐ目の前にあるのだ。

回避？プロテクションを？いや直接防ごうか？

どれも間に合いそうに無い。自分の事である筈の事象はしかし、現実感に乏しかった。あともう1000分の一秒程度で自身は並々ならぬ傷を負うだろうに。AMFを容易く貫くほどの弾丸を受けて無事でいられる道理はないのだから。

——スバル！！——

相棒の悲痛な叫びが耳朵を打つ。最後の最後に頭を過ぎったのは、相棒が責任を感じないか、などと暢気な思考だった。

黒い剣は、魔力スフィアを斬り裂いた。

「——あ」

バランスが大いに崩れ、ウイングロードの上を転がるように停止するスバル。衝撃に体が痛みを訴える。気になりもしなかったが、傍らに、懐かしい気配。

「無事か」

蹲る自身を見上げる黄金の双眸。

「・・・・・・・・道借りる」

「あつ・・・・・・・・」

黒い軌跡を残して、駆け去って行く背中。 たった一言でさえ言葉を
発せない役立たずの喉は心底恨めしく、こみ上げて来る抑えられな
い心は暫し少女をその場に縫い付けた。

木々の上空、蠢く鉄屑共の頭上に張り巡らされた青い道を全力で駆ける。同時に、過ぎ去った道々には置き土産を。

「トレスオン 投影開始……………」

道に沿って浮遊、並列していく剣、剣、剣。名剣、魔剣、妖刀、統一性も無く手当たり次第に現れ出でる名も無き弾頭達は、刃の矛先を眼下に広がる獲物に据えて今か今かと放たれる瞬間を待っていた。と、こちらを見上げる視線に気付く。先の少女とは別にもう一人、呆然とした様子でその少女は立ち尽していた。未だ敵の攻勢が止まぬ今この場において、その行動は無謀の一言に尽きる。
斬月を自身から引き抜き、跳ぶ。

「っ!？」

大刀は大上段に、刀身本来の質量と落下による重力加速を加え、斬撃に宿る力は計り知れず。

驚愕を顔に貼り付けたまま凝固した様に少女はその場を動かない、否、動けない——躊躇無く切り裂いた。

「つつ!……………え」

鉄屑は火を吹くことも無く、縦に真直ぐ、二つの鉄屑へ成り果てた。恐る恐ると言った面持ちで目を開けた少女。酷く困惑が窺える。

「ガジェ・・・ット?・・・・・・・・あなた、助け――」

「ロールアウト バレット クリア
工程完了、全投影待機」

答えている暇は、生憎と無い。眼前に迫る敵も、傍らのこの少女も、放っておけるはずはないのだから。

鉄屑共は愚直な程真直ぐに自身と少女を目指して向かって来る。自分達の頭上を巡る回廊から、無数の死の棘が狙い済ましている事にも気付かずに。

「フリーズ アウト ソードパレルフルオープン
停止解凍、全投影連続層写・・・・・・・・・・！」

剣の雨が降り注ぎ、呆気無いほどに、掃討は終わりを告げた。

困惑を携えたまま、少女はこちらを見下ろしていた。しかし、掛けるべき言葉に窮しているという風情でもない。懊惱、煩悶に苛まれ、苦しくて仕方が無い。そんな目。．．．．．下らない妄想だ。勝手な心象程愚かしい物はない。

幾つかの魔力が此処に向かつてきている。恐らくはこの少女らの仲間達。自身は部外者も甚だしい身の上。早々に立ち去るのが好いだろう。

踵を返し、林へ向かつて駆ける。

「あ、待つ「猫さん!!」．．．．．」

地面を挟むかのように車輪を唸らせ、もう一人、少女が自身の背後に立った。振り返り仰ぎ見る。交差した視線から覗く感情は酷く複雑で、俺には読み取れそうに無い。

口を開こうとしてか、何度も動きを見せていたが言葉が紡がれることはなく、少女は悲しげに俯くばかりだった。

正直、自身こそ言うべき言葉を探しあぐねているのだが。

「．．．．．大きくなったな」

「!」

はっとして少女が顔を上げた。声を掛けられたのが予想外だったの

だろうか。呆然とした様子でこちらを見ている。それとも、こちらが一方的に覚えていただけだったか。

少女が一步前へ出た。そのままゆっくりとこちらへ歩み寄ってくる。相変わらず言葉は無いが、視線は自分に向けられたまま一切逸らされてはいない。

わななく様に、少女は漸く口を開いた。

「・・・・・・・・猫、さん？・・・・・・・・」

「ああ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・アタシ、昔、猫さんに助けてもらって・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ああ、覚えている。怪我はもういいのか？」

健康そのものの少女を見やりながら馬鹿な疑問を投げたものだと自身を嘲笑った瞬間

少女はその場に膝を付き、すっぱりと己を抱き締め
てしまった。

阿呆の様に呆然としている中、次いですぐ額を濡らす滴に気付き、少女を見上げることが出来た。

嗚咽交じりの声、言葉は、どうしようもなく耳朵を打つ。

「覚えて、くれてっ・・・・・・・・ね、こさん・・・・・・・・ずっと、ずっと

会いたくて！、でも誰も、救助隊の人達知らないって・・・っ
・ギン姉も見たって！だから一杯いっぱい探してっ！」

「・・・・・・・・そうか」

「この前は、列車で、エリオとキャロが見たって！でも・・・・・・・・
嬉しかったけど、結局会えなくてっ・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・すまない・・・・・・・・」

こちらの謝罪に少女は必死で頭を振る。ただ、腕の力が弱まる事は無かった。まるで放してしまうのを怖れているかのように。

この少女が泣く理由は、間違いようも無く自身にあるのだろう。それは確かに理解できた。しかし、どうすれば泣き止んでくれるのか。それだけではどうしても分からなかった。記憶の欠落は、そんな当たり前の心の機微さえ奪っている。

背中を擦ってやれる腕も、涙を拭ってやれる指も、畜生の自分には備わっていない。無能が。

せめて、どうしても、涙だけは止めたくて、畜生らしくチロリと少女の目元を舐めた。

「あ・・・・・・・・う・・うあっ・・・・・・・・ああっ！ひつく、あああ
あ！！！」

声を上げて泣き出してしまった。

あたふたと右往左往しかできない役立たずの脳味噌に唾棄しながら、思考を総動員させ問題の解決を模索する。無駄な足掻きだと、要ら

ぬ回答だけは瞬時に打ち出された。

ますます強まる腕の力を前に身動きは取れない。そも、無理矢理に引き剥がすのはひどく躊躇われた。助けを求めるように周囲に視線を投げて傍らで立つ少女を見ても、なんとも言えない微笑を浮かべ首を振るばかり。

涙の意味も碌に理解できず、俺はただただ馬鹿の一つ覚えに涙を受け止める事しか出来ない。散々自身の無能を呪いながら、足掻きさえ見せられないこの蒙昧さ。そして俺は、この娘を置き去りにして行くのだ。

烏滸がましい願いだという事は重々承知している。それでも、どうか、せめて、この子には笑って欲しいと、この期に及んで、俺は願望を擡^{もた}げている。

その日、俺は『移動』出来なかった。

第7話 一つ目の再会（後書き）

オリジナリティって何処で買えますか？
こんにちは足洗いです。

主人公長期滞在なんぞと前回申しましたが、テンポが悪いの悪くないの………申し訳ありません。

レーフェン君にはしばらくリリカル方面で頑張ってもらうことになります。行き当たりばったりな小説ですが、どうかお付き合いいただければ幸いです。

それでは、読んでいただきありがとうございました！

第8話 或る喜び 或る不安 或る哀しみ

消魂^{けいたま}しく唸る回転翼の震動が機内を満たし、小さな窓から覗く西日に目が焼かれた。

幅は3m程度、奥行は10m前後とキャビネット内は輸送ヘリの名に相応しく広い。これならば最大積載重量も相当と判断できる。そして何より着目すべきは、その大きさに見合わぬこの速度であろう。最大速度がどれ程かは操縦士にでも聞けば分かるだろうが、窓を過ぎて行く景色を見る限り到底大きさに見合わない。また、ヘリに乗り込む際全く排気の臭いがしなかったことに驚かされた。無駄に敏感なこの嗅覚ならば如何に排気管の位置が工夫されていようと嗅ぎ取れるはずなのだが、そんな臭いは一切なかった。どうやら根本的に動力の機構が自身の浅はかな知識外の物らしい。しかしなればこそ、装備・物資の輸送、或いは救助用ヘリとしての利用価値は計り知れない。迅速かつ大量輸送可能なヘリとは、正に打って付けた。勿論、運用目的を定めるのはまた別の話か。軍用ヘリで救命救急というのも少し

「えへへっ、ねーごさん……………」

「……………」

……………我ながら、不毛な。
広い、と前述しはしたが現在キャビネットは少々、というか、憚りながら中々に窮屈だ。身動き^{みじろ}一つ取れない、などということは決してない。これはそう言った意味合いの窮屈ではないのだろう……………

・身動きが出来ないのは確かだが。

背後の少女を振り返った。目尻に残る涙の跡に罪悪感を刺激される。しかし、心底嬉しげなこの笑顔は確かに自分が望んだものだった。

「ん？なに？猫さん」

「いや・・・」

少女、スバルは小首を傾げて微笑んだ。無邪気で子供のような笑顔、否、事実まだまだ子供なのだが。

そんな笑みを湛えるまま、自身を抱える手がまた優しげに背中を撫ぜる。少女らしい柔らかな手は心地よく毛並みを沿い、分不相応な安堵を与えてくれた。

こんな遣り取りを、かれこれ出会いの辺りから繰り返している。

この窮屈さを演出しているだろう最たる理由は、やはりこの状態にあるのだ。座席に腰を下ろしたスバルの膝の上で俺はずっと抱き抱えられている。今更羞恥がなんだと騒ぐ気は毛頭ない。そしてスバル自身が望んでこの様にしたいと言っているのなら、それを自分が無下に跳ね除けて良い道理は無いのだ。そう、なのだが

「べつたりだね、スバル」

「あゝ、ねえスバル。そろそろ放してあげたら？レーフェン君、なんだかちよつと困ってるみたいだよ？」

こちらの心情を些かなりとも察してくれたか、女……失礼、高町が言う。

途端にスバルの顔から表情が、消えた。

「え……………ダメ、ですか？……………」

「否、何も問題は無い」

「よかった！大丈夫ですなのはさん！」

「あははは……………」

乾いた笑いは誰のやら。少なくとも自分ではない。

妙に生暖かな視線が気にはなるが詮方ないこと。畜生一匹に一喜一憂してくれるのだ。今は甘んじて置くのが良からう。

スバルと再会した後、とうとう俺は『移動』出来なかった。

常ならば戦闘終了後数分と経たぬ内に消え去るはずの者が、未だこの世界に居座っている。明らかに自身のものとは別の意思が、言わずもがな、あの女神が起した事であろう。ならば最早『何故』を問答するのは時間の無駄だ。

そのまま今後の動向を如何すべきか考えようとしていた、その折、彼女らに出くわした。

「あはは、いやいやしゃあないつて。なにせ四年ぶりの、それもお預け食らった後やもん。ね？ それにしても、なのはちゃんと会った時かて泣いとしたけど今回はすごかったなあ。これでもか言うぐらいぼろくそに泣いとしたもんねえ！」

「あう！？す、すみません……」

ひらひらと片手を振りながらカラカラと短髪のおん……八神はやては笑った。背後でスバルが恥ずかしげに俯くのを感じる。

「あ、そつか、貨物列車の時は結局僕らと話ただけで」

「突然消えちゃって……」

すぐ隣で座していた二人、モンディアルとル・ルシエが続く。消えた、の辺りで言葉尻は切れ、随分と弱々しい響きだけが宙を漂っていた。そしてその瞬間、もの問いたげな視線が一斉に自身へと突き刺さる。先程から気にはなっていたが、やはりキャビネット内を窮屈に感じた理由はスバルだけではなかったらしい。

当たり前と言えば当たり前だ。行き成り現れた正体不明の、それも口を利く畜生をして疑問を抱かない道理が無い。否、口を利く獣がもう一匹同乗しているのだからそれは些事か。なら一番の問題はやはり――

「はいはい皆さん！質問タイムはまた今度うちゅうことで。今日の

ところは大人しう帰りましょか」

八神が一つ手を打ち鳴らし、乾いた音に思考が断たれた。集まっていた視線もまた、一部を除き、それに合わせて散って行く。

甚だ手前勝手な都合であるが、この配慮はひどく有り難かった。何せ、自身を最も理解していないのは誰あるうこの俺なのだから。説明を求められたとて、果して真面な会話になるか

視線が一つ残っている。

「・・・・・・・・」

「今日のところは、私とお話してもらてええかな？レーフェン君」

こちらの目を真っ向から捕えて、密やかに八神は呟いた。

西日に照らし出されて赤く染まる隊舎の前で、少年少女四人は横一列に並び眼前に佇む女性を見ている。

「それじゃ、今日は午後の訓練はお休み。各自しっかりと休息を取ること。分かった？」

「……はい！……」

威勢の良い声に満足して、高町なのはは頷いた。傍らで同じく佇むヴィータに目配せを寄越し、そのまま隊舎へと向かう。

もう一つの懸案事項を片付けなければならない。そして目の前の、今にも飛び出して行きそうな少女に一刻も早い朗報を送ってあげなければ。

そわそわと落ち着かぬ様子で隊舎を見上げるスバルに、なのはは苦笑いを浮かべた。

ストームレイダーが基地に到着してすぐ、件の黒猫は部隊長はやてに伴われて、事情説明の為はやてのデスクへ。その時、頑として自分も一緒に付いて行くと譲らぬスバルを説き伏せるのに一同は随分苦勞した。なのはやフェイトが幾ら大丈夫だと説得を試みても、普段の明朗さからは考えられぬほどにスバルは渋った。最終的にはヴィータの怒号を以て、如何にも不承不承という体で漸く落ち着きを取り戻せたのだ。

「・・・・・・・・あの！」

「え、ティアナ？」

四人の中で最初に口を開いたのは、予想に反してスバルではなくティアナだった。てっきりスバルがまた駄々を捏ねてしまうのだろうと覚悟を決めた矢先の事。隣に立つスバル本人も虚を突かれた様子で同僚を見やる。

「ティアナ、どうかしたの？・・・・レーフェン君のことかな？」

「・・・・・・・・」

躊躇うような沈黙が続いた後、漸くティアナは顔を上げた。一文字に閉じられていた唇が静かに開かれる。その一声は微かに震えていた。

「私、まだ、あの猫に・・・・・・・・」

「！ ティア、あの事ならもう・・・・・・・・」

言葉尻を聞き取ることは出来なかった。しかし何を言わんとしているのかは、なのにもヴィータにも明瞭^{はつきり}と悟ることが出来た。

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

そしてヴィータに到って言えば、それは他人事ではなくて。魔力スフィアの誤射で、ティアナは危うくスバルに怪我を――或いは最悪の結果を――もたら齎す寸前だったのだ。記録映像も既に確認が終えられ、隊長からの嚴重注意という形で事態は一応の収束を見た。しかし

（アイツがいなきゃ、今頃コイツらは・・・・・・・・）

二人並んでここには居られなかったろう。二人のどちらも身体と心に傷を負った。それだけは分かる。最もフォワードメンバーと合流が容易かったにも関わらず到着が遅れた自分にティアナを叱咤する資格は無い。ティアナと話を着けたのは、結局なのはだった。

「・・・・・・・・そうだね。ちゃんとお礼しなきゃ・・・・・・・・それにスバルの事もそうだけど、アグスタの敵機包囲を切り破ってくれたのも実はレーフェン君なんだよね。あはは、そっか、お礼なきゃいけないのは私達も同じだ」

ティアナへ向けてなのははコロコロと笑って見せた。なんでもない口ぶり。言葉選びのさり気無さ。

そのどれもがティアナには有り難く、どれもが今は堪らない。

「……ま、そうなるか。くっそ、あの猫^{ヤロー}一遍に何コ人に借りこさえてんだ？アタシまで氣い回さなきゃいけねえじゃねえかよ・・・」

「あの、僕らもです！レーフェンさんにお礼を！」

「はい！貨物列車の時とか色んなこと」

眉を顰めてヴィータは軽く毒吐き、エリオとキャロはそう明るく言った。

「うん！アタシも！だから、ティアも一緒に！……ね？」

「……うん」

それだけ言って、ティアナは沈黙した。

隊長室、と銘打たれているらしい扉を一瞥だけして潜った。

言語が明らかに知識外な為読むことは叶わなかったが、扉の先で待っていた部屋の内装を見るに付け、恐らく間違っではないと思われる。

先導していた八神が備え付けのソファに腰を下ろし、手でテーブルの対面を示した。

「どうぞ、適当に掛けてや」

「・・・・・・失礼」

掛ける、というより飛び乗っただけなのだが、取り合えず正面に座した。次いで八神の隣にハラウンが腰を下ろす。

八神に従うようにしていた、シグナムだったか？、は同席することなく入り口近くの壁際で待機していた。

ヘリから此処まで、相変わらず鋭利な視線は突き刺したままに。

「さうと！そいじゃ改めまして自己紹介しとこか。私はここ機動六課で部隊長やらせてもろとる、八神はやて。向こうで立つとるんはライトニング分隊副隊長のシグナム。ほんでこちらはライトニング分隊長」

「フェイト、フェイト・Ｔ・ハラオウン。．．．．．覚えてるかな？前に一度だけ会ってるんだけど．．．．」

微かに笑みを浮かべ、ハラオウンは首を傾げてこちらを見た。

あちらからすれば数年前の記憶でも、こちらにとっては数日と経たぬ間の出来事。

瓦礫の山の中、少女を救った黒衣の女。無責任にも少女の生命を押し付けて己は姿を暗ませたのだ。よく覚えている。

「その折は．．．．甚だ手前勝手な文言を吐いた上、救助をそちらに投げた。著しく礼を欠くが、謝罪したい。すまなかった．．．．」

「え、ええ！？そ、そんなこと！」

頭を垂れる自身にハラオウンは殊更戸惑いを見せた。事後に今更言葉だけの謝辞と謝罪を寄越したとて、対応に窮するのは当然か。思慮に欠けた。

「．．．．．その後、あの娘は？」

「あ！う、うん。大した怪我も無かったし、病院に搬送されて、それからすぐ退院。今は立派に成長して管理局の職員なんだ。ふふ、驚くと思うよ。すっごく綺麗になってるんだから」

「そうか・・・・・・・・」

スバル同様、あの火災の中辛うじて残っていた生存者の一人。邂逅はそれこそ数分とさえ無く、その後について心を配る事も本来ならば不遜以外の何物でも無いのだが。

それでも、都合よく失踪を繰り返すこの身は、また一つ分不相応な安堵を得た。

「・・・・・・・・会ってあげて。きっとあの子も喜ぶから」

懐かしむようにハラオウンは呟いた。そして、事実その瞳は過去を見ているようだ。

「・・・・・・・・ええかな？フェイトちゃん」

「っ！ご、ごめん！うん、私の話は終わり。次、はやてどうぞ」

傍らの八神によって早々に現実へ引き戻され、しどろもどろにハラオウンは頷いた。一つ苦笑いをハラオウンへ送った八神は、改めてこちらに笑みを浮かべて向き直る。

出来の良い笑顔だった。

「ほんならお待ちかね、本題に入るか・・・・・・・・シャーリー」

「え？」

ハラオウンが声を漏らす。八神の眼前に突然ウィンドウが展開した。相変わらず理解不能な言語の羅列が裏側から透過して見える。見た所数字のようだ。

八神はしばらくの間、黙してじっと画面を見つめていた。傍らのハラオウンも画面へ目を落し——その大きな目をさらに見開いた。

「はやて！？これって！」

驚愕して声を上げるハラオウンに一瞥だけ寄越して八神はこちらを見据える。

「……今、ウチの技術部門の方から連絡があった」

「ああ。それで、何か解ったのか？」

今度は八神が目を見開いた。次いで、苦い口ぶりで以て言葉を繋ぐ。

「っ、気付いたんか……」

「扉に何か有る、ということだけは」

扉を潜る寸前、確かに『視られた』感触は有った。この場においてそれが必要なのはやはり、俺というモノについて知る為だろう。と、当たりを付けたが、存外的中するものだ。

軽く呼吸を整えた様子の八神はそつと居住いを正すと、何の色も宿さぬ瞳を上げた。

「……それやったら、話は早いね。単刀直入に聞くわ。レーフェン君――」

こちらと対する視線が真直ぐに交差する。

「キミは、一体ナニ」

眼窩の最奥で漂う感情を余すところ無く全て汲み取ろうとするが如く、八神の瞳は、自身の仄暗い淵を覗き込んでいた。

灯の消えた室内を照らすのは、夜空に浮かぶ蒼白い月の光だけ。
胡乱な薄闇が部屋の其処彼処を浸し、静寂は柔く、呼吸さえ止めて
しまいたくなる。

「・・・・・・・・主はやて」

「ん・・・・・・・・んや、シグナム」

窓辺にもたれて空を仰ぎながら、はやては奇妙な夢想から引き戻された。気怠げに身を起し、背後に佇む麗人に振り返る。暖かな日の下とは異なる、冷たい月光によって浮かび上がったその容貌はとても疊惑的だった。

などと、多少身内贔屓な己の思考に失笑が漏れた。少なくとも今の時だけは場違いな話であるのに。自分はやはり神経が人より太いのだろう。いや、心の機微を非常識な程に解していないだけか・・・。

意味も無い自虐は、どうやら顔に出ていたらしい。シグナムがそつと隣に立った。

「・・・・・・・・あの者の事、でしょうか」

「うん」

自分でも驚くほど即答だった。何時に無く、自身が弱っているのを自覚する。

邂逅を終えて、話をして、早々に事は方付いた。違う、付いてなどいる筈がない。ならばこれほど心憂く理由は何だ。

「・・・・・・・・信じておられるのか？あの者の話を・・・・・・・・」

「神、転生、異世界・・・・・・・・・・自殺」

「・・・・・・・・」

荒唐無稽、猫が語る物語は現実から遠く乖離した処にあった。

曰く、神によって自身は猫としての新たな生を与えられた。

曰く、神は自身に法外な能力を与えその動向を（恐らくは）楽しんで

でいる。

曰く、一部を除き記憶の大半を忘却、或いは完全に喪失している。

曰く、自身は他者の安寧を喰い潰す。

曰く、化物。

曰く、自身は自ら命を絶った。

「だから、赦されない」

「それは……………」

「『権利と呼べるもの、それに類するもの、自身にはその一切合切が皆無である』 なんか、まるでホンマものの軍人さんみたいな喋り方やったな？ ふふふつ……………はあ」

冗談交じりの呟きは、敢無く闇に溶けた。いかにも場を繋ぐために出た一笑は、空しいだけ。

暫し沈黙した後、シグナムは重々しく口を開いた。

「……………正直、私には信じられない。転生、など……………」

「うん、そやね。私もやよ。神様が生き返らせてくれた、なんてそないな都合のええ話聞いた事ないわ。そんでこれまた都合のええ力くれて？ 異世界で活躍して来いてあんた……………うん、漫画や」

自分で言っているても可笑しく思えてくる。これは軍属である自分より、懇意にしている聖職者シスター向きの話ではあるまいか。いや、宗旨が違うのかな？
下らない。

「ならつ、拘束すべきではなかったのでしょうか！？偽証の可能性が有る以上信用など、出来ません……彼の者の力は到底！――」

俄かに熱り立って詰め寄るシグナムの言葉に、はやては更に自身の言を重ねた。

「そうかもしれへん。うん、レーフェン君の言うとおりにしとった方が、部隊長としては正しかったんかもしれへん」

「っ……………」

「……………ごめん。そういう意味で言ったと違っくんよ？シグナムは正しいで」

「いえ……………」

捕縛して拘束し收容する。正体不明の明確な勢力を相手取ったのならば容易に考えられ得る対応の一つ。

黒猫という存在を知った時、戦力として期待するのと、また同時にあった考えだ。最悪の、本当に最悪の場合は、考慮せねばならない

と思っていた。

それを最初に申し出たのは、他ならぬ本人だった。

『得体は知れず、且つ保有する力も未知数、証言も……皆ま
で言えない程曖昧だ。信用出来る筈がない。こういった手合いには
嚴重な拘束の後、然るべき収容施設にて拘禁が望ましい』

さも当然であるかのような口調は、今にして思えば随分と奇妙な話
だ。意地の悪い冗談だったならどれ程救いか。些かも笑えない冗談
だが。

不意に、はやてはシグナムを正面から見据えた。

「私」

「？」

「私な、転生とか神様とか、正直、それが嘘かホントかはどうでも
ええねん」

「………は？」

思いもよらぬ発言だった。ポカンと口を開けてシグナムははやてを
見返す。

微笑があつた。今よりも幼い頃からずっと見知ってきた、少女本来

の笑み。隠しようもない、久方ぶりの哀しげな笑み。

「なあ、シグナム……………」

「……………はい」

ゆっくりと胸の内から押し出すように、はやては言葉を紡いだ。

「……………自分から死ぬいうんは、どついう気持ちなんかなあ・……………」

「……………」

答えは無かった。

『生まれて』初めて自身の今を他者へ話した。言葉にすればする程に己の狂った身の上が知れる。果して何処までを信じ、何処まで一笑に付してくれたものか。或いは全てを嘲笑ってくれたなら、良かったのやも知れぬ……。

ああそうだ、どうしようもないこの己が穢らわしい生立^{しなま}など、知らせるべきでは無かった。

———
そっちの世界は、案外———

あの人達は、優し過ぎる。

第8話 或る喜び 或る不安 或る哀しみ（後書き）

どうも皆さんお久しぶりです。足洗です。

最遅です・・・・・・本当にすみません。

言い訳させていただと、今回難産でして・・・・・・これが噂に聞くスランプというやつなのでしょうか？

今後の展開をどうしようか、悩んでおります・・・・・・。せめて更新速度をもう少しましな方向へ持っていくよう努力させていただきます。

今回も読んでいただきありがとうございました！

第9話 或る苦悩（前書き）

お久しぶりです・・・・・・・・すみませんすみませんすみません。

第9話 或る苦悩

『P i P i P i P i』

聞き慣れた電子音は眠りの海から思考を引つ張り出し、体を包む微ま睡るみを否応無しに剥ぎ取ってしまう。

まだまだ眠りを欲しがる体は石にでもなったかのように動かなかった。半覚醒状態の頭は、一向に思考速度が上がらない。むしろ眠気は増すばかりだ。

朝特有の冷気に体が震えた。僅かな温もりさえ逃がすまいとシーツを引き寄せ、次いでもう一つ、大切な温もりを探してベッドの中に手を伸ばす。しかし、伸ばした手は空しくシーツの上を行きつ戻りつするだけで何に触れることも無い。

何も無い。

手を伸ばしても、届かない。

火の海に消える黒い背中を、自分はただ手を伸ばして見送ることしか出来ない。

寒気が全身を伝う。不安が胸一杯に詰まる。恐怖で眠気が消し飛んだ。

「っ猫さん!!」

シーツを跳ね飛ばすようにスバルは一気に覚醒した。

激しく胸を連打する鼓動で出鱈目な量の血が全身を巡り、耳にじくじく響いて煩い。震えるほどの寒気を感じているのに、首筋にはじつとりと汗が滲んでいる。肩で息をしながら熱くなった目を覆った。心に残留する途方も無い喪失感と孤独感。これは最早恐怖だ。拭えずにまだ胸に蟠^{わたかま}っている不安。どうしようもなく、スバルは膝を抱えた。

「スバル」

声はベッドの下から。

反射的に二段ベッドの縁から身を乗り出した。眼下には備え付けの二脚の机、そして僅かに開いたカーテンの隙間から少しだけ鋭い朝陽が、濡れ羽の黒を浮き彫りにしている。

黄金の双眸と優しい声音は穏やかな安堵を

「どうかしたのか。随分――」

ベッドを飛び降りた。裸足のまま着地したから、ヒタツ、と小さく音を立てただけで友人が起きる心配はない。そのまま早足に、不思議そうにこちらを見上げる瞳へ向かって進む。

そつと手を伸ばした。

ギュツと腕の中に収めた。

シートで丸くなっていた自身とは違い、冷氣に晒されていた艶やかな毛並みはひんやりとして冷たかった。でも、確かな温もりが変わらず感じられる。頬に当たる髭がチクチクして、少し可笑しかった。

「…………泣いて、いるのか」

愕然と、尋常を超えて動揺した声音はどうにも滑稽さを醸す。スバルはクスクスと声を殺して笑った。

「スバル？」

「ううん、大丈夫だよ。ほんのちょっとだけね、不安になっただけだから」

首を傾げた拍子に柔らかな耳が首下をくすぐる。大きく息を吸い込むと、新鮮な日向の匂いが胸一杯に満ちるのを感じた。それだけでも、安堵を得るのには十分だった。

「あ、でも、猫さん」

「？」

しかし、文句が一つも無いかと言えばそんなことは無くて。

「起きたら隣に居なくってすつごく不安になったんだよ……その、一緒に、寝たくないんじゃないけど……」

昨夜、少しでも我侭を言つて、一緒に同じシーツに包まった時の大きな安堵をスバルはよく覚えてる。

目が覚めた時、まるで夢か幻のようにそれが消えていたのだ。

「……黙っていなくなっちゃ、いやだよ……」

それだけ言うと、表情は泣き笑いのまま少女は腕に力を籠めた。それは、親と逸れてしまった迷子のように、やっとの思いで失せ物を見付けた子供のようにもある。不思議な表情だった。

「……………すまない」

陳腐な謝罪が口をつく。これより外に、俺に何が言えようか。

昨夜の接見の折、速やかな拘束を不遜にも願い出てみたが、八神はやて部隊長の降した判断は『保留』だった。拘束、拘禁という措置を執るにしても、それには（犯罪者に対する法的罰則でない限り）膨大な手続が必要だとか。さらに、此処機動六課にも犯罪者の拘留施設として用いる準備が有るそうだ。最悪の場合は一先ずそれで手を打つのだと。

こちらの眼を正面から見据えながら、感情の乏しい声音で八神は言った。隣で座すフェイト・Ｔ・ハラOWN分隊長からは、酷く戸惑いを、怒りさえ籠った瞳で睨まれてしまったが。

顧みてみれば確かにこの物言いは生意気だった。大した理由があるでもなく自ら「逮捕してくれ」では、常に全力で職務へ向かう彼女らを小馬鹿にしているようなものだったろう。

その旨を含めて再度謝罪を呈すと二人は、あまつさえ傍らで佇んでいたシグナム副隊長もまた、困惑した。

『よう解らんわ。キミ・・・・・・・・』

八神がそう呟き、会見は終了した。

その後の展開はどうも自分には目まぐるしかったようで、気が付いたときには何故かスバルとティアナ・ランスターの部屋で居候することになっていた。

・・・・・・経過を省いたのでは無く、部隊長室から出た時にはもうすでに決定した後だったそうだ。スバルの達での希望で、ランスターには了解を得たと、そう奇妙なほど嬉しそうに言うのだ。

その時点で自身に拒否権が有るなどと思ってはいなかった。それに申し出自体が有り難いことに変わりはない。好き勝手に出歩いて良い立場でない以上、自分は何かしらの監視下に居らねばならない。しかし、同室だというランスターに迷惑では無いのかと、再度執こいのを承知で尋ねてみたが

『構いません。・・・・・・・・私が決めていいことじゃないですから・・・・・・・・』

毅然とした声とは裏腹な物憂げな表情は、触れることを躊躇わせる。ランスターは節目がちにそれだけ言ってこちらから目を逸らした。

昨夜の出来事を再度想起して現状を鑑みた。何処に居るにせよ自身の置かれた立場、状況、予想され得るこれからについて熟考する必要があるだろう。此処、機動六課における俺の役割を。

勿論、それは俺が手前勝手に判断してよい事項ではない。八神部隊長の裁量次第なのだ。

力を借せと言われれば全能力を以て応えよう。

動くなど制されたならば素直に従おう。……これに関しては場合にも因るが。

彼女らの職務については、概要程度ならば昨夜説明を受けた。古代遺物管理部という名称を額面通りに受け止めればそれ程に危険とは思えなかったが、文字通り機動部隊として機能しているというのなら話は別。前回、前々回の戦闘も頷ける。

仮に危機的事態（彼女らの戦闘能力を思えば考え難くもあるが）に彼女らが直面したのなら、制止に従う心算は無い。

くどくどしい思考は一先ず段落が付いた。持っていた記憶と知り得た情報を整理、照合して喪失した記憶が何一つ刺激されないのを再確認する。元より期待はしていなかったが。

呼吸を一息分吐き出し、眼下の少女に目を移した。

「えへへ、猫さんの毛やらかいな〜……尻尾もふにふに〜」

「・・・・・・・・」

指先でこちらの尾を弄り、何故かスバルは嘆息して呟いた。床に寝そべり両手で自身を抱き上げると、微笑む瞳と目が合った。胸に抱え込まれた。

「♪」

「・・・・・・・・」

問題ない。おそらくは。

嬉しそうな顔も楽しげな様も、俺にとっては望外なものだ。畜生一匹をしてここまで喜んでくれるなら、いくらでも好きにさせて構わない、程度には思っている。その心算は・・・・・・・・ある・・・・。ただ、そのように言いながら甚だ失礼なことを言わせて貰えるのなら、スバルの表情はどのように言葉を選んだとて・・・・・・・・だらしが無かった。

「えへへへ♪」

「・・・・・・・・スバル」

「なぐに？猫さん？」

弛緩した声音は甘ったるい響きを残す。彼女に対して持っていた快活な印象とは大分違う気がしないでもないが、無視した。

「昨夜、確か就寝前に」

「？」

「ランスターが四時に起きると、言っていたはずだが」

「………あ」

時計の針は、文字を読むことは叶わないが、おそらく六時を指そうとしている。目覚しが鳴ってから都合二時間、俺はずっとスバルに遊ばれていたのか。

注意散漫。もっと早く言ってやるべきだった。

「てい、ティア！ごめん！アタシ目覚し消しちゃって！」

「んあ？なに？………あ、ちょっ今何時！？なんで目覚し、つてあんた！バカスバル！」

「う、ごめんなさーい！ね、猫さん助けてー！」

賑やかに過ぎる少女らは、暫しの間攻防を繰り広げていた。

「あ、いたいた。レーフェンく〜ん」

「高町か」

風に靡く髪を押さえて高町なのは分隊長が小走りに駆けて来る。暫し何をするでもなく突っ立って、もとい座っていた為か、声を掛けられるまでその存在を意識出来ていなかったようだ。

「レーフェン君も来たんだね。ふふ、スバルの付き添いかな？」

「……そのようなもの、か。付いて来ることを所望されたので一応此处に居る。障りが有るようなら即消えよう」

「そんなことないよ。それに勝手に居なくなったりしたら、またスバルが寂しがっちゃうよ？」

「うむ……」

微笑を浮かべてこちらを見つめる高町。成程、芯を打った意見だ。突き刺さるほどに。

押し黙った自身を見て、また高町はクスクスと声を殺して笑った。極まりの悪さから俺は眼下の少年少女らに視線を移す。

機動隊の名を冠するからには、此処でも当然訓練が行われる。俺はスバルとランスターに伴われて『訓練場』を訪れていた。

聳え立つビル群。その間を縫う様に走る高速道路。そして各所に点在する見知った機械兵器達。

冷涼な風が毛並みをなぞる。ビルの屋上から走り回る子ら見やりながら、改めてこの巨大な施設の全容を眺めた。

確かに本格的な訓練を求めるならば、より実践に近い環境が望ましいのは解る。それだけにこの完全な仮想空間は打って付けだろう。どんな環境でも大概が再現可能とは……。

「……………レーフエン君」

「なんだ」

いつの間にか隣に立っていた高町は唐突に笑みを収めると、同じく眼下に目を走らせた。子供らの動きに対し瞬時にして集中し深く熟考する様は、スバルより聞きしに勝る。教導官、だったか。

「……………うん、そう、まずは、ありがとうから」

「？」

歯切れが良いとはい言い難い。暫し口の中で言葉の反芻を繰り返し、高町は視線をこちらへ移した。

「ホテル・アグスタ、昨日の事……ティアナの事」

「ああ……」

「レーフェン君がいなかったらスバルもティアナも……傷付いてた」

「……」

身体の傷、ではないのだろうか。

「だから、お礼が言いたくて。ありがとう」

「……気にするなとは言わない。謝辞は丁重に拝領しよう」

高町は、安い謙遜など求めてはいまい。礼の押し付け合いなど馬鹿馬鹿しいだけだ。

意図が伝わったか、高町の方も一つ頷くだけでそれ以上は何も言わなかった。

手摺に右手を添えて高町は眼下へ目を落す。固定されたままの視線を特に意識せず俺は目で追った。

比較的軽い銃声がビルを反響する。膝立ちに銃を構え、ランスターは標的へ向けて発砲を繰り返した。拳銃の速射で、しかも動く敵機に対して、オレンジの弾丸は想定以上の精度を誇っている、とそのように思えるが。

「ティアナの事、どう思う？」

本題に入ったようだ。

俺は今思ったことをそのまま口にした。

黙して俺の有体な言葉を聞き終えた高町は一つ頷く。

「私もそう思う。精密射撃とかもそうだけど、私と同じ遠距離型だから、ティアナの才能は近くで見れば特に解るんだ。フォワードメンバーへの指示なんかもすごく的確で、こういう分隊規模の演習の時はリーダーシップも発揮出来る」

「・・・・・・・・」

朗々と、高町はランスターについて語り続ける。若くして生まれ持った才覚。そしてそれが如何に多くの善果を生むのか。

「ティアナはよくやってる。訓練次第でいくらでも伸び代はあるん

だよ？まだまだ時間は沢山ある。だから、焦って失敗して夢に届かなくなるなんてこと、そんなの、お兄さんだって……届くはずなの、ティアナなら絶対――」

そこで言葉は途切れ、高町はしばらく押し黙ったまま動かなかった。ただ、手摺を握る手はきつく力が籠められ微かに震えているのが見て取れる。胸の内の感情を押し殺すかのように、高町は小さく息を吸った。

再度向けられた顔には微笑が張り付いていた。

「にやはは、ごめんね。なんだか愚痴みたくなっちゃった」

「いや」

「まあ、何が言いたかったかと言うと、レーフェン君にね、一度ティアナとお話して欲しいんだ。ティアナはあんなだから、多分部屋でも祿に会話にならなかったと思うんだけど？」

確かに、昨夜はランスターと言葉を交わすことさえなかった。居候が決定してすぐ、彼女は何処かへ姿を消してしまったのだ。部屋に帰って来たのは結局深夜。ウトウトと瞼の下がり始めたスバルとぐったりしてベッドへ倒れ込むランスターをして、長々会話を、というのも気が引けた訳だが。

こちらが気に留めないからといって、相手に同じ発想を求めるのは愚考に過ぎるだろう。

「その程度で溜飲が下がるのなら」

「うん、お願い」

もう一度、高町はこちらの眼を正面に据えると、穏やかに微笑んだ。
先程よりも、幾らかは巧かった。

グリップを握り直して、再度魔力スフィアを周囲に展開した。四方
八方あらゆる角度に点在する光球達へ寸分変わらず銃口を突きつけ、
銃爪トリガを引く。この工程がある時は屈み、ある時は直立し、踏み込ん
で或いは後退して、振り返り、回転し、上下左右へ二挺を振り回し、
一時とて止まることを許さずに行う。

傍目からでは解り難いが、これらの動きは決して容易くはない。両

手に携えた二挺拳銃を振り回す体力は勿論、何より重きを置かれるのは照準の精密さ。数センチ外せば遙か彼方では数メートル単位の誤差を生む。

それは、味方を撃つ事さえ

じつとりと身体から滲む汗を夜風が撫ぜる。騒々と唸る林の木々が自身を嘲笑うかのように騒ぎ立てる。身震いするほどの寒気が全身を走った。

『俺からすりゃ、お前は十分に優秀なんだがな。………羨ましいぐらいだ』

「っ！」

膝が屈する。追い討ちのように脳内を反響する言葉は張り詰めていた集中力に容易く穴を開けてしまった。

「はあっはあ……はあ、はあ、はっく………」

顎を伝う汗は地面に黒い斑まだらを描いた。それは、今の自分の心を写し取っているようで、無闇に苛立ちが募る。

自身を眺めていたはずのヴァイス・グランセニック陸曹はもうすでにそこには居なかった。忠告を無視した自身に呆れたか、ヘリの整備に戻ったのか。どちらだって構わないけれど、どうせ居なくなるのならこんな言葉、放っていかれるだけ迷惑だというのに。

「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・」

呼吸を、心を整える。深く深く息を吸い込み、重く重く息を吐き出した。深呼吸は結局、溜息に成り下がった。

「・・・・・・・・・・解ってる」

そつだ。慰めや世辞ばかりでないことぐらいは自分にだって解っている。自分に出来る事、自分にしか出来ない事の区別くらいは。

「・・・・・・・・・・それでも・・・・・・・・そつだとしても・・・・・・・・だから・・・・・・・・」

頭の中に現れては消える言葉達は殆ど言い訳じみっていて、形にするのも馬鹿らしく、結局口元でもごもごと蠕る。

それでも、自分が凡人であることに違いなんて無い。

だとしても、諦めて泣き寝入りするのだけは絶対にご免だ。

だから、見せ付けるんだ。私の、兄さんの、ランスターの魔法は――

「ランスター」

「あ」

連続していた思考がプツリと途切れた。不意に向けられた声に対して、ティアナの反応は数瞬鈍かった。声のした方へ視線を下げる。

「レーフェン……さん」

「ああ」

漆黒の黒猫は夜闇にその金の瞳だけを浮かべて、静かに佇んでいた。それを視界に収めると同時に、言い知れないもやもやとした感情がまた鎌首を擡げるのを感じる。無理矢理飲み下し、出来るだけ平然として居住いを正した。巧くいったか確かめようとは思わないが。

「何か、私に？」

声が怯えている。細やかな見栄は早々に失敗した。自分は眼前の、自身より遥かに小さく、ともすれば華奢と言い換えても差し支えない体躯を持つ小動物に怯えている。しかし、その外見がこの黒猫を語る上で何の役にも立たぬということもまた自分は

知っているのだ。

幾度も幾度も救われた。最初は友人、次は同僚、そしてとうとう自分自身さえ。

その存在を身近に感じた時、自身が抱いた最初の感情は、嫉妬だ。この、絶大な力を容易くも遺憾無く使いこなし、多くの人間を望むまま救うことが出来る、そんな存在を酷く羨んだ。

歪な劣等感に失笑が漏れたのは言うまでも無い。そして、失笑が自己嫌悪へ成り変わる決定的な『出来事』を自分はつい先日経験した。

急き立てる焦りがあつた。少なからぬ自惚れがあつた。浅ましい嫉^{そね}みがあつた。その結果が味方への誤射^{ミスショット}。

何か、だと？彼がわざわざ此処に訪れた理由が解らないはずなのに、尚も自分は白を切る。

叱責か慰めか或いは労いか、どれにせよ自分は甘んじなければなら
ないだろうに。しかし、そんな言葉のどれもこれも自身に如何程の
意味がある？安い反骨心と矜持^{プライド}が満ち満ちた今の自身の頭の中に一
体どれ程の言葉が意味を成し、心を動かす効力を示そうか？今の自
分がどれ程に不遜な態度を取っているのか、嫌でも理解できた。本
当に嫌になる。否それよりも、謝辞と謝罪さえ交わした覚えが無い
など、話にもならないではないか。

そんな、ほんと勝手な諦めの体裁で、ティアナは空っぱの言葉を
待って身を固くした。

黒猫、レーフェンはジツとティアナを見つめ何某か思索する様子で
暫し沈黙していた。

「……………必要なかったな」

「え？」

「邪魔をした」

にべも無くそれだけ言い置くと、レーフェンは早々に踵を返そうとするのだ。

出し抜けに緊張の糸を千切られ、これ以上ない肩透かしに呆然とデアナは立ち尽くす。

「あ、あのっそれだけ……ですか……？」

「？ それだけとは？」

「だって……」

思わず出た言葉に自分自身で驚いてしまった。不思議そうにこちらを見返すレーフェンの視線に口篭る。

これではまるで、自分は何かを期待しているようではないか。

「だ、だから……」

「……俺が此処へ来たのは高町に請われたからだ。先日
の件が尾を引いていると」

「……はい」

核心だった。前置さえない。

「ランスター、お前は失敗した」

「・・・・・・・・」

「味方を誤射した。それは重大であるし、気に病むなと言う方が無理な話だろう」

「・・・・・・・・はい」

「だが、万が一、お前が俺に対して謝罪の意思を示そうと言うのなら、それは何の意味も無い」

「つ・・・・・・・・」

一種辛辣な言葉。体が震えた。それでも耐えた。当然のことなのだと甘んじて飲み込んで胸に詰める。

「故に、謝るのなら俺ではなくスバルへ頼む」

「え」

「事故であっても、危険な目に遭わせてしまったのだから・・・・・・
・或いは再三謝罪した後だったか？なら、伝えたかった事は以上だ」

辛辣であつたはずの言葉は、その実いかにも在り来りな、子供にでも言い聞かせるような内容だった。

「そ、それだけじゃない！私は、私の都合で、スバルをつ……………そんな簡単なことじゃ……………」

納得出来ないと、何故かティアナは食って掛かる。声を上げて、駄々を捏ねて、納得出来るだけの『言葉』を求めている。
しかし、黒猫が返す答はやはり簡潔だった。

「間違いなら、今お前が正している」

「へ？」

「その為に此处に来たのだろう？その銃を持つて」

そう言つて、レーフェンはティアナの両手にぶら下げられたままの拳銃二挺を見やった。つられてティアナもまた視線を落とす。ずつと力任せに握り締めたままだった所為で、握力は限界近いはずなのに指だけが凝り固まつてしまっている。

視界に収めたと同時に、刺さる後ろめたさで身が縮まった。

「これは……………そんなんじゃないです……………私は……………」

」

結局あんな失態を通して、自分の本質は何も変わらなかったのだ。弱い自分が嫌で嫌で嫌で、それを必死に否定して無理矢理にでもと高町隊長の命令を無視して訓練を詰め込む。それは決して、レーフエンの言う『贖罪』なんてものからは程遠い自分勝手だ。

「・・・・・・・・贖え、などと、俺が言えた義理か・・・・・・・・」

「?・・・・・・・・」

何故だろう。侮蔑と嫌悪を噛み潰したようにレーフエンは一瞬だけ表情を顰めた。そしてその感情の矛先は明らかに外側には無かった。もう一度、レーフエンはティアナを見上げた。

「ランスター、お前を動かしている『モノ』が何なのか俺は知らない。お前にとつてどれ程大切なのかも・・・・・・・・俺が口にして良い筈が無いんだ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「だが、それを知らないからこそ・・・・・・・・少なくとも、俺にとつてお前はひどく尊い」

「・・・・・・・・え」

ティアナが言葉の意味を飲み込めないまま、レーフェンは続ける。
大切に、言葉を紡ごうとする。

「恒久的な正しさを——義か、道徳か、自責か贖罪か——お前
が求めているのなら、俺は口を開くことさえ許されないだろう。そ
れは到底この身に余る。俺に言えるのは、俺の手前勝手な心象と感
情に偏るばかりの安い言葉だけ……」

そう言ってまた、黒猫は恥じ入るように笑った。ティアナにはそう
見えた。

「俺はお前の在り方が好きだ」

「……………へ!？」

不意打ちだった。思わず言葉の意味に理解が及ぶまで何度も反芻し
てしまったのが悪かった。頬には一挙に朱が差す。

「只管に目的へ向かって力を尽くそうとしている。懸命に、一途に・
……トレース・投影……」

「あっ」

頭を大きなもので覆われる。突然現れた黒いタオルに思わず首をすくめてしまった。闇を写し取ったような漆黒の布は、ビロードにも似た艶を持ちながら真綿の様に柔く、優しかった。

「その在り方こそお前の本質のように思う……自己嫌悪など、畜生にも出来よう。そしてお前はそれで終わらなかった。未熟な自分を否定して、今もただただ前へ進もうと足掻いている」

「……………打算的でも？私は、私のエゴで今も色んな人達を蔑ろにしているのよ？」

レーフェンの言葉を全て受け入れる訳にはいかない。受け入れて、楽になろうとする自分をまた自ら否定したくて、ティアナは抵抗を試みる。酷く拙い、なけなしの。

「ああ、お前はそれをきちんと理解出来ている」

「あ」

気付いた時にはもう遅かった。静かな言葉達はすでに心の奥底へ、浅ましい感情など無視して沁み込んで来る。現金な話だ。認めてもらえた途端に、私は

「……………時間を取らせた。もう消えよう」

「・・・・・・・・そう」

「10分・・・否、5分で構わない。休憩を取れ。夜は冷える。汗もそのままにはするな」

「・・・・・・・・ふふ、はい」

踵を返して黒猫は歩き出した。来た時と同じ、去る時もあっさりと振り返ることもせず。

しかしティアナはもう知っている。不器用に世話を焼く、奇妙な思慮深い猫を。

この苦悩がその程度で消えるわけが無い。未だ胸には重い感情が蟠っている。軽くなっただけだ。そう、それこそこの数分の邂逅と同じくらい僅かに。

「ありがと・・・・・・・・」

それが嬉しくてたまらない。

無恥な言葉を論い、^{あげつら} 訳知り顔で説教を垂れ、^{あまつ} 剩え少女の信念を羨んだ。

少女の苦悩に俺はまた付込もうとした……。のだらうな。自己嫌悪が鎌首を擡げて、俺はまた動きを、思考を止める。これがあの少女と自身との決定的な相違。あの少女の善果。この俺の悪果。せめて、隠すこともしなかった自身の浅ましい本心が、正しく伝えられることを願う。

これが俺の役割が、女神

「半分正解♪残りは自分で考えな」

第9話 或る苦悩（後書き）

どうもお久しぶりです。

ホントに時間食って申し訳ありません！

執筆に取れる時間が無くて・・・すみません。

しかも今回ほとんど話しも進まず、無駄に長いという・・・。
言い訳しますと、難産でした・・・。

未だに読んでいただけている方には感謝のしようもございません。
読んでいただきありがとうございます！

第10話 再会と約束

ぼつねんと無造作に置かれたブラウン管テレビは、見るからに粗悪だと知れる画質で以て、度々訪れるノイズと格闘しながら映像を垂れ流している。小さなスピーカーから聞こえる音声は雑音やら砂嵐スノーノイズやらが混じり合い、くぐもっていて酷く聞き取り難く、聞くに堪えない騒音と化している。

「ティアナに説教イベント終了」。次はお待ちかね『頭冷やそうか・・』だあねえ〜！・・・・・ぐつへへへ、どうつすかな〜。ここはやっぱりあれだ、テンプレ通りティアナに切れちゃったなのはちゃんを颯爽とノす（レーフェンが）↓も一つなのはちゃんに説教↓なのは『私間違ってたのかな・・・・・』、レーフェン『そんなことは無い云々etc・・・（ニコ）、なのは『っ！（ポツ）↓フラグ建設！カンツペキだ！』」

白、白、白、世界こを占める色と呼べるものは古惚けたテレビを除いて唯それだけだった。胡座を掻いたまま寝転がる女でさえその白さに変わりは無く、否、女の白さこそこの空間において最も異常なのだ。

上を長袖、下は長裾の素材不明な純白の衣服に身を包み、腰周りを縛るのはベルトではなく銀の鎖。袖から覗く手足は白磁の如く、凡そ血色皆無の魔的な白さを持つ。地面に散乱する長い長い髪は、白の地面より尚一層の白。銀に輝く瞳を除いてこの女には色というモ

ノが欠如している。

「その後はどうすっかな。ああ、そういやスバルの姉とまだご対面してねえじゃん。へへっ、泣くのかねえ。やっぱ。姉妹共々と因縁作るってなかなか主人公してんじゃねえのアイツ。嫌がつてたわりに。はんっ！にしても転生のこと即行でばらしてやがんのかあの野郎。そこはやっぱ謎の人物、ってか猫演じるとこだろうよ。はやてとはなんか陰悪だしな。やっぱ無理矢理にでもイケメンに作つときゃよかったか？愛の黒子付魔^{たちま}貌で。忽ち大ハーレム建設ってか！ハハハハ！……」

笑った拍子に形の良い唇から覗いた舌は女の表面とは正反対に赤く湿り気を帯び、一際艶めいた。

「ま、やんねえけど」

事程左様に呆気なく、女の笑声は止んだ。一変して、女はさも不愉快げに鼻を鳴らし、勢いを付けて上体を起した。鼻先には相変わらず映りの悪い画面と、そして

「……さつてと！ここまで結構イベント^{こな}熟してきたし、フラグ建設も順調っぽいし、能力^{ちから}の使い道もこのバカ覚えてきてっし、スバルはいい子だし、ティアナはツンデレだし、そろそろ……」

「

次々羅列して行く言葉達は女の鼻先、冷たい蛍光体の表面にぶつかり、大した意味も残さず雲散霧消した。暫し、画面に走る静電気のぴりぴりという微かな音だけが、この何も無い世界を満たす。
おもむろ
徐に女は膝を抱え、何をするでもなくぼんやりと視線を泳がせた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

いかにも弱々しい、事実その声は震えていた。寂しさを音に、憤りを胸に、自己の矛盾に憎悪を宿す。

「次」

女は画面に手を伸ばす。
セカイ

唐突だった。

過去幾度と無く繰り返してきた世界『移動』。或る時は火の海へ、或る時は中世欧州の森へ、或る時は何処とも知れぬ暗い路地裏へ。それらは驚くほど呆気なく、こちらの意識を掻い潜るが如く成されてきた。一步踏み出した先が次元を隔てた異界である、それが半ば当たり前であるかのように愚かな認識さえしていたらう。

ランスターに背を向けて林を抜けようとした矢先のことだった。自身の周りに滞留する空気が、鎮座する木々が、差し込む月光が、一瞬で全て遠ざかって行った。

「――！」

声を上げられない。声という自身の一部を世界が受け入れてくれないのだ。

身体を取り囲んでいた空間というモノが身体の表面から剥離していく感覚。弾き出されて突き落されて、立って踏みしめていた筈の地面が矢庭に消え去ったような、筆舌に難い喪失感、疎外感、虚無感達の到来。存在というものが曖昧になり、自分という個を見失ってしまう錯覚。唯一強烈な目眩と吐き気だけが全身を覆うだけ、周囲は頼りない陽炎のようで、最早決して触れられないのだと、悟った。

「――レ――フ――！？――」

ほんの僅かばかりだけこの世界に居残っていた耳が、ランスターの

声を拾った。酷く、悲痛だった。

——ああ、また、謝らなければ——

再び五感を取り戻せたのは、激しく動揺に見舞われていた自身を嘲笑うかのように呆気なく、僅か数秒後の事だった。

「なんつ・・・だ・・・」

消失した足場が急速に戻ってくる。消失した大気が一気に身体を包み込む。欠けていた要素が寄り集まり、漸く俺が^{レイフェン}出来上がった。吐き気が抜け切らないままに二、三步よろけ、ぼやつく視界を見渡した。

林の中だ。腐葉土や木々の高さを見るに付け山の奥地と思われる。夜ということもあって静けさには拍車が掛かり、動物の気配も無い。月が木の間から顔を覗かせてこちらを見下ろしている以外、光さえ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何時もの事なのだと、認めてしまうのは傲慢に過ぎる。

数百メートル先でチラつく光は、何者かが発する力の光なのだと理解が及ぶのに時間は要らなかった。

また、誰かが闘っているのだ。

状況もまた以前とそう大差は無い。圧倒的多勢に対しておそらくはたったの二人が、劣勢を強いられて尚抗い続けている。

斬月を引き抜く。到底身に合わぬ、五尺を優に超える大刀は月の光に妖しく照され、刃先を更に鋭く研ぎ澄ませた様にさえ見える。思考する暇があるのなら疾く動け。

「ああ、全く至言」

ランスターに、己は何とぼざいたのだ。間違いを正すためにあの娘はあの場に居た。懸命に一途に、足掻いていたのに。

斬月の柄を噛み締めて、己の愚かを憎悪して、俺は奔った。

目算距離にして約500メートルを一瞬でゼロに。林を駆け抜けて眼前に現れたのは広大な河川と夥しい化生共。そしてその異形の中に人影が二人。

一人は、髪をシニヨンに纏めた小柄な少女。自身の身の丈を遥かに凌ぐ鬼共を素手で相手取っている。そしてもう一人は、硝煙の匂い。

陣を成す烏天狗達は一人を取り囲んでいた。烏独特の黒羽を揺らし、鈍く光る大刀を振り翳す。

そんな包囲の只中に悠然と立つ女、否、少女。

跋扈する化生達を掻い潜り、川面を蹴りつけて跳んだ。

『なんや!?!』

「え……」

驚愕を貼り付けた烏天狗と少女はこちらを見上げて一瞬凝固した。構わず、少女の足元に着水。飛沫を上げて、刃を濡らし、居並ぶ烏を纏めて斬る。

『『『『『がああっ!!』』』』』

響く絶叫。吹き飛ばされ黒い体躯、消え逝く烏達。

而してそのまま止まらず、烏達の包囲を斬り破ると同時に駆けた。目標は棍を構える大鬼。見かけの大きさに比して大鬼の動きは敏速だった。素手の少女から距離を取ると瞬時にしてこちらの迎撃態勢へ。

斬月を一閃。

劈く金属同士つんざのぶつかり合い。顎から伝わる大鬼の威容に相應しい尋常成らざる怪力。しかし

「月牙」

『ぬっ！？』

刃先から漏れ出す高密度の霊圧。このたった一瞬でこちらの思惑を察知したか、大鬼が恐るべき速度でもう片方の拳を撃ち出して来る。後一瞬でもタイミングを逸していたなら無様に地を這ったのは、己だったろう。

「天衝！」

可視の斬撃は鬼の巨軀を棍の上から斬り飛ばす。飛沫と土砂と化生達を巻き込んで、大鬼は川の対岸にまで吹き飛んで行った。

一閃して血振るいを済ませ、周囲を見渡した。先の二人を含め、周りに居並ぶ者全員が凍り付いたように硬直している。

……無理も無いのか。

「……………やっぱり唐突だな。お前は」

「……………返す言葉も無い」

呆れたように少女は溜息を漏らした。

一体この邂逅が何時振りのことであるのかさえ解っていないのだ。己のなんと不遜な物言いか。

しかし、次の瞬間には、少女は豪く優しげな笑みを寄越してくれた。

「会えて嬉しいよ、レーフェン」

「無事で何よりだ、真名」

褐色の少女は今日もまた戦場に身を置いている。一度嗅いだことのあるこの気配ににおいも随分と懐かしく思えた。

突きで鬼の二、三体を吹っ飛ばして、もう一人の少女もこちらへ駆けて来た。

「真名！誰アルかそのつおい猫！？」

「ああ、ちよつとした友人だよ」

流し目にこちらを見やりながら真名は言う。少女の方はその大きな

目をさらに見開いてまじまじとこちらを見ている。

「はあく、喋る猫アルか……私古菲ネ！よろしくアル！」

「レーフェンだ」

快活な少女、古菲はその白い歯を見せて笑った。とても数多の鬼を屠っていたとは思えない、まだまだ幼さの残るあどけない笑顔であるからこそ疑問は後を絶たない——取り分け、森を抜けた先から見下ろす湖上の有り得ない『巨躯』について。

「何故に……？」

「戦っているのか、か……話すと長くなる」

「そうか、なら是非も無い……」

「悪いね。後でゆっくり——っ！レーフェン！」

振り返り様に斬月を斬り上げる。同時に刃が二刀を捕えた。

「あらら、やっぱ防がれてもった」

「ふっ」

切り払って距離を取る。対敵はその反動を実に器用に利用すると遙か後方へと着地。身の熟しこなのしなやかさが異常だ。人間離れしているな。……決して自虐ではないが。

「お初に。月詠言います。どうぞよろしゅう、ネコはん」

小太刀と小刀をだらりと携え、あまり戦場向きでもないだろう華奢な衣裳を揺らし、眼鏡の奥で少女は微笑んだ。寡聞にしてこの物言いが適切かは解らない。しかし、この少女は危険だ。

「だ、大丈夫アルか!？」

「問題ない。それよりあれは」

古菲は慌てた様子で自身の隣に並んだ。見れば真名も無言でライフルを構え、対する少女を睨んでいた。

成程、二人の態度から十分に理解が及んだ。目の前の少女は要注意と。剣術も然ることながら、足運びの異様な静かさは暗殺剣故か。気の練り一つとってもその柔らかな面持ちからは考え付かぬほどに鋭利だ。油断など愚にも付かぬ。

何の気の迷いか、少女の目が酷く好色なものを帯びたように見えた。視線の先は……。斬月？

「あつははゝええどすなゝ、解りますえネコはん。柄も鐔もあらへんその希代な刃、えらい業物でっしゃろ」

「……生憎と刀工は言えぬ。ただ、魂が籠められている、と」

「魂……うふふつ、あゝ、そらますますええ……」

こちらの返答をどのように受け取ったのか、少女は小太刀を淡く染まった首筋に添わせた。銀の輝きが細い顎を照らし、頬を伝い、潤んだ瞳に吸い込まれていく。

「センパイには逃げられてもうて、体火照ったままお預けくろうて、もう……ウチ……ねえ、ネコはん、慰めてくれます？」

「如何とも……」

「うふふふいけず」

少女はそう言つてまた妖しく微笑んだ。瞬間、弾けるように小太刀で空を薙いだ。遅れて丹田に響く重い銃声が身を叩く。

古菲と共に隣を見やった。銃口からゆらゆらと紫煙が燻っている。

「そろそろいいかな。無駄話で有限な時間を浪費したくない」

薄闇の中で眼光は浮き彫りに、真名の静かな声はひどく冷たかった。銃声が文字通り引き金となったか、疎らに屯するだけだった鬼、烏妖狐が再び包囲を築いていく。半ば弛緩していた空気はすでに引き絞られた弓のように一瞬の油断も許されないものへと変貌した。

『おおおお、酷い目に遭うたわ』

『全く。腕を持っていかれた』

のそりと、半分に折れた棍を肩に掛け、先程対岸に飛んで行った鬼と出会い頭に斬り付けた烏天狗の一人？が川面を散らしながら円に加わった。

決して手を抜いた心算は無い。にも拘らず送還し切れないか。愚かしくも、己の閑却には唾棄が尽きる。

「ふんっ、おちおち再会を祝う暇もない……化物に思慮を期待するだけ阿呆らしかったね」

「むむむ？猫、なにやら真名が不機嫌ネ」

「クー？」

「なんでもないアル」

「……………」

二人の遣り取りはさて置くとして、己を敵陣に投下しても結果はさして変わりなし。相も変らぬ包囲をして、如何にこれを斬り破るか。

「前と同じでいいさ。数を粗方散らした後、三人で各個撃破……
・・異存は？」

笑みを向けて真名は言う。少々含みを持たせた物言いには、烏澁がましくも望外な信が置かれていた。
全力で応えよう。

「了解だ」

「対！」

古菲の威勢の良い声と同時に三人はそれぞれ三方へ跳ぶ。火器を駆使用する真名が巨大な鬼を、古菲は素手で人型を主立って狙うようだ。そして己は

「あつはは！」

「……」

牽制に放った刺突は軽く往なされた。それだけに終わるはずもなく、少女は無様に跳躍したまま滞空する自身を狙う。

全力で体を捻り、一刀目をやり過ぎ、二刀目を刃で受けて一旦距離を取る。

「まだまだ……！」

「っ！」

追い縋るように少女は一瞬にして五間先の己に斬りかかって来た。瞬動か。受けざるを得まいよ。

金属が金切り声を上げる。上から押し掛かれるように鍔迫り合う。

「見た目はかわいらしいのに豪い力持ちおすな」

「お互いに」

「まあ嬉しい」

小さな体軀を無視した怪力。気で筋力を強化しているが故か。幼い面差で見誤った。

不意に、少女が眉を顰めた。

「残念やわ」

「？」

「ネコはんがお人やつたら、もっともっと楽しいんやけど……」

二刀で斬月を斬り払い、こちらの追撃を避けて少女が後方へ翻る。逆手に持ち替えた小太刀をこちらに差し向けながら、尚も少女は溜息を吐いた。

「もしや化猫はんの類か思たけど、どうもちゃうみたいですね」

「何を………？」

「日本の化猫は人に化けて人を化かすて、知りまへん？」

「………成程」

言わんとしていることは大体解った。要は、この少女は対人戦闘を望んでいるのだ。先刻から散見される言動からも、この娘の狂おしいほどの戦場への欲動が窺い知れる。以前に一度知った。あの槍使いと同じ。

己の身体について知るための時間はもう十分に与えられた。姿形を変える事などかくも造作のないことなのだと。そして、もうすでに知っている………この猫の殻に意味などないのだと。

「あかんどすか？」

「………申し訳ないが」

「そ、残念♪」

言葉とは裏腹に、少女は上機嫌に微笑んだ。

食い縛り過ぎた顎からごりごりと何かが碎ける音を聞いて、天ヶ崎千草は眼前の現実によく帰った。

様々な策を講じて、多くの障害を排除して、屈辱と汚泥に塗れながらとうとう辿り着いた満願を彼女は今奪われようとしている。

二面四手の巨軀の大鬼神リョウメンスクナノカミ。伝承に記されていた十八丈という身の丈を遥かに超えた威容。内包された凄まじいまでの力。それを千草は我が物としたのだ。誰にも負けない強さ、全てを打ち壊せる破壊の権化を。たった一瞬でも、彼女は手にしてしまった。

そして今、それは彼女の手を離れ、目の前で高らかに笑う少女に脆くも砕かれようとしている。

肌を刺すこの寒さは夜気ばかりのものでは断じてない。眼前で渦巻く魔力が放つ強烈な冷気が空気を凍らせているのだ。あと少しでもスクナに近寄っていれば、忽ちに体は壊死し、肺は氷り、自分の人生は呆気なく終わる。

「あ……………ああ……………」

眼下でもがき苦しむ、湖面から生えた大鬼の上体はすでに半分上が凍てついて動かない。凄まじい叫びを上げて、凍り残った唯一の腕を恐るべき怪力で振るっている。その拳が当たりさえすれば何物も破壊されずにはいられないだろう。それだけの力があるのに。目の前にまで、手を伸ばせば届くはずなのに。

復讐の成就が、一生を賭けた念願が、生きる目的が、崩れ去ってしまっ

「おとうちゃん……………おかあ、さん……………の……………」

手を伸ばして返ってくるのは凍える程の虚無感。大規模に展開した結界がスクナを捕えた。もう終わりだと耳元で宣告されたようだ。押し寄せてくる絶望にただただ体は堕ちていく。だが、弛まぬ怨嗟に満ちた心はそれでも自身を許してはくれない。殺せ殺せと叫び続ける。最愛の人達を殺した者共をどうして赦しておけようか。

力があれば、殺し尽くすだけの力、絶対の力^{スクナ}が完全に手に入ってさえいれば

『へえ、じゃあ試してみるか?』

「へ?」

右手が、燃えるように熱い。熱源は手の甲から、光り輝き圧倒的
自己主張を見せる『ソレ』は――

「な、なにつ!?!」

150フィート四方の広範囲をほぼ絶対零度で覆い尽くす完全凍結
殲滅呪文“おわるせかい”

如何な大鬼神といえど仮にも生きているモノが、摂氏マイナス27
3・15度近い極低温空間、形を保つことさえ厭う吸熱の地獄の中

でどのような抵抗が出来るというのか。

あろうことが鬼神は健在だった。

四本の腕の内二本を湖へ落とし、もう一本は壊死して、辛うじて残った最後の一本を湖面に突き立てながら、鬼神は未だその身を保っている。

否、保ってなどいない。眼下にいるのは、最早鬼ではない。

「魔力、だと!？」

鬼を喚び出しただけの近衛木乃香のそれではない。現にこの魔力は鬼そのものが発しているではないか。
膨大な、非常識なほどの

『マスター！退避を！』

「っ!？」

その瞬間、哄笑が夜空に響き渡った。女の甲高い常軌を逸した嬌声。

「狂ええ!!!!バーサーカー!!!!!!」

『■■■■■■■■■■ッ————!!!!!!』

それは声ならぬ獣の咆哮。凍てついた皮膚が剥離して肉が露に、壊死した腕はあらぬ方向へ捻れ、今にも千切れ飛んでしまいそうだ。だのに唯一健在な大腕を振り被り、鬼は壮絶な殺意をぶつけて来る。死を無視した闘争。殺された心。解き放たれた本能。狂鬼の拳は目前に――

戦慄にも似た悪寒が背筋を走る。感覚器官に甚大な魔力が叩き付けられる。対敵がいることも忘れて矢庭に俺は湖を振り返った。

「これは……………」

「？ 千草はん？」

魔力の増大は留まる所を知らず。傍らのもう一つの巨大な魔力に勝るとも劣らない、非常識な。

「……………この気配は？」

何時か嗅いだことがある。今更になって気が付いた。そう、以前嗅いだ時にはあまりにも弱々しく、そして阿呆の如く血が上った頭は記憶を朦にしている。結果、救うべき少女に救われたというのに。

「……………っ！真名！」

「な、なんだ！？」

「此処を頼む！」

一方的にそれだけ言い放ち、その場に背を向けて駆ける。鬼共の包囲は

「退け！」

『なんやなんやー！？』

「あゝん！ネコはんまでー！」

斬った。何の工夫も無ければ一切の躊躇さえしない。転がり出でるように包囲を抜ける。
間髪入れず、瞬歩に入った。

鬼やら妖狐やらを一掃して、黒猫はまたぞろ唐突に消えた。ただ、今回に関しては行き先が分かっている分、何故だか少し安心した。

「ど、どうしたアルか？レーフェン。えらい急いでたアル」

「……さて、ね。アイツが動く時は何かしら意味がある時だ……では、任された仕事を果たそうか」

愛用のボトルアクションをケースに放り、代わりに黒々の二挺を取り出す。グリップを握ると同時に今にも後を追って走り出しそうな一人に銃口達を向けた。こちらを見ないで動きを止めたのは流石にプロだ。

「も、お姉様方いけずやわ。間女は嫌われますえ？」

「初めから間に立っていた心算は無いよ。あの子は私が飼う予定だ」

と、なんとも勝手な決意を本猫の居ない場とするのはアレか。居たなら居たで、また困ったように考え込むのは目に見えているのだけれど。

真剣に悩む黒猫を想像したら、少し、楽しくなった。

迫る五発目の拳は辛くも回避。行きがけの駄賃に闇の射手を199本ほど見舞う。黒の弾丸共は狙い違わず鬼の長大な腕全体へ多弾頭ミサイルよろしく余すところ無く着弾して行った。

「糞っ!!」

『■■■■■■——!!』

傷一つ負わせられない。鬼は何事も無かったかのように再度腕を夜

空に振り上げ、打ち落とす。大気を巻き込み巨大な大岩が降ってくる。折れた左腕を抱えるように急速回避。掠りでもすればそれは致命の一撃と成り得る。一発目でその拳の威力は十二分に知れた。

「ぐうつ！・・・・・・無様な・・・・！」

口から滴る血を唾と共に吐き捨てた。先刻折れた肋骨がどこぞの内臓を傷つけたか、それともぶつ刺さったか。大した興味は無いが苛立ちが増す。もう一度悪態を吐いた。飽きもせず鬼はただ愚直に拳を、死の一撃を眼前の自身に喰らわさんと、未だ抜け切らない下半身を無視して追い縋ってきた。

「再生の暇を与えないため・・・・・・なわけあるか！」

数十トンは軽い、更に重く、その癖厭に敏速な拳が頭上を掠めた。はためいた髪が数本千切れたか。口にした懸念はひどく馬鹿馬鹿しい。対敵にそんな小賢しい理性など有りはしない。殺したい殺したいとさつきから五月蠅くて仕様が無いのだ。

『マスター！一旦戻ってください！この質量相手に単機では――』

「二機でも三機でも同じだ！満身創痍のぼーやに五月蠅いだけのバカが役に立つか！？」

従者の珍しい叫び声にこれまた叫び返しながら鬼から相当の距離を置いた。相手が自由に動けないのは好都合。

「全てのスペックを底上げしているのか……成程、魔法の射手程度で傷付く方がどうかしている」

改めて暴れ狂う大鬼を見やれば、単純明快な話。どんな魔法を使ったのか、スクナの力も速力も異常なタフネスも明らかな強化を施されているが為。拳程度と侮って一撃不覚を貰ったのも道理。こちらの想定した以上の力で魔力障壁ごとぶっ叩かれたただそれだけの事なのだ。

「ヒハッアハハハハハ！！殺せ殺せ殺せバーサーカー！！！！西洋魔術師共全部殺せ！！全部や！！」

未だ鬼の肩で狂ったように笑う女、否、もう狂っているのだ。その言動その瞳その愉悦に歪む容貌が、女の狂喜を証明している。

「狂戦士とはよく言ったものだ。あの女が契約を？……考えられんな」

飛騨最強とまで謳われた鬼神の能力を更に超えて強化するなど、並

の術師、この自身でさえ困難極まる（面倒臭い）作業を日本の呪術師程度が成せるはずが無い。では何故か……

「ふんっ興味は無い。精々私に一発くれたことを後悔させてやる。このままでは……あのバカに顔向け出来んわ！リク・ラクラ・ラック ライラック！」

出し惜しみはしない。相手が脳無しのため狂った莫迦ならば、こちらでも力押しで応えてやるまで。

「来たれ氷精 闇の精 闇を従え吹けよ常夜の氷雪！！」

どれ程堅固であろうと動けぬ的に負ける道理は無い。最大級の魔力を右手に収束し眼前の化物を

――不意に、鬼神が動きを止めた。如何に長大な腕でも此処まで届きはしない。それを理解したのか？

――鬼神の眼光が自身を射抜く。そして徐にその巨大な口腔を晒した。大気を揺るがす煌き。

「っ！？収束砲！？」

『■■■■■■――！！！！』

強烈な光と肌を焦がす炎熱。白い焰が迫り来る。

完全なる失態、どうしようもない油断、向こうにも飛び道具があった。このタイミング、角度、距離、速力では――避けられない。

「マスター――！」

「エヴァンジェリンさん――！！？」

叫びが遠い。思考までもが鈍い。夜気を焼き払う光の渦が自身を飲み込まん^{かす}と喰らいつく。後には残り滓。灰は灰に、塵は塵に。

「・・・・・・・・」

「あ――」

目の端に『黒』を捉えた。恋うて求めて待ち侘びた、優しい黄金の瞳を。

体に衝撃。しこたま体当たりを喰らったらしい。でもそれでようやく見られた。ああやつぱりアイツだ。いつもの如く唐突に、会いに来てくれたのだ。

「レ――」

白い焰はそんな黒い小さな体軀を、横合いから躊躇無く飲み込んだ。

「え？」

目が焼かれるほどの強烈な光を放って、焰は眼前を燃え盛った。無様に伸ばした手は何も掴めないまま腕ごと焰に没われた。焰が止んだ。

「あ……え……レー、フェン？……」

もう、猫はいなかった。

「——っ！！！！」

覚醒は比較的早かった。最初に感じたのは臭い。肉が焼け、脂が溶けて、血が沸騰する異臭。続いて音。木がパチパチと弾ける軽快な音。踏みしめた足場のどろりと溶けた感触。次に熱。最後に痛み。

「……っああゎ ああああゎ ああああゎああ……!!」

鬼神から放たれた多大な熱量を諸に受けて身体が溶けているのだ。皮膚は爛れ、^{ただ}耳は削ぎ落ち、手足は折れて骨が突き出ている。体外に流れ出た血は滞留する熱気に蒸発していった。身体は赤黒く溶けた土砂に埋れ、毛髪など疾うに焼け切り、宛らスフィンクスと言った所。要らんことに声帯は無事だった。思う存分叫ぶことができて全く嬉しい限りだ。

ゼラチン質が沸騰して破裂した眼球が機能するはずもなく、全てその他感覚器を総動員して確かめた身体状況だ。より端的に言えば死に掛けている。

「おっぐ……あ……が……!」

碌にフィールドも張らずあの熱波に飛び込んだのは、言わずもがな愚かだった。

遙か彼方へ吹き飛ばされるのだけは免れた。隕石の如く近くの山に命中し、振り返って見れば大仰なクレーターが山肌を抉って木々を薙ぎ倒し、一本道が拓けている。所々に火の手が上がり、溶けた土砂は溶岩流のように真赤だ。

唯一つ幸いだっただのは、一先ず間に合ったことだろう。あの少女は果して逃げられたろうか――

「・・・・・・・・」

何を、言っている。何が幸いなものか。この畜生は何を安堵している。

無駄に精緻な感覚器官を持つておきながらこの度し難いほど鈍重な脳味噌は、あるうことか少女を救ったと思い込んでいやがる。

闘っている。未だに、否、寧ろ先刻以上の荒々しさで。何がそこまです少女を駆り立てるのか。我武者羅に、無謀の一言に尽きる激しい魔力の高まり。

「・・・・・・・・何が、だと？・・・・・・・・」

この疑問があの子をどれ程に愚弄しているのか、理解できぬ程に己は愚かなのか。

俺の為、否、俺の所為だ。烏澁がましい烏澁がましい烏澁がましい。

「っ！・・・・・・・・」

折れた足。機能しない目。何物も掴めない手。もう要らない。
そも、この程度では死なない。この程度では死ねない。この程度で、
赦しを得られる筈が無い。

「・・・・・・・・！」

両の腕を伸ばす。二本の足で地を踏み付ける。黒い外套を風に晒し、
斬月を握り締めた。
切先を向けるべき敵は大鬼であって大鬼ではない。何よりも己自身
に俺は刃を突き立てなければならない。

「———卍———解———」

光の剣を振るう。迫り来る拳を切り裂くために。避けるという思考は既に頭から消え失せていた。だって避けてしまったらコレを殺せないじゃないか。

「殺してやる・・・殺してやる・・・殺してやる!!」

触れたものを気体へ強制的に相転移させる“エクスキューショナーソード”

躊躇いも容赦も棄て去って、真正面から突き立てた。途端に巨大な拳から噴き出してきた血が凍る。同時に右腕が折れた。構うか。放っておけば厭でも直るのだ。

「ああああ!!」

拳を蹴り付け剣を抜く。対敵の対魔力のせいで剣の効果が薄い。だからこんな木偶に梃子搦る。こんな雑魚。こんな滓に。

「よくもよくもよくも!!!!」

詠唱は止めない。吹き飛ばしてくれる。こいつはこいつがこの程度の屑が

「『闇の吹雪』！！！！」

掌から迸る魔力の吹雪、暗闇の嵐が対する戯けた巨体を余す所なく飲み込んだ。その勢力その威力その破壊力。自他共に認める死の氷雪は湖を氷付けに、鬼神の背後に位置する森林山々一切合財を巻き込んで全てを殺す。

「死ね死ね死ね死ね！！！！死んでしまえ！！」

此度狂ったのは己だった。目の前から消えてしまった者を、どうしようもなく恋うた者を、こんな、こんな奴に、奪われた。漸く会えた。五百余年ずっと待ち続けた。それを

『■■■■■■！！！！』

「ざあゝんねんでしたあゝゝ！！！！」

「つつ！？」

吹雪を蹴散らして手が現れた。尋常を超えた威容の手掌。瞬間、身体全てを掌握された。バキリと身体が軋みを上げる。

「あつが！？」

「ヒツヒヤハハ！！死ぬんはお前や西洋魔術師！アハハハハハ！！」

女は狂喜した。鬼神の傍らを飛んではいながら無事でいられるはずがない。体の彼方此方が凍りつき、最早動かないだろう手足を揺すつて子供のように喜び笑うその有様。

もう一度身体が鳴った。両肩が潰れた音だ。

「マスターを放せ！！」

「馬鹿！来るな！！」

何時の間に接敵していたか、従者の手には使用済みのカノン。弾丸の無い大砲を棍棒のように振り被り鬼神の握り拳に叩きつけた。ビクともしやしない。

鬼神は自身を握り締めたままその拳で羽虫の如く茶々丸を殴りつけた。

「茶々丸！！」

文字通り糸の切れた人形のように茶々丸は近場の森へ吹き飛んだ。

「貴っ様ああ！！」

もがけど足掻けど微動だに出来ない。そうしている間にも圧倒的握力のプレス機は全身の骨という骨をスナック菓子のように潰している。呼吸が止まる。

「はあっ………!!」

「終わりや終わりやこれで終わりや！やれ！焼き殺せ！バーサーカー！！！」

『■■■■■■——!!!!』

収束される熱量。大口を上げて、最後の一撃を見舞わんと鬼神の殺意が押し寄せる。おそらくは拳ごと焼き払われる。

久しく感じなかった死を目の当たりにしている。

それでも、激情は止まぬ。怒りが収まらぬ。到底赦せない。

だって、このままじゃ哀しみを拭えない。また、別離に泣かなければならない。なあ

「レ……フエ、ン………」

目の端に『黒』を捉えた。

『■■■■■■■■■■———?!?!?!?』

「なんや!？」

唐突に、身体を押し潰していた圧迫が消える。代わりに柔く、優しい腕が体を包み込む。

「あ……………」

肌に触れるコートの感触は夜気に触れていたからかひやりと冷たかった。

はためくコートの裾が烏のように広がり、その下から覗く足も長裾のズボンもブーツも全てが黒で構成されているのが知れた。

顔はフードで深く隠され、その奥はまるで夜の暗闇。表情所か輪郭さえ掴めない。

でも、瞳だけは金色で

「……………レーフェン……………」

優しげに私を見下ろすのだ。

最早原型を留めぬ棧橋に降り立った。

先の一太刀で手首から先を切り取ったため、大鬼は痛みを無さそうにこちらを注視している暇は無さそうだ。片腕に抱えた少女に向けて呪文を紡ぐ。

「ケアルガ」

「あ………」

折れた腕、傷付いた内臓、裂傷、打撲に到るまで全てに必要以上の魔力で以て治療に当たる。痕など残さない。せめてもの償い。罪悪の裏返し。反吐が出そうだ。

傷が粗方癒えると、そっと少女を降ろした。言葉は無い。ただ、何か言いたげな視線がこちらを見上げるばかり。

「マ、スター」

「っ！茶々丸！」

橋に横たえておいたもう一人の少女が無理矢理に起き上がろうとものがいていた。声を上げて少女が駆け出す。

「茶々丸！お前、傷は！？」

「外装の、損傷は甚ダイですが、それ以外は問、題ありません」

「そう、か……………」

少女は少女を抱き起こしたまま俯いて言葉を失った。漏れ聞こえてくる嗚咽を早々に振り切り、未だ喧しい鬼へと視線を移す。腕とも呼べぬ腕を棒切れのように振り回し、声ならぬ咆哮を周囲に撒き散らす獣。

天鎖斬月の黒い柄を握り直す。この理不尽極まる怒りを他者にぶつけるのかと思うと、己の思考に吐きそうになる。

「レーフェン」

「……………」

少女の声、涙を湛えた瞳は、自身をその場に射竦めてしまう。力強く、頼りなげな、矛盾した美しいモノだと思った。

「……………もう、あまり待たせてくれるな」

光が目を焼いた。大鬼の口腔を満たす焰。収束される殺意の体現が降ってくる。
手掌を翳した。

「ATフィールド」

正八角形の鈍色の盾は微塵の揺らぎも見せず、迫り来る白い焰を止める。

頭上に翳した手を正面に構えた。最後の工程を始めよう。

「トレース
オン、
投影、開始」

左腕に魔力が浸透し、満ちた。

造型すべきイメージを今か今かと待ち侘びている。
魔術回路に命ずるカタチは唯一つ。

創造理念
基本骨子
構成材質
製作技術
憑依経験
蓄積年月

あらゆる工程を以て、唯一無二の聖剣を穢し尽くす。

掴み取る。黒い光で編まれていくその剣を。化物が扱うには、彼の宝具は余りにも尊い。ならば、黒く汚すしかない。それでも尚、最強の幻想は美しかった。

「な、なんやねん……なんやねんそれえ……！」

『■■■■■■——！！！！』

女の声に呼応して、大鬼が来る。満身創痍の体を厭わず、ただただ殺すためだけに。恨みなどない。理由も、因縁も有りはしない。それはそのように出来ているのだ。そのように作り変えられたのだ。だから今は、ただ殺す。

「約束された——／月牙——」

用意した二つの声帯は二つの名を叫ぶ。二刀を左脇に構え、魔力を、霊圧を、限界を超えて高めていく。大鬼の咆哮も女の狂声も遠い。

「勝利の剣……！！／天衝……！！」

黒い二刀の刃。巨軀を飲み下す闇黒の斬撃達。
咆哮を斬り裂き天を衝く。狂鬼を穿ち約束された勝利を敢行する。
これら二つを前にして、如何な威容、如何な化物、如何な存在その
悉くが――塵芥。

橋を戻ると人影が数人増えていた。先の少女達の他、真名や古菲、
見知らぬ少年少女達。一様にこちらを見ているのは警戒の現われか、
戸惑いの渦中にあるためか。どれにせよ相応しく思えた。
金糸の髪を揺らして少女が歩み寄ってくる。その表情は泣いている
ようで、微笑んでいるようでもある。どちらにせよ、解ってやるこ
とは出来ないのだ。

「なんだ、やっぱり強いじゃないか。怒って損したわ」

「……………すまない」

「いい、謝るな。生きていたな、猫」

「ああ」

今度こそ少女は微笑んだ。勝気だった瞳が細められ、年相応の随分あどけない笑顔だった。

「……………行くのか」

「……………ああ」

少女は静かにそうか、とだけ言っただけでそのまま暫し押し黙った。言葉を探しあぐねているのか。口は小さく動いているがそれが声になることはなかった。

「一つだけ」

「？」

少女は首を傾げて自身を見上げた。不遜ながら、見上げられるのは少し新鮮だった。

「名前を」

「ああ、そうか。名乗っておらんかったな……」

俺は未だこの少女の名前を知らない。それは酷く無礼に思え、そして悲しいことだろう。それに

「俺はまた、お前に会いたい」

「え」

「だから教えて欲しい」

名前を知れば、もう悲しませずに済む。そんな風に、何故か思えるのだ。

一瞬、虚を突かれたように少女は呆然としていた。文脈としても確かに奇妙。言葉を失くすのも納得出――

「……………」

「ああ、うつ、ああああ！……っ！……！」

腰に取り付き、少女は泣いた。顔を埋められた腹に嗚咽が響く。涙

と吐息で黒いコートは黒く濡れる。

それは、鬼の拳よりも重く、鬼の焰よりも熱く。己が無力な畜生なのだと思い知らされた。

そつと美しい金色の髪を撫でた。それ以外に何ができる。

「エヴァンジェリンッ、エヴァンジェリンだ！……」

「エヴァンジェリン。二度と忘れん」

「ああ、忘れるな……！」

気丈に振る舞えど、コートを握る手は震えていた。罪悪感の去来は押し留めること叶わず、俺はまた拳を握る。約束を一つ。

「近い内にまた会える。必ずだ」

最後に見下ろした涙に暮れる潤んだ瞳は、はにかむように、それでも不敵に、微笑を浮かべてくれた。

改めて思う。己のこの、流されるばかりの境遇が如何に蒙昧であるのかを。多くの形で様々な人々を悲しませている。関わり会った責務を放り、世界に逃げ隠れを繰り返す。
今日もまた、一人。

第10話 再会と約束（後書き）

どうもお久しぶりです。

細々と地味に更新してまいりましたジサツ転生者もようやくと10話（番外・プロローグ抜き）。時期的に更新が難しくなっていましたねえ……。

などと愚痴を零しても始まりませんので、これからも執筆頑張らせていただきます！

あ、初人型。

コートのイメージはあるゲームの某？？な機関のあれです……
・人によって解らんだろくに、描写の貧弱さが伺えますね……
・。

なにはともあれ読んでいただき本当にありがとうございます！

PS

ご意見ご感想など仰っていただいたなら作者は尻尾振って喜ぶと思われます。

……よろしければお願いします。

第11話 変化が劣化か

そつと息を吸った。

二月を迎えても朝の刺すように冷たい空気に変化はなくて、まだまだ春は遠いのだと思いい知らされる。肺を満たす冷気が身体を引き締めているようだ。自ずと神経が集中の準備を始めるのが分かった。

足踏みから胴作りへ。淀み無く流れるように。ひやりと静謐が鎮座した板貼りの床に衣擦れの音が這う。

弓構え、打起し、引分け、会。より意識を欠いて、全ての工程を一つの動作と捉える。耳元できりきりと弦が鳴る。

離れ。

「ま、病み上がりならこんなもんか」

残心を終えて、美綴 綾子は初めて息を吐いた。
弓道場に人影は無く、たった一言の呟きがやけに大きく響いた。手

から弓掛けを外しながら板間を滑るように進み、もう一度息を吐く。まだまだ本調子とまでは行かないまでも、二、三日休んでこれなら挽回も出来るだろう。最後の溜息は安堵からだった。

美綴 綾子は数日前から昨日まで、ずっと自宅で軟禁状態にあった。

その日、出掛けたまま連絡も無く帰りが遅いと家人が心配し、搜索の算段がされ始めた頃に綾子は帰宅した。帰宅した、という表現には少々の語弊がある。なんと自宅前で倒れていたのを発見されたというのだ。慌てた家族はすぐさま綾子を病院へ担ぎ込み、検査がどうだ入院がどうだとてんやわんやだったのだ（翌朝まで綾子は意識が戻らず、それも必要以上の危惧に繋がったのだと思われる）。

実際の所、綾子は特に重大な病気が発症していたというわけでも怪我を負っていたというわけでもない。なんともあつさりした医者 of 診断は『単なる貧血』だった。

しかし、それで納得出来るほど彼女の両親の神経は丈夫ではなかった。たった一人の娘（息子は一先ず除外）が夜遅く、それも明らかに何かあったとは思えない帰宅の仕方をしたのだ。心配するなど言う方が酷だろう。

結果、自宅療養という名の下綾子は登校すら許してもらえず、暫し拘置所で尋問を待つ容疑者のような生活を送ったのだった。

悉く「覚えていない」という返答もまた不安を加速させた要因だろうに。

持参した水筒から注いだお茶の湯気を眺めながら苦笑いが漏れた。

「言えないよねえ。変なのに襲われて猫に助けられました、なんて・・・あゝ、やっぱ無いわ」

実際、啜ったお茶は少し渋くて、少し苦かった。

沈痛な面持ちで事情を尋ねてくる家族には申し訳なかったが、記憶がないというのは半ば嘘である。確かに臃^{おどろ}げで要領を得ず、理解出来ない情景ばかりだが、何をしていたかくらいは覚えている。

あの日、間桐 慎二に呼び出され、なんとも胡散臭い路地裏にまでまんと自分は付いて行った。酷く阿呆のように思えてならないが、その後途轍もない悪寒と共に目の前が真っ暗になったのだ。身体は重く、頭は熱に侵されたように上手く機能しない。まるで夢を見ているような判然としない世界と自分。

「・・・・・・・・・・はあ」

考えたところで何が分かるわけでもない。本人を問い質そうにも、慎二は最近学校に来ていないらしい。益々以て疑惑は尽きないがどうすることも出来ず、なら後は

「猫、か」

「美綴先輩？」

「ん？」

唐突に、呆けていた矢先に背後から声が響いた。振り向けばそこには、見慣れた顔が不思議そうにこちらを見下ろしている。

「や、間桐。今日も早いね」

間桐 桜、先程まで思考に上っていたろくでなしの妹。

しかしこの兄妹は似ている箇所を探すのが無謀とついくらい似ていない。間桐桜は同性の自身から見てもほとほとよく出来た女性であるように思う。時々ご相伴に預かる弁当の味から鑑みるに良い嫁になることだろう。うん、間違いない。

「衛宮のバカには勿体無いね」

「え、あの、何のことですか？衛宮先輩がどう……」

「おっと、ごめんごめん。ちょっと考え事をね」

手をひらひらさせて苦笑い。邪魔する心算は無くとも口を挟むのは野暮だろうに。馬に蹴られるなんてもっとまっぴらだ。

「アイツもアイツで休んだつきりだし、なにやってんのやら……」

「……」

「それよりどうした？今日は朝練休みのはずだけど」

「そ、それは、先輩こそです。部室の鍵が開いてたのもしかした

らつて。……あの、もう、体は………」

途端に、間桐は殊更表情を曇らせた。随分と心配されていたのだろうか。それにしたって大袈裟に過ぎる。まるで痛みを堪えているような悲痛な顔。
思わず目を瞬いて、その顔をまじまじと見つめてしまった。

「あつ、その、もう射の方は？」

「ん、粗方ね。でも吃驚だよ。たった何日間だったのに豪く鈍っちゃってるみたい」

「そうですか、よかったです、と間桐はまたぞろ豪く安堵したようだった。」

「よかないさ。技量が身に付くにはしこたま時間食う癖に鈍るのはそれこそ矢の如しだよ？人間の体ってのはどうしてこうも偏屈なのかね」

「あ……ふふふ、美綴先輩なら尚更です。なんたって我が部の部長さんなんですから」

「おつとと、期待はいいけどあんたも頑張んなきゃダメでしょが」

軽口もそこそこに、立ち上がって伸びをした。そろそろ朝礼が始ま

る頃だ。同時に冷たい朝の空気を思う存分肺に吸い込み、何とは無しに格子窓の向こうに目を細める。

「さ！そろそろ行こう・・・か・・・？」

——ふと、目の端を横切る何か。

「？ 美綴先輩？どうか——あ」

間桐の声には答えず、私は靴を取りに駆け出していた。

窓の向こうに広がる雑木林の木々達は、その一切葉を付けない枝ぶりの所為か、荒涼とした雰囲気を一層際立たせていた。一向寂寥として黒い木が立ち並ぶ無味な場所。秋、冬と季節を越す内、緑の生い茂っていた頃というものをすっかり忘れてしまった、そんな景色の只中で、目の前には

「はあっ、はっ、猫、だね、はあ」

遠目からでも窺える艶やかな黒毛。ほっそりとして伸びやかな肢体。動物らしからぬ理知的な意志の光を宿す金眼。朧な記憶と寸分違わぬ黒猫がそこにはいた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

程無く息も整い、矢庭に沈黙が降りた。無言でこちらを見上げる黒猫は、幸いにも突然目の前に現れた自分に驚いた様子こそあれ逃げる素振りは見せない。

木々の間を縫う様に吹いてきた風が頬を撫ぜた。暖かな優しさなど欠片もない鋭い一陣。つま先から背筋を抜けて微かに体が寒さを訴えてくる。

「・・・・・・・・・・あー」

寒風が契機となったか、自身の状態を鑑みるという思考が、この時初めて機能したのだということに驚かされる。

己は猫一匹に何を執心しているのだろうか。そも、目の前の見れば見るほど普通の黒猫が一体どうしたというのか。ここ数日の曖昧模糊とした自身の記憶の、これまた薄ボケた水彩画の如き情景に、少しばかりその影を見たからといって、浮かぶ言葉はただ一言。だからどうした、だ。黒猫など探せば何処にでも居るだろうて。

そのまま屈みこんで猫の小さな頭に手を伸ばした。嫌がるだろうか、という懸念が一瞬頭を過ぎったが、黒猫は黙ってこちらの掌に応じてくれた。流れるような毛並みとその奥の確かな体温は、寒空の下ではひどく心地良かった。

「あはは、温かいね、お前。うん、愛想はないけど頭は良さそうだ」

そんな半ば罵言に近い感想をまさか理解しているとも思えないが、猫は困ったようにみゃあの一鳴きするとそのまま目を瞑った。その様がなんとも可笑しくて益々弄りたくなってくる。どこぞのバカを相手にしている時のようだ。

「美綴せんぱい！」

「お」

猫を弄るのに夢中で間桐を放って来ていたことに今更ながら気が付いた。間桐は鞆を小脇に抱えて小走りに息を切らせて駆けてくる。そういえば走行競技は不得手だと聞いていた。餓鬼の如く猫に疾走した自身に追いつけるはずもない。案の定、目の前まで来た間桐は膝に手を付いて浅い呼吸を繰り返している。

「はあ、はあ、はあ、美綴、先輩、はあ、どうしたんです？」

「ごめんごめん。この子見つけてついね」

「え？、はあ、猫、ですか？」

「そうそうコイツ」

抱え上げた猫をずいと間桐に突きつけた。間桐の方はいえは当然意味も分からずキョトンとして猫を見返すばかり。

互いに睨めっこを強いられた一人と一匹の様子を私は暫く面白がった。

「学校で犬猫見かけると妙にテンション上がるでしょ？まあコイツの事はちよつと前に見たことあるやつに似てたからさ。確かめたくつて……ん？」

「……………」

「……………」

笑いながらそんな事をのたまっている自分を置いて、どういう訳か両者は沈黙していた。否、猫の方はじつと間桐を凝視し続け、対して間桐の方はそんな視線に射竦められてしまったかのように硬直している。

何れも只事ではない雰囲気醸しているのは確かだった。

「間桐？」

「——あつ！はい！なんですか？」

「いや、なんですかじゃなくてさ。大丈夫？なんか惚けてたよ？あんたこそ体調管理、しっかりしなきゃ」

「は、はい。すみません。あの、本当に大丈夫ですから……」

あからさまに取り繕うような物言いを当然承服できるはずも無く、さらに言葉を重ねようとした時——不意に予鈴が林に響いた。

「つて、もうそんな時間か」

「あ、先輩。早く着替えを」

「うわ！忘れてた！」

白筒袖に黒袴、スニーカーの中は靴下ではなく白足袋のままだ。猫を地面に下ろし、早々に弓道場へ踵を返す。

何となく後ろ髪を引かれ、猫に向けて軽く手を振った。

「じゃあね、猫！さ、行こう間桐！」

「あ、はい！」

息も吐かせぬまま間桐を引っ張りまわしているようにも思えたが、とりあえず急がなければと全力で駆け出した。背後から不平でも飛んで来そうなものだ。もう一度振り返り猫のいた場所を一瞥した。猫の姿はすでになかった。

肌を貫く冷気は朝独特の気だるさを。枯れ枝を力無く伸ばす木々は一層の孤独感を。感慨とも言えないくどい感想を諸々と垂れ流しながら、俺はまた異世界に来た。

「・・・・・・・・・・」

ただ、ほんの僅か、気を散らせば途端に消え入るほど微かに、安堵が四肢を軽くするのを不遜にも己は感じている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・無事だった」

涙に暮れる少女を放り、どろどろと糞の役にも立たない後悔を纏わり付けせる自身に嫌悪していた矢先の事。

暗い路地の短い邂逅、否、邂逅とさえ呼べぬ。意識の定かで無かったあの少女が覚えていたことこそ奇態だった。魔力の欠乏によつて死に掛けていた少女は、今もしっかりと生きていたのだ。

（あの女は、約束を果たしてくれたのだな・・・・・・・・）

体を抜けるこの感情は喜びなのだろう。久しく感じることさえ半ば禁じて来た烏滸がましい思い。渦巻く己への憎悪と嫌悪、答えのない疑問と矛盾不明な懊悩が満ちた今の生。そんな中に突然差した暖かなモノに――

「まだ」

浸れるわけが無い。

無邪気に笑うかの少女の傍ら。長く流麗な『髪』を片側に結い、困惑と戸惑いを湛えた『瞳』を揺らし、どうしてか生きているもう一人の少女。

その目、その髪、その身体、己が眼球に映ったのは、年若い少女らしきなどでは断じてなかった。

脳内を埋め尽くす決まり切った感情。打ち出される思考は何故何故何故。あの有様はどういうことだ。どうしてあんな少女の、否、少女かどうかなど関係ない。見えたのは危うい均衡。要らぬ知識ばかりが詰め込まれた役立たずの脳髓が導き出した結論、推論？仮説？どれでもいい。酷くドウデモイ。

そう、この唯々諾々とした思考こそが今は不要。己が取るべき行動は本来ならばたった一つ。ここで無駄に時間を浪費するだけの暇を己が有していないことをこそ知らねばならない。早急に迅速に可及的速やかに少女を、あの娘の身体を――

「――」

視界は赤に染まっていた。

赤、朱、紅、緋、丹、狂った結界^{いろ}が世界を包む。

身体に纏わり付き甘く温く舐る粘着質のコールタール。慈愛に満ち満ちた慈母の如く優しく柔くヒトを侵すアタカイ胎内。

下らない。斯様な言葉の羅列には一分の意味も有りはしない。嗚呼、下衆だ。

「ただの、溶鉱炉に過ぎん……」

人を溶かす。人を喰う。殺す道具に言葉が要るのか？

此処へ現れ出でてから執拗に煩擾に器官は、気配を嗅ぎ続けていた。学校施設だろうこの地には広範囲に亘って結界が張られている。それも並の魔術師が扱えるレベルを超えた強力で危険なモノが。見上げた空、踏みしめた大地、周囲の木々、林の間から窺える校舎、全てが赤く、此処が紛れも無く異界へ変じたのだと主張していた。では己はどうする？ 決まっている、決まりきっている。破壊するだけだ。ただ、しかし

「……何故」

愚かにも、俺はまた同じ疑問を繰り返す。

脳裏を一瞬過ぎるのは、長い長い髪を揺らす奇妙な衣裳の女だった。

冷たい鎖が冷たい廊下をのたうち、その度苦悶の声が耳を打つ。手

に引き戻した鉄針の先にはこの赤い世界の中に在ってなお紅い血が。眼前で苦しげに息を吐く少年を、己はただ静かに観察する。

力の差、とさえ言えない。人間と英霊の能力には絶望的な隔たりがある。それを前にしても、少年の瞳から戦意が失われることは無かった。

「はあっ！はあ！はあはっあ、ぐっ……！！」

「はははは！！どうしたんだ衛宮あ！随分顔色が悪そうじゃないか？」

背後からは哄笑と共に、酷く悪意に満ちた言葉が放たれてくる。身体の到る所から血を流し、今正に死に直面している少年を見て、もう一人の少年は愉しくて堪らないようだ。

「っ、慎二！今すぐ結界を解け！このままじゃ学校の皆がっ！」

「はっ、お前も執拗いやつだな。そんなことで一々大声出すなよ」

「何をつ……！！」

笑みを口元に貼り付けて、慎二はゆっくりとした足取りで隣に立った。右手に持った偽臣の書を掲げ、もう片方の手でこちらの顎を掴む。

「ただ生きてるだけの平凡な人間達じゃ英霊に喰われちゃうなんて体験、一生出来ないんだぜ？よかったじゃないか？そんな貴重な経験を今正に積めてんだからさ！」

「そんな、そんなことを本気で言ってるのか！！・・・」

俄かに少年、衛宮士郎は血を迸らせて立ち上がった。瞳には確かな怒りと先程以上の頑なな意志が宿っている。そしてその瞳で以て、少年は慎二を射抜いた。隣で微かにたじろぐ気配がした。

「・・・うざいなあ衛宮。ホントに目障りだよお前。もういいや、殺せライダー」

酷く不快げに顔を歪め、慎二はそのままぐいと自身の顎を引き寄せ、殊更低い声で囁いた。

「この前みたいになったら、どうなるか分かってるよな？」

「ぐっ・・・！」

途端に全身の神経という神経に電流が流れた。事実身体は電荷を帯びて、青白い閃光が瞬く度、鋭く鈍く鮮烈で重い、所謂激痛が身体を蝕む。

数日前から事あるごと慎二は令呪の罰を己に課した。プライドを傷

付けられ、一時とは言えその象徴たる偽臣の書まで奪われたのだ。怒りの矛先は勿論真つ先に『彼』へと注がれたが、見つけ出すことは遂に叶わず、程無く、比較的自然にそれは己へ向けられる事となった。当時の自身の言動を思い返してみれば、確かに怒りを買って当然かとも思えたが。

「ほら！さっさと行けよ！」

「っ……っ……」

駄目押しとばかりに一際鋭利な痛みを走らせ、鎖を掴んで一步前へ出た。件の衛宮士郎の方は困惑した様子でこちらを見つめるばかり。

——微かに脳裏を掠める黒——

一息で距離を詰め、腹部を膝で蹴り上げた。

「があっ！？」

間髪入れず二発、三発と何の工夫も無く蹴り付けて、その都度短剣を突き刺していく。矢庭に床は血で染まり、ただただ少年の叫びが堅牢な廊下を反響していった。

しかし、執拗に繰り返されるこちらの攻撃は一向に致命打を与えられない。身体が異常に頑強なようだ。また一発、蹴りが顎を捉えた。少年は背中からもんどり打って転がっていく。

「ぎっ！？」

「あはははは！！凄いな衛宮！まるっきりボールみたいじゃないか！」

「ふっぐ！は、このっ！……」

必死に立ち上がろうともがく少年は、決して諦めという色を見せない。サーヴァントも連れず、対抗出来得る魔術も持たない今、自身に勝てる見込みは万に一つも有りはしないというのに。
だくだくと血が溢れ出す腕を床に付き、紅く変色した足を引き摺って無様に少年は立ち上がろうと足掻く。

「……せめて、一思いに殺してあげましょう。苦しめぬように……」

「っ！お前は！——」

短剣を握り直した。少年の言葉は、耳に入れるべきではない。何故かそう思う。

そして、口を付いて出たこの言い訳染みた物言いが、一体誰に對してのものなのかも考えるべきではないのだ。己はサーヴァントであり、今この時己の主は間桐慎二であり、己はただそれに従うだけ。自身の思惑も意志も願ひも、全ては殺すべき心に他ならない。そう、今は、今だけは、ただ『主』の為に。

「・・・・・・・・」

狙うのは心臓。一突きで終わる。終わらせる。一気に駆けた。

——でも、少しだけ、ほんの少しだけ、思う。

驚愕した瞳が自身を映す。もうこの間合いでは避けられない。鋭利な切先は寸分変わらず少年の胸へ。

——サーヴァントは主人を選べない。当たり前原則。疑問を抱くことこそ傲慢なのだろう。ただ、それでも

（貴方なら、サクラを救えたでしょうか・・・・・・・・？）

遅すぎた疑問は無意味。飛び散る紅い滴。掌に伝わる肉を破る生々しい感触。

私は、衛宮士郎を殺した。

「否」

「っ!？」

己を現実へと引き戻したのはそんな唯一言。短剣が突き刺したのは、黒い掌だった。

およそ肌とは呼べぬ黒い皮膚を突き破り、刃が貫通した掌に自身の手は短剣ごと掴まれている。そして黒い手は、己のすぐ眼下から伸びていることに気が付いた。

黒い手首を下り、黒い前腕を越えて、上腕の出所、根元に在ったのは黒猫の細い背中。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「貴方は・・・・・・・・」

黒い石膏像を思わせる無機質な腕は、猫の背中を突き破り、それを猫はまるで羽のように纏っている。

そして、静かな金色の眼差しは、己を射抜いていた。

力任せに短剣ごと女を押し返した。身に合わぬ腕力は女のそう重くも無い身体を軽々と突き飛ばし、当然のように女は後方へ身を翻した。

すぐに反撃に移る事も無く、女は己の間合いの外へ出るとこちらを見据えたまま静止した。

「お、お前、この前の！」

「元気そう……でもないな」

背後の少年は全身から大量に血を流し、節々にもまた打撲が見受けられる。間違いなく重症の部類に入るだろう。それなのに、少年はこちらを嬉しそうに見下ろした。

「っ、また、助けられた。ありがとな」

「……礼など、否、未だ礼を拝領できるようなことはしていない」

「あ……ああ」

一瞬呆けた少年は瞬時にこちらの意を理解した様子。未だ幼さを残す容貌には不釣り合いなほど鋭い目を前方へと向けた。視線の先、先程からまんじりともせず注視しあう形で女は短剣を構えている。

「ひいつ……あ、ああ、お前つ……」

女の傍らで本を手にした少年がわなわなと震え出す。こちらを目に留めた瞬間から、違いようも無い憎悪と恐怖心が向けられるのを感じる。

「……はっ、ははは！て、手間が省けたぞ！向こうから馬鹿面提げて来やがった！畜生が！！ライダー！」

「……」

少年の叫びと共に女はその場から弾けた。リノリウムの床を音も無く駆け抜け、文字通りの一瞬で己が目の前へ。

頭上で短剣が紅く光る。

背中から生やした左腕に握るジャツカルの銃身で短剣を弾いた。

「っ！」

「うあっ!？」

背後で少年が仰け反った。近過ぎる。廊下独特の直線道は遮蔽物に乏しく、本来ならば銃器が有利。しかし、この口径ではもし少年に掠りでもすれば即死は必至。しかし――

その後も短剣は振るわれ、続け様に鞭の如く鎖が宙を舞った。新たに背中から這い出した右手のカスールカスタムで応戦を試みるも、途端に銃へと鎖が絡み付く。左上から振り下ろされた短剣をジャツカルで受け、右手のカスールカスタムに絡む鎖が硬く突っ張る。我利我利と金属同士が擦れ合う耳障りな音を聞きながら、俺は女の無色な顔を見上げた。

「守りながらの戦いにその武器は不向きでしょうね」

「距離さえ取れば、問題ない」

「いいえ」

「っ!？」

突如、女は弾ける様に有らん限り両腕を左右へ広げた。当然ジャツカルとカスールを握る我が腕もまた。眼前で黒い鞭が撓る。しな

「がっ!？」

「猫!!」

しなやかな女の足甲は自身の小さな胸部を打ち抜いた。

衝撃と痛みはほぼ同時。己が矮躯はいとも容易く廊下を吹き飛んだ。当然とばかりに女の追隨が迫り来る。負傷した少年を置き去りに、身を低くして駆ける様は猫のようだ。

迷い無く女に銃口を向けた。引き金に指を掛けた。

それでも、女の疾走は止まらない。

「!?!」

女は銃など眼中に無いが如く短剣を振り被る。瞬時に短剣を受けた銃身が劈いた。

「くっ」

「……優しいですね。貴方は」

「？」

女に銃を向けるような畜生をして、その言動は理解できなかった。こちらの疑問の色を感じたらしく、女は極々薄い笑みを浮かべた。

「だって、貴方は一度として、それで私を狙ったことがない」

追撃、追撃、追撃。女の猛攻は止まらない。短剣を、或いはその驚異的身体能力を駆使した蹴りを拳を絶え間なく自身に浴びせて来る。馬鹿の一つ覚えに避けて往なし受けてまた避ける。この矮小な体が相手ならばむしろ不利なのは対する女の方。

にも拘らず、壁を床を縦横無尽に小賢しく動き回る自身に、女は付いてくる。ああ、これぞ正に驚異的。

「相手の軸を僅かに避けて撃つのは、おそらくその威力を見せ付けて動きを制限したいから」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・当たらなければ、いえ、当てなければどれ程の武器も意味はありませんよ」

床を蹴り付け跳ぶ。正に振り下ろされた斬撃を越えて窓の嵌め込まれた壁に着地、そのまま壁を四足で駆けた。向かうはいかにも大事そうに本を抱える少年。狙うは本。こちらの視線を受けると、少年は身を引き攣らせて凝固した。

「二度はありません」

女が鉄杭を投擲し、背後から迫る。振り向く事無く銃を振るい杭を弾き飛ばす。そして

「っ!？」

鎖が首に絡みつく。ひやりと冷たい鉄の質感。肉を締め上げる冷酷な痛み。

有体に言えば、俺は後ろへ釣り上げられた。

壁を疾走していた自身は、背後からの強烈な引力によってリノリウムへと叩き付けられる。

鉄杭は二本。初撃は陽動。絡め取るのが本意だったか。

「猫! くっそ、体が!」

「はははは! . . . いいぞライダー! そうだ、もっとだ! 鎖で絞め殺しちゃえ! . . .」

立ち直してなお鎖は首に食い込んでいる。女は油断無く長々と伸びた鎖の柄を掴み、こちらの動きを逐一見張っている。下手な動きを見せれば今以上に絡め取られるのは間違いない。

「待ってる、今!」

「無理するな」

最早血溜りと化している床に足を踏ん張り、ガクガクと震えながら

少年はこちらへ近寄ろうとしていた。失血の量と骨へのダメージを鑑みても動くことさえ困難なはず……無茶な。

「はっ！なんだ、そうだ、そうだよ。この前のは何かの間違いだったんだ。ただの猫一匹がサーヴァントに、この僕に勝てるわけ無いんだ……くくつ無様だなあ衛宮。まるで畜生が二匹になったみたいだ！くはははは！！」

「ぐう！はあ、はっ！はあ」

少年の哄笑。少年の苦悶の声。相対する二つの音は自身の焦りを反映している。

否、それだけではない。

苦しみ、悶え、^{うな}魔されて、今なお多くの者がこの紅い世界で死に掛けているのだ。肉が溶け、ただの栄養に消化されようとしている人々。己がどうして死に瀕しているかも理解できず、惨い苦痛の中で恐怖しながらに終わりを迎えようとしている者達。

俺は女の顔をもう一度見上げた。表情と言えるものは全く無い、能面のような顔だ。形の良い唇も細い顎も女が並外れた美しい容貌を持っていることを示している。だのに女の無表情は感情だけでなくそんな在り方さえ縛り付けているようだ。

バイザーに隠された瞳を、無性に見たいと思った。

「終わりです。吸血鬼の貴方を殺すのは容易ではない。少し、苦しいかもしれませんが……
……ごめんなさい……」

「・・・・・・・・」

一瞬、ひどく淡い表情が女の貌に生まれた。瞬きする間に消え去ってしまふほど微かな、弱々しくも儚い色。

だが違う。

その瞬間、俺は空中を食んだ。

「っ!？」

「あ？」

「え」

三者三様の声ならぬ声。

己の首から女の手元まで長々と伸びていた鎖は、余すところ無く細切れになった。矢庭に鎖だった鉄片は紅く煌めきながらばらばらと廊下に散乱していく。

「っ！シンジ！」

「え？」

遅い。

女はこちらの思惑に気付いたか己が主人へと猛烈な速度で駆ける。
しかし、女の進路は敢無く阻まれた。

「!?!これはっ……!」

壁、床、窓、天井、支柱、水道管、あらゆる箇所へと絡み付く鋼系の群。触れれば身を切る程に細く鋭利な紛う事無き凶器の糸共。その様相は宛ら蜘蛛の巣だ。
女は自身の眼前に作られた糸の壁によってその場に立ち往生していた。

「獣が、暗器を操るのですかつ……」

女の声は半ば呆れを含んでいた。
一瞥だけして、そのまま背後へと振り返る。

「ひ、ひいつ!?!」

「……」

本を胸に固く抱いて、こちらの視線から逃げるように少年は背を向けて今正に走り出そうとしていた。
手繰り招き、投げて掛ける。微細な輝きを放つ糸はうねり、波打ち、さながら蛇の如く少年へと喰らい付いた。胴回りを縛り付け、両足

を一息で拘束したため少年はもんどり打ってその場に倒れこむ。
その拍子に小さな本は少年の手を離れ、すべらかな廊下へ投げ出された。

「あが！！なんつなんだよこれ！！動けなっ！痛っ！？痛い痛い痛い！！！！うあ体が、切れてっ！？」

鋼系によって簀巻きと化している少年には目もくれず俺は本へと駆け寄った。以前に一度だけ目にした。あまつさえ手にとってさえいたちっぽけな魔道書。

前足を本に乗せる。同時に屹度^{きつと}、俺は女を見つめ、静かに、はつきりと声を発した。

「命じる。結界を解け、ライダー！」

紅い世界の消滅と黒猫の焦りの声を聞いたのはほぼ同時だった。何かに急ぎ立てられているかのような焦燥と怒りの混ざり合った、猫とは思えないほど感情的な表情。言うまでもなく声を掛けたのは、自身の在り方が理由というわけではない。単純に、そんな顔を見ていたら協力したいと思ったのだ。

案の定というか、予想通りというか、こちらの協力の申し出を猫は渋った。それでも、多少執こいのを承知で引き下がらずにいと、猫は、本当に苦悩しながら頷いてくれた。頻りに時間を気にしている様子だったので、折れるよりなかったのだろう。

しかし、猫の要求は、己の予想し得ないものだった。

「……この学校に間桐という姓の女生徒がいるはずだ」

「え……」

「その娘を、守って欲しい……」

何故、浮かんだ疑問が脳内を満たし、思考と言う機能を著しく阻害していく。

だが、正面から向き合った黒猫の視線は、唯一色、懊悩で満たされているのだとどうしてか理解出来てしまう。

その時にはもう、了承の言葉が口を吐いていた。感謝、歓喜、自責、自己嫌悪。一気に見え隠れする猫の心情。

「…………俺は衛宮士郎。お前は」

「……………レーフェンだ」

「そつか。今度会ったら何か礼をさせてくれ」

そう言うと、猫の瞳は一層複雑に揺らめいた。
これ以上ない程の皮肉と侮蔑と憎悪が、唯一点、内側へと差し向けられる。

「なんつ……………」

「ありがとう」

「へっ、いや、俺の方こそ！」

逆だ。何故こちらが礼を言われているのだろう。

しかしそんな心中の問いは意味を成さぬまま、来た時同様唐突に、猫は己の目の前から消え去っていた。

自身と簀巻き状態の慎二の二人を残し、廊下には静寂が降りた。知らず、事の終わりに安堵が浮かび、溜息が漏れる。

「……………はっ!？」

二人を残し、だと。

「ライダーは!？」

振り返った先には、冷たい廊下がただ続いていた。

自身の決意など塵程の価値もないのだと、何時になったら気付けるのだろうか。

少年は、瞳に戸惑いを湛えながら、こちらの理不尽極まりない要求を呑んだ。意味も理由も目的も知らされず、それでも迷わないその有様には、己が皆無とする『正義』が見え隠れしているように思えてならない。・・・そしてこれも、下らない妄想なのだろう。焦燥は決して消えず、憤怒は激して燃え盛り、自己への憎悪は永遠に。

違和感

何故。どうしてオレは、こんなにもオレを■したいのだろうか。

第11話 変化が劣化か（後書き）

こうして後書きに謝罪の言葉を書かせていただくのは果して何回目なのやら……情けなくもあり、申し訳も立たず、いやホントすみません！

そして今回のお話

半端です……起承転結から結抜いて、転と起入れ替えたようなこの据わりの悪さ……精進させていただきます。

そろそろ主人公の自虐の根幹を……とは思ってはいるんですが。

少しでも面白がっていただければ幸いです。

季節の変わり目ではありますが、皆さんお体にお気を付け下さい。

それでは！

第12話 咎無くて（前書き）

更新速度が渾です。

本当にすみません！本当に。

今回ちょっと半端です……きちんとまとめるコラ渾野郎ですねはい。

第12話 咎無く

横薙ぎに一閃、軽く腕を振るう。撓たわんだ煌めきが大気を寸断する。返す刀に腕を振るう。一度目は五分割、二度目には二十五分割。最早ただの鉄屑スクラップと化したソレらに視線を寄越す必要は無いだろう。次を探して視界を広めた。

薄闇の中に発光する黄色の目玉共。低く唸るモーター音がコンクリート製の床や天井、其処彼処に這い回る配管、申し訳程度に足元を流れる排水へと微かに反響する。

声は無い。この場で言葉を発する者は居ない。ただ、腕の中で震える少女の余りに弱々しい息遣いは、己が耳朵を打って止まないのだから。

「……後少しだけ、辛抱出来るか？」

「……………」

やはり声を聞くことはなかった。それでも、小さく頷いた拍子に少女の金系の髪が胸の辺りで揺れるのを感じた。

次いで外套を握る少女の小さな手に力が籠められる。思いも寄らず、震えるまま懸命に握り締められたその手は、強い力だった。決して落としてしまわぬよう再度少女の矮軀を左腕で抱え直す。

眼前の鉄塊へ向けて右腕を掲げ、親指から一本ずつ指を折っていく。右側から順に、夥しい数のケーブルをうねらせ接近してきたガジェットドローン？型の群が横に二閃、縦に四閃、そのカプセル型の寸胴なますを膾斬りに、バラバラと飛沫を上げて地下水道を転がって行った。

一時に約八体前後のガジェットを切り刻んでいく極細の鋼糸は、のた打つ蛇のように坑道内部を踊り、幾重にも分かれて不可視の斬撃となる。

最後のガジェットがただの鉄塊になり、地下道はようやく静かになった。

「終わり、ですか」

「ああ」

ゆらりと背後から現れ出でるは紛う事なき麗人だ。

足元まで伸びた薄紫色の美しい髪、細い胴肢体を覆うだけの黒の衣裳、伶俐な容貌はバイザーによって隠され生憎と全貌は望めない。しかし、並外れた美しさを持つことだけは誰の眼にも明らかだろう。相変わらず、怒りや憎悪といった感情を浮かべてはくれないが――

「・・・・・・・・あの機械人形達はその娘を？」

「恐らくは。しかし・・・・・・・・聞き及ぶ限り、アレらが狙うのはレリックと呼ばれるエネルギー体のはず」

右手に持った鉄製の黒い箱を示す。電子ロックを施されているだろうその箱は、その上さらに鎖で厳重に封を掛けてある。中身は言わずもがな、第一級指定ロストログア、彼の機動六課が回収対象としている危険物。

鎖は長く二筋に伸び、一方には封があつたと思しき痕跡が。もう一方は少女の細い腕に巻き付いている。腕には鎖が深く食い込み、所々で肉が抉れ、出血の痕も診られる。早々に治癒した。鎖も引き干切った。

「ただの孤児には見えません・・・・・・・・この世界では奴隷制が生きているのですか？・・・・・・・・」

「いや。文明の発達は『現代』の比ではなかった。それが裏社会で罷り通ったとしても、少なくともこんな市街地では在り得ない・・・・・・・・或いは・・・・・・・・」

一瞬で胸中を渦巻くどす黒い感情を今は捨て置く。
少女を、纏っている服、否、服とさえ呼べない襤褸布の上から投影した毛布で包む。外に出てしまえば別だが、地下道の空気はひどく冷たい。漂う湿気は肌に触れた端から体温を奪っていく。この子の衰弱した身体では風邪はおるか感染症さえも引き起こしかねない。

「一旦ここを出る。この娘を病院へ」

「……ええ」

そう言つて踵を返そうとした自身の背後で咳かれた麗人の、ライダーの声音はどこか躊躇いを孕んでいた。
しかし、何故、などと言う疑問は一片たりとも頭を過ぎることはない。彼女の懊悩の理由は間違えようも無く己にあるのだから。

「……契約は必ず果たす。この行動にも意味はある。どうか、今は信じて欲しい」

「え……」

迷いなど無い。一度交わした言葉を違えるなどあつてはならない。
事、現状、彼女に対してだけは特に。

「貴女^{マスター}の主を、必ず助けよう。生命を使い潰してでも」

それだけ言い置くと、猫は——黒い男は背を向けて歩き出していた。

後ろから見た男の背中には正面から望む時以上に黒く暗く、灯も疎らな地下という薄闇の中にぽっかりと穴を穿ったよう。虚の穴、底無しの闇黒、黄泉の深淵を体現したかのような衣裳。サーヴァント、それも人々から呪われた反英雄たる己をしても、その黒さは異常だった。

何処までも濃い闇色の外套は胴体から腰の辺りまでがびたりと締まり、腰から下はひらりと裾が足元まではためいている。

袖口から覗く手は黒い手袋で覆われ、時折翻った裾から覗く足も黒いズボンとブーツで確りと包まれている。

そして己よりも頭一つ分程高い位置に在る頭部は深くフードで隠され、その奥を窺い知ることとは叶わない。

凡そ自身が見知った黒猫の姿はそこには無い。この地に来て、現状を把握した彼は即座に猫の姿を棄て去ったのだ。

死後、英霊として『座』に送られた者は、ある時は世界の手駒として抑止力を揮い、ある時は何某かの意思を受けて召喚に応じる。どちらにせよ、自身のあたり知らない都合であたり知らない場所へと跳ばされるなど、不本意ながら茶飯事と言えるのだ。否応を吟味するなどという思考さえも、時間外世界を浮遊する己の本体には無いのだから。

故に、今回の出来事も自身にとって別段異常という程のものではなかった。気が付いたその時、己は『異世界』に立っていたと、ただその事実を認識しただけ。

そう、だから、気懸りと呼べるものはたったの一つ。己のマスターの安否。

ただ、それだけのはずだった。

『「偽臣の書」。恐らく、俺がこれを所持していたのが原因だろう。……事の終わりに手放しておれば善かったものをっ！……完全なこちらの手落ち、返すべき言葉さえ無い……』

額が地に擦れる程頭を垂れる黒猫に返すべき言葉は見付けられなかった。

『世界の跳躍には法則性がある。しばし時間を要するが……いや、必ず御身を元の世界へ帰す。必ずだ』

瞳の色を窺えないまま、声音ばかりが力を増す。憎悪、嫌悪、侮蔑、憤怒、罪悪の感情は押し留まることなく、その全てで以て誰でもな

い猫自身を呪う。誰でもない猫自身がそう望むかのように。

『間桐 桜は何に代えようと救おう……いや、「助ける」のだ』

最後の言葉はこちらに投げ掛けられたものではなかった。ただただ強固な自戒、揺るがぬ不動の決意、鋭利過ぎる断罪の矛先を全て己が胸に押し込めた、そんな声を猫が絞り出している。

（何故……？）

それこそが、最も異常なのだ。

蟠^{わだかま}る疑念を拭えないまま、事態は早々に移り行く。

まず初めに、自分達が降り立った地下下水道で、年の頃十にも満たない幼い女の子を発見した。襪襦布^{わだかま}を体に纏わり付け、鎖で縛られた奇妙な箱を引き摺りながらふらふらと坑道を歩く少女。

場違いにも程がある出会いだったが、男の行動は迅速だった。少女が傷を負っていると見るや即座に近寄ると、少女が有無を言う暇も無く呪文を唱え、一瞬にして傷を癒した。

時間が巻き戻る様とはあのようなものなのだろうと、妙な感慨さえ浮かぶ驚異的な手際。自身が知るとんな魔術とも似付かないそれを

男は惜しげも無く少女へ施して行つた。

そして程無く傷が癒えると、途端に少女は怯え切つた。

さもあらん、とも思つてしまふ。

突然目の前に黒服の男とこんなデカ女・・・・・・・・・・大柄な女が現れれば、怖がつて然るべきだろう。美しいオッドアイに涙を湛え、尻餅を突いて必死に後ずさる様は同情を禁じえない。

そんな少女に男は、ひどく慎重に、ゆっくりと近寄つた。まるで、男こそが少女を恐れているかのように。

『怖がるな、と言う方が無理な話だろう・・・・・・・・。信じろ、などと妄言を吐く心算もない・・・・・・・・』

少女の前に跪き手を差しのべるその様は、己が主君に誓いを立てる騎士にも、絶対の服従を拝受する奴隷にも見えた。

相反する心象はそのままに、男はただ少女に懇願する。

『俺にお前を助けさせてくれ・・・・・・・・』

必死さと言う点では、男のそれも少女に負けていなかったようだ。

一分か、それとも五分か、或いはそれ以上を経て。怖ず怖ずと躊躇いがちに、行きつ戻りつを繰り返し、一呼吸分の決意がその瞳に窺えて、ようやく少女はその小さな手を男の大きな手に委ねた。

そして男は殊更繊細に少女の手を優しく握り返すのだ。

その直後だ。機械人形が大挙して襲い掛かってきたのは。そして結果は見るも無惨。

こちらが臨戦しようと杭を構えた頃には——男が数回腕を振るい、鋼糸が闇の中を舞い踊った末——決着はすでに着いていた。

『ガジェット反応20機、消失しました・・・』

「きっかり十秒！素晴らしい！」

まるで子供のように嬉々とした男の声が広大な研究室を反響した。大寫しとなっている正面モニター上の女は、今にも吐き出しそうな大きな溜息をなんとか堪え、コンソールを一心に叩く己が主を見やる。

「ふふふ！やはり魔力反応は一片たりとも計測されていない。前回観測できたのは並外れた刀剣類に対する技術と謎の稀少技能^{レアスキル}だった

が、今回はどうだい？鋼糸を即席の裁断機にしてみましたよ。いくらただの鉄屑デコイとは言えあんな酷い壊され方は初めてだ！はははは！」

『・・・・・・・・ドクター』

今度こそウーノははつきりとモニターに向かって歎息を吐いた。それは本来、主たる人物に対して有るまじき態度ではあるのだが、当の主人は尚もくつくつと笑いを堪えている始末。

そもそもこの男が『主従関係』などという瑣末事をただの一欠けらでも思考の範疇、脳の片隅にさえ入れているとは到底思えない。

案の定、男はそんな言動に頓着も悪びれもせず、何時ものように口を歪める。

「ふふふつ、ああ勿論、作戦に変更は無いよ。『彼』と『器』はトーレに任せよう」

『・・・・・・・・了解しました。作戦内容の変更を』

「ああ！そうそう」

早々にウーノが手元で出力装置を切り替えようとした矢先、まるで今まさに思い出したという体でドクターと呼ばれた男は再度ウーノへと振り返った。男の端正な容貌に極上の微笑が浮かぶ。

「一応ディエチには一帯の『掃除』をお願いしておこう。ささやかな保険だが、無いよりはずっといい。クアットロにも引き続き頑張

ってもらつとしようか」

『了解』

己が非検体を余すところ無く観察し尽くす科学者。お気に入りの玩具を食い入る様に見詰める子供。

その真摯な瞳は、内包した危うい二面性をありありと映し出し、そして――

「……興味が尽きないね。ふふつ、そうか。『黒豹^{かれ}』は『彼』だったわけだ。くつくく、ふふふふ」

『ドクター……?』

男はじつくりと、過去を見詰めていた。

高く、もつと高く。

群がる鈍色の敵機達を眼下に、高町なのは一等空尉は空を目指して速度を上げる。

頬を叩く風は強さを増して、体を抜ける冷氣はより鋭く突き刺さってくる。ただそれでも、生身で被るだろうそれに比べればほんの微々たるもの。身が引き締まり頭の中をより澄明クリアに出来る高高度空中戦はむしろ彼女にとって好ましいものだ。それだけに、耐衝、耐熱、耐寒、耐魔力、etc...それを可能とするバリアジャケットの恩恵には感謝しなければならぬだろう。

目に痛いほど白い雲を突っ切り後方を一瞥する。尾翼も胴体も欠いた翼だけで構成される全翼航空機ガジェットドローン？型は、まるで磁石にでも吸い寄せられるようにその数を増やしながらこちらを追尾してくる。勿論都合だった。

急速上昇から一転、なのはは中空で体を反転させそのままガジェット達を見下ろした。右手には愛杖レイジングハートを握り、魔方阵展開の後、刹那の間も無く桃色の魔力砲弾スライアを構築。

「っ！」

短い呼吸と共に杖を群隊へ振り下ろす。その瞬間、砲弾は八方へ弾け飛んだ。

それぞれが砲弾と呼ぶに相応しい速力と威力、そして凶悪に変則的軌道を描いて獣の顎あぎとの如く鉄の皮膚を食い破って行く。一気呵成に攻め入ってきた半数のガジェットはその一瞬で火花を吐き散らし鉄屑へと成り果てた。

しかし、その間隙を縫うように更なるガジェットが数多押し寄せる。二門の砲口がなのはを捕らえ、人を焼き焦がす熱量が集中、加圧されていく。

「フェイトちゃん！」

「うん！」

黒衣の親友はそれを待ち構えていた。

金系の髪をなびかせて、なのはの後方から躍り出たフェイト・T・ハラオウンが杖と成したバルディッシュ・アサルトを振るう。

空間に展開するのは計六基。回転、発散、構築を経て輝くミッドチルダ式魔方阵達から黄金の奔流が溢れ出す。それは空に曲線軌道を描きながら、回避行動へ移るガジェット達を容赦なく自動追尾して、手当たり次第にやはりその半数を破壊していった。

「……………少し厄介だね」

「……………うん」

なのはとフェイトの光弾をともに受けて爆煙と閃光を撒き散らしながらバラバラに四散するガジェットの瓦礫の中、その敵機と同等かそれ以上の数が魔力弾を透過してしまうのだ。

言わずもがな、これらは幻影である。それも実際に接敵しているなのは・フェイト両名の肉眼はおるか、管理局が保有する最新鋭探査機器さえも欺瞞するという凶悪さを持つ。

背中を預け合い、二人は未だ周囲を飛び交う大量のガジェット？型を見渡した。

「あからさまに私達を釘付けにしたいみたい。やっぱり本命は・・・」

「うん。フォワードの皆が向かった地下、だよな」

敵側の動きは二つ。

一つは現在彼女達の目の前に広がるガジェットドローン？型の大群。それらは市街地から遠く離れた海上上空に突如として出現したのだ。市街および海岸近隣に位置する部隊への要請は行っているものの、敵勢力展開規模とそれに対する戦力、そして何より作戦行動の速力を見込んで今現在のはなとはとフェイトが出張っている。

そしてもう一つは市街の真っ只中、地下下水道へ侵攻するガジェットドローン反応。

地上戦が主立つだろうこれらには休日を返上して機動六課両分隊のフォワードメンバーが当たっていた。海上から市街への支援は距離の問題からあまり現実的ではない。

『つまりはそういうことや。案の定、地下からレリックの反応があった』

突如、思索を廻らせる二人の間にウィンドウが割って入った。純白の額縁を思わせる高解像度ホログラムに映っていたのは時空管理局二等陸佐にして古代遺物管理部機動六課部隊長

「はやてちゃん！」

「はやて！？」

八神はやては微かに笑みを浮かべた後、即座に表情を引き締めた。

『戦闘中に失礼。ちょっと報告しときたいことが出来たんや』

「報告？」

「あ、待つて。今」

と言うや、なのはは杖を一振り。その瞬間なのはとファイトを桃色の防壁が包み込む。

藪蚊のように飛び回るガジェットの機体の下部には六連式ミサイルランチャーが取り付けられており、ここぞとばかりに連続で掃射されて行く。しかしそれらをなのはが展開した防壁は小揺るぎとせず受け止め、弾け跳ぶ灼熱の爆炎でさえ物ともしない。

なのははそれに一つ頷いて、再度ウィンドウのはやてに向き合った。

「よし、いいよ」

『そいじゃ、改めて報告。地下でごちゃごちゃしとったガジェット反応が残らず全部、消えた』

「「！」「」

微かに息を呑んだ二人が抱く感情は驚愕ではなかった。それでもなのはとフェイトははやての言葉で即座に一つの結論へと思い当たる。フェイトの顔には多少苦笑いが混じる。

「デジャヴって言うのかな・・・？」

『ま、過去二回も同じことに行き会ったさかい、今更何をかいわんやなんやけども』

「レーフェン君、帰ってきたんだね！」

なのはの声には知らず喜びの色が浮かんた。それはフェイトにせよはやてにせよ、大なり小なり抱いたものでもある。

出現は唐突に、消え去るのはもつと唐突に。ある時はスバルを救い、ある時は六課の助けとなり、ある時にはティアナを救ってそのまま行方を暗ませたレーフェンと言う名の黒猫。

そして、神出鬼没でありながら、その影響力は決して小さなものではない。

「よかった。これでスバルもティアナも安心できる」

「にやははは、そうだね。やっと・・・やっとスバル達が元気になれるよ」

『いや、風船が萎んだって言うんか、魂が抜けた言うんか。まさかそれにティアナまで加わるて誰が想像できるっちゅうねん』

ウィンドウ越しのはやてを含めて、三人は盛大な溜息を漏らした。今更蒸し返す話題でもないことは三人とも重々理解しているが、やはり思い出されるのはあのティアナの誤射事件^{ミスショット}。慣れないカートリッジ使用によってスバルを危険に晒し、その行動に起因する彼女の過去、それに籠められた想いを垣間見た。決して容易ではない心の問題は、解決まで難航を来すと思われた。しかしそれを、危急を救った張本人たる黒猫レーフェンは、一体ティアナに何を教授したか、一晩で解決せしめたという（ティアナ談）。そして正しくその晩に黒猫は消えたのだった。

『まあ、ティアナにとってどれだけ大事なことをレーフェンが言うたんか知らんけど、ずばりその日に消えてもうたらそら気にすんな言うのが無理な話やし……』

「気にしてたねえティアナ……」

「気にしてたよおスバル……」

狙い済ましたようなタイミングでミサイルの爆炎が防壁を包む。暫し遠い所を三人は見ていた。必要も無いのにビルを拳のみで破壊し尽くす少女とか何故かミスショットの精度が並外れていて全ての友軍機のみを撃ち抜く少女とか、それを怖れて震える幼年児達とか。

『……ふん縛つとした方がよかつたんやろか?』

「あははは………」

乾いた笑いが嫌でも漏れる。ほんの束の間ここが戦場であることをなのはもフェイトも忘れてしまった。

こほんと一つ咳払いをしてはやては二人を見詰める。

『ともかく今はレリックの回収を優先させる。運がええのか、幸いレリックの一つはレーフェンが持つとるみたいやから、

フワードメンバーにはもう一つの方へ行ってもらう』

「再会はお預け、だね」

『スバル辺りがぶー垂れへんか心配やわ』

「じゃあなのはと私は引き続いてこいつらの相手を」

『うん。頼むで、二人とも』

「了解!」

もしも闇が人の形を成したならそれは目の前のようなモノのことを指すのだろう。分厚いコンクリートによって光から隔てられ、生暖かい薄闇と冷たい湿気が延々と充満した地下であるにも拘らず、その存在は一層際立っている。

しかし、どうしてか気味が悪いとは思わなかった。暗闇の化身のような相手に対して、奇妙なことに恐怖も嫌悪も湧き上がっては来ない。

それはそういうものではない。それはそんな強い感情を表してやいない。もっと脆弱で、もっと陰惨で、もっと浅はかで、もっと絶望的な。

第二級捕獲対象、仮称『^{バンサー}黒豹』をその視界に収めたトーレの^{ファーストインプレ}ッション
象は、哀れみだった。

「…………ふんっ」

今度こそトーレは不快気に短く呼気を放つ。

意味が解らない、という考えは一先ず彼女の中ではどうでも良い。

言葉を交わすどころか初めて相対した者に何故このような感情が沸き起こるのかなどトーレには解らない。解る必要が無い。重要なのは目の前の敵が自身の相手に相応しいかどうかの唯一点。

主たる人物からの奇妙な命令は『黒猫を捕まえろ』の唯一言。そんなことの為に自身を駆り出すのかと甚だ憤懣遣るかたなかったものだが、その『黒猫』とやらの戦闘記録を見て180度機嫌が反転したのも記憶に新しい。

近接戦闘の手並みは軽く見積もってもA A A相当は確實。それも映像を見る限り明らかに手を抜いていると見て取れるのだから。保有する技能や肉体強化に重きを置くトーレが興味を惹かれるのも自明と言えた。

だからこそ今回の作戦において、直接戦闘に持ち込めるこの機会をトーレは半ば待ちわびていたのだ。相手が畜生の類であろうと戦えるのなら彼女にとっては全て些事である。

今眼前に立つ漆黒の男が、果して本当にその相手であるのか、トーレは酷く逡巡に駆られているのだった。

「・・・・・・・・貴様が黒猫か？」

「・・・・・・・・」

言葉が返ってくることを期待した訳ではない。そして、その沈黙が何よりも雄弁にその存在を物語っているのだから、最早問答する心算などトーレからは消え失せている。

喜悦に歪む口元を自覚しながら、紫紺の刃を振り翳す。両手首に一对、両大腿に一对、両足首に一对それぞれ生成したエネルギー翼『

インパルスブレード』八枚。闇に尾を引く紫光の線は輝きを増して、トーレと対する黒の男を照らし出した。

「ライダー……」

こちらの呟きからライダーは即座に意図を察してくれたようだ。無言のまま腕に抱えた少女をライダーへと引き渡す。

「あ……」

「？」

ライダーが小さく声を漏らした。何事かと見れば、それは少女の小

さな手。己の外套を握り締め、怯えた瞳はそのままにこちらを見上げている。

この娘がずっと蝕まれていた病。その最たるものは違えようも無く「孤独」であつたろうに。有無を言う暇も無く拾われ、今その責を全うすべき男は少女の必死に伸ばされた手から離れようとしている。愚かも此処に極まれる。この娘の怖れを己はほんの僅かでさえ拭えないのだ。

少女の手を取る。改めて、小さな手だと思った。

「すぐに戻ろう。約束だ」

口から垂れる言葉は安く、行動の伴わぬ無思慮な決断は悪果を撒き散らす。事実少女の潤んだ瞳が己の軽々しい言葉で安堵を灯すことなど有り得ない。

「・・・・・・・・・・いなく、ならない・・・・・・・・・・？」

柔く小さな手はこちらの黒い指を握り返した。如何にも弱々しくか細い声は足を杭で縫い止められるが如く耳を打つ。

「・・・・・・・・・・・・・ああ」

視線の交差は数秒と待たず終わる。

ただ、少女の瞳に射竦められた自身にはその刹那が数十分、数時間

という重みとなって強く強く圧しかかってくるのだ。

水路の向こうに女が一人佇んでいる。人の気配にがいを追いつながら出口と
思いき通路を歩いていた矢先に、唐突に姿を現したのだ。ただ、恐
らくは転移や瞬間移動の類では無いのだろうと、漠とした予測が頭
を過ぎったが。

女は、両手首と両足に魔力を集中させ、紫紺に輝く羽を顕現させた。
大きさは正しく鳥の翼程度だが、驚嘆すべきはその密度。触れれば
熱したナイフがバターを溶かし切るように、己もさぞ綺麗に斬られ
るだろう。

流水を踏み付けながら歩み寄る。女はまるでこちらが近寄るのを待
っていたかのように言葉を紡いだ。

「……貴様が黒猫か？」

「………」

驚きはしなかった。しかし不可解。

自身の存在を知る者は、この世界において機動六課に所属する極少
数のみ。あとは精々……。

こちらの思考など待ってくれる道理も無く、女は矢庭に口の端を吊
り上げた。酷く愉しげに。そして次の瞬間には紫紺の刃が目の前で
翻っている。

「疾っ！」

「！」

踏み込みは深く、突きは恐ろしく速い。対敵が近接戦闘型であるとコンマ一秒と要らず理解した。

半身になって突きをやり過ぎ、水に手を付き身は低く、女自身の突進力を利用して乱暴に足を蹴り難いだ。断じて技などとは呼べない粗末な足払い。

案の定、女はこちらの蹴りをただ軽く跳躍して避け——坑道の天井まで飛び上がった。五メートル弱の高さにある天井に女は着地すると、その身が重力に引かれる前に天井を蹴り付けていた。落下速度も合わさって高速で飛来する女の長い足が上がる。強烈な踵落とし。

「おらあー!!」

「っ！」

激しい水飛沫を上げて地面を抉る、苛烈な一撃を後退して避けた。地面に埋もれた足を引き抜くと、女は軽く足を振る。続いて手首、首を捻り、最後に拳を強く握りこむ。

準備運動だと、そう言いたい様だ。

不意に女の鋭い眼光が己に向けられていることに気が付いた。

「……死にたくなければさっさと得物を出せ。糞詰まん手加減の心算ならこのまま蹴り殺す。手心を加えてやる心算も無い」

「・・・・・・・・・・」

奇妙な話ではある。

突如現れた女はその明確な敵意、戦意だけが雄弁で、言葉も表情も希薄に過ぎた。大した熟慮があつた訳でもなく、なし崩し的に戦闘へと移っている現状は、鼻眞目に見て異常の一言。そしてここに来て、女は公正を謳う。

「・・・・・・・・」

自身の胸倉から白布に巻かれた柄が生えた。

本来なら刀身から伸びた鉄を固定する目釘が在るべき部分には剥き出しの茎のみ。なかこ今はそれが柄としての役割を果たしている。目釘が無いのならハバキも、当然鍔も在りはしない。

斬魄刀斬月の始解とは、正しく刃で出来ている。

突き出た柄を握り締め、躊躇い無く一気に胸から引きずり出した。

己の身の丈ほどもあるう大刀が現れ出でる様は傍から見れば何よりも異様だ。

白布の鞘に収めたまま大刀を振りかぶる。

「!?!」

「!」

直上から振り下ろされたその一撃を女は紫紺の刃を交差して受け止

めた。しかし、その一振りに籠められた重みは女の苦悶に歪む表情を見れば明らかだ。

「くっそが!!」

一合の気合と共に女は斬月を弾く。こちらの喉笛を切り裂かんと紫の斬撃を帯びた蹴りが迫りくる。瞬時に刃を返し、刀の鎬を盾のように掲げた。間も無く刀に女の強烈な蹴りが突き刺さる。然れど、斬月の硬度は一切の揺るぎを見せない。

女の表情がまた驚愕に歪む。

「何!？」

「ふっ!」

女ごと刀を薙ぎ払う。無論相手が体勢を立て直す隙は与えん。宙を舞う女に追い縋り、下段から斬り上げる。

しかし、斬月は空を斬った。

「っ!」

在ろう事か、女は空中を蹴って自身の体の軌道を逸らした。否、在り得るのだ。空中戦闘がほぼ当たり前と化しているこの『世

界』ならば。

己の左後方に飛び出した形で、女は振り子のように腕を振るい、その先に装備した刃で斬り掛かって来る。

斬月程に長大な大刀を一度でも全力で振るってしまえば、その常軌を逸した重量によって生み出される莫大な運動エネルギーを一瞬にして完全に殺し切るなど不可能である。無理に引き戻そうと足掻いてもその動きは鈍重極まり、下手を打てば筋繊維の断裂を招く。それは刀剣を用いる場合ならどのような時であれ憑いて回る普通の真動かぬ理。

故に――

「なっ!?!」

「・・・・・・」

――化物たる己には、無縁の真理だった。

振り切った運動エネルギーにはそれを更に上回る運動エネルギーを叩き込むまで。

文字通り返す刀。

斬月の一撃の下、女を叩き飛ばした。

「があああつ!?!」

盛大な水飛沫を上げながら、女は川面を跳ぶ水切り石のように吹き

飛んでいく。

守勢から一気に攻勢へと雪崩れ込んだ状況の女にとって、「先の先を取られるやもしれない」などという可能性を悠長に吟味する間など無かつたろう。

にも拘らず、女は先の瞬間防御の姿勢を取っていた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・」

女の静かな呼吸が坑道に響く。防がれたとはいえダメージの蓄積は確かに見て取れる。致命打とは程遠いとしても。

不意に、無表情を貫いていた女の顔に久方ぶりの色が垣間見えた。

眉間に皺を寄せ視線が鋭さを増し、曰く不気味である、と。

無理も無い。先程のこちらの動きは正常な人間の動きではなかった。対する女がどの程度こちらの事情を把握しているのかは知る由もないが、少なくとも、己の在り様の^{おそまつ}忤しさは重々

「・・・・・・・・くっ」

「？」

「くっ・・・・・・・・くく・・・・・・・・・・はははははは！！面白い！面白いぞ！ああ、ドクターが騒ぐのも少しは解るな」

女は上機嫌に笑っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「くつくく、陸戦ならA A AどころかSランクオーバーは固い。
トリプルエー
それも魔力に頼らず、ただその身の強さだけでよくも・・・・」

くつくつとくぐもった笑声を上げ続ける女にどう対応したものか諾々と悩み始めた頃、女は屹度こちらを正面から見据えた。改めて見れば、いやに真直ぐな瞳である。成程、公正であらんとしたあの態度は無意識のものだったか。つまりは、この女の在り方を表す。

しかしだからこそ、このように通り魔的な戦闘はその真直ぐさに不釣合いなのだが。

「気に入った。黒猫」

「・・・・・・・・」

「お前は私が捕まえてやる」

女はそのまま口元を歪め、構えを解いた。一見すればそれは無防備極まりない棒立ちであり、女の意図する処を読み取ることは出来ない。

その時、女の体を「力」が駆け抜けた。

「!？」

「気付いていただろう？さっき、お前の一撃を私が防いでいたのを」

女から風が吹いている。水面は激しく揺れ動き、紫紺の刃の輝きは刻々と増すばかり。

「こういうことだ……IS発動、ライドインパルス！」

大気を貫き、自身の眼前から女は消えた。

主を救いたいと願う従者。
孤独に苦しみ傷付いた少女。
紛う事なく強い女。

蒙昧な畜生は数奇に出会う。己とは比べえぬ人物達に。

真を持たない畜生が、こんな者らを前にして、一体何が出来ようか。
心は空。体は殻。

終わりは未だ訪れてくれない。

第12話 咎無くて（後書き）

どうも本当にお久しぶりです足洗です。

いえ、半端ですな……。

言い訳させていただきますと、実は文章自体はこの二倍くらい書いてあります。もしかするとそれ以上になります。

つまりは書きすぎました。

……作者の無能はどうぞ罵っていただければ幸いです。

ちよっくら文章をまとめる力を神龍にお願いしてきますね。

相変わらず阿呆なこと言ってますが、読んでいただき本当にありがとうございました！

第13話 死せず

廃棄都市区画とは大規模な災害やテロ、実験事故等の様々な理由で過度の損壊を負ったまま破棄、放置された区画のことを指す。そして臨海第8空港近隣の此処もまた四年前の大火災による空港の閉鎖に伴い破棄された都市の一つ。長い間再開発の目途は一向に立たず、人の痕跡を生々しく残した廃墟が荒涼と地平線の彼方まで続いている。

晴天の青空の下、到る所に亀裂が走った崩落寸前の高架自動車道から見渡す景色は、奇妙な物悲しさをティアナの胸中へと齎^{もたら}した。置き去りにされた家屋。主張を辞めた街灯。乱立しながら沈黙に陥ったビルの群。そしてそれらは何処かしら必ず埃や亀裂や欠損や崩壊が憑いて回る。単なる物体に過ぎないそんな物達に対して、ティアナはどうしようもなく寂寥を禁じえなかった。

「ティアナさん」

「ん、キャロ？」

取り留めも無い思考に埋没していたティアナを引き戻したのはキャロだった。小柄な体全体が心配と不安を体現しているかのように、キャロは大きな瞳でティアナを見上げている。

「あの、大丈夫ですか？もし体調が優れないとかならずに……」

・？」

「あ、だ、大丈夫大丈夫！ごめんね。ちょっと呆けてただけだから」

多少大袈裟な程にその瞳は憂慮の色を浮かべていた。慌てて手を振りながらティアナは暫し苦笑う。

「あの」

「え？」

「あの、良かったですね。レーフェンさんのこと」

「・・・・・・・・」

心からの笑顔を見せるキャロへ、咄嗟にティアナは言葉を返すことが出来なかった。

時間を共にしたのは高々一日程度。言葉を交わしたのは下手をすれば一時間と無い。

例えば、そんな僅かな期間で人が他者に対して何かしらの特別な感情を抱くなどということが在り得るのだろうか——在り得たのだから始末に終えないのだが。

勿論、断じて決して、これはティアナ自身と同年代の若者達が喜びそうなふわふわと浮ついた種類の感情ではない。絶対に。

（だ、大体アイツは人間でさえないんだしそんな対象にそもそも見られない訳で……。いやだったら変身魔法使ったらそう変わっちゃうのかな？……。いやいやいやつ。そ、そうよ。別にそんな風に思う必要ないんじゃない。アイツはだから……。・ 恩人、そう恩人。いや恩猫？どっちでもいいわ。兎に角いろんな意味で助けられて、と、特別視しちゃってるけど結局は教導してくれるのはさんとか隊長達とそんなに変わらない存在。アイツはそういう存在。うんそれでOK。あたしのことす、すす、好きだとか言っただけとそれは普段の素行とか人間性とかのことだから。それ以外の

意味は無い。全然 nothing。私は落ち着いてる。冷静だし沈着だし何の問題も――）

「ティアナ！」

「はいっ!？」

意識の外から飛び込んできた叱責の声にティアナはその場に飛び上がった。ヴィータは怒気と呆れを平等に湛えた表情のまま大きな溜息を吐く。

「作戦中、しかも今は容疑者捕縛してんだぞ？ 氣い抜くな！」

「す、すみませんヴィータ副隊長！」

ヴィータの一喝でその場のフォワードメンバー全員が竦み上がる。見た目は紅いドレスタイプのバリアジャケットが良く似合う愛らし

い少女なのだが、現実には、ヴィータは身の丈を遥かに超す巨大なハンマーを駆る機動六課でも歴戦の精鋭なのだ。

「それでねそれでね、最初に見たときはこの猫さんすつごく頼り甲斐があつて大人なんだなゝつて思つてただけど実際に会つてみるとホントにそうなんだ。でね、毛がすつごく柔かくて尻尾もふにふになんだよ。抱っこすると温かくてお日様の匂いがしてね。あ、ギン姉も一回抱っこさせてもらいなよ。それからゝ・・・そうそう、この前は一緒に寝ようつて頼んだら嫌がらずについててくれて。声はね、思つてより低くて優しい声だった。なんだかお父さんみたいですつごく安心できるんだ。もし人間だったら多分ね、背はすつごく高いと思う。うゝん、お父さんよりもかな？なんとなくなんだけど。え

へへへ・・・ああ、それと・・・・・・・・・・・・・・・・」

（スバル、スバル後ろっ！）

「スうバぁルううっ？」

現在、機動六課フォワード陣とスターズ2ヴィータ副隊長およびリインフォース？^{ツヴァイ}空曹長、そして別件捜査で偶然近隣に居合わせた陸士108部隊所属ギンガ・ナカジマ捜査官らは廃棄都市区画の高架自動車道上にいる。

ガジェットおよびレリック反応を検知した彼女らはそれらを追つて地下下水道へ出動。廃棄都市区画深部の地下放水路にてレリックケ

ースを確保した。

しかし、突如として謎の勢力からの攻撃を受けて交戦。

その際レリックケースを強奪され、つい先刻までその追走劇を演じていたのだ。

ヴィータの目の前にはリインが施したバインドに拘束された少女が立っている。淡い紫の髪を腰まで伸ばし、黒い衣裳に身を包んだその少女は終始無表情を貫き、ヴィータの問いに返答を寄越す素振りも見せない。その傍らでは、人型デバイスであるリインとほぼ同程度に小さな赤髪の少女が不機嫌全開といった体でむすりとして地面に胡座を掻いている。

「……………はあ、つたく。今日はティアナもスバルも集中力が無え。またあん時みてえなミスやらかしたかねえだろうが……………」

「うつ……………すみません」

「あ、あははは……………」

ガクリと肩を落とすはティアナ。ニヤケ顔を誤魔化そうと更に奇妙な笑みを浮かべるスバル。

どうにかレリックの確保には成功したが、スバルにせよティアナにせよ今回は明らかにキレが無かった。

「スバル、それにティアナも。今が作戦行動中だってこと、忘れないで」

「は、はい！」

「ご、ごめんなさいギン姉……」

ティアナもスバルも自身の体たらくは厭と言う程に理解していた。突然に行方を暗ませ、数週間何の音沙汰も見せなかった。にも拘らず、それが今自分達のすぐ近くまで来ているのだと知らされたのがほんの数分前の事。黒猫という朗報にどうやら二人の少女は浮き足立っているようだ。

真摯な眼差しでギンガは暫しの間スバルとティアナを見詰め、次の瞬間には柔らかな笑みを見せた。

「再会を喜ぶのも家出猫を叱るのも仕事の後。……まあ、私だって早く会ってみたいし、ね？」

「ちなみにさっきの通信ではやてちゃんが『今度は縛ってでも家出を阻止しなさい』って言ってたです」

悪戯っぽく片目を瞑るギンガからは、先程までの大人びた雰囲気から一転して少女らしい幼さが窺える。浮遊しながら何やら善からぬことを囁くリインはひどく楽しげだった。

そんな様を見てしまえば、スバルとティアナの引き締められた表情は途端に緩む。視界の端でヴィータが溜息を吐くがやはり止められそうにない。

「……………まだ終わったわけじゃねえ。周辺警戒忘れんな。エリオ！しっかりケース持ってる！」

「あ、はい！」

「……………あんのバカ猫……………」

弛緩した空気に瞑目しながらヴィータは小さく毒づく。そして同時に、現状を作り出した一応の原因を思い、また眉間に皺を寄せるのだった。

高所特有の冷涼な風は纏ったロープの裾を薙ぎ、次いでデイエチの頬を撫ぜた。片手で彼女自身の身の丈を軽く超える長大な砲^{カノン}を抱え、損壊著しいビルの屋上の縁からすっかり死んでしまった都市の全貌

を見下ろす。

近く雨でも降ったのか、晴天の下で大気は澄み渡り、視界はこれ以上無い程良好だ。何かを狙撃するなら今日は正に打って付けの日と言えるのに。

「・・・・・・・・暇」

「ふふふ、文句言っちゃダメ。ディエチちゃんは大切な保険なんだから」

間延びした声はディエチの背後から。最早機能しない錆付いた貯水タンクの上には足をぶらぶらと投げ出してクアットロが座っている。

「それに、活躍出来なくても今正にちゃーんと役割は果たせてるのよ？」

「ふうん・・・・・・・・」

クアットロの言葉にもディエチは釈然としない。表情と呼べるものが顔に浮かんでいなくとも、ディエチの無表情はしっかり「つまらない」と主張している。

その時、クアットロの眼前にウィンドウが展開した。画面に映し出されたのはウーノである。

「あら？ウーノ姉様」

『クアットロ。ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ』

「あゝらら、それはそれは……」

ほんの一瞬クアットロの顔が笑みで歪んだ。嗜虐に富んだ少女らしからぬ歪な微笑。

勿論傍目にそれを気付かせるクアットロではない。眼鏡の奥を除いて、彼女の笑顔は朗らかそのものだ。

『フロローをお願いできるかしら』

「ええええ、解りました。じゃあ早速……」

『それからもう一つ。ディエチは砲撃の準備をしておいて』

少女二人はキョトンとしてウィンドウを見た。

「？ 地下にある聖王の器と黒豹わいぢやんのことですか？」

『ええ、初期の作戦通りに』

「でもそれって、トーレ姉が向かったんでしょ？なら……」

肉体強化レベルは勿論の事、戦闘技術戦闘経験共にトーレは彼女達

ナンバーズの中でも最優良に部類される存在だった。その彼女が直々に作戦行動へ出ている今、結果は火を見るより明らかであるはず。

『つい三十分前にトーレのIS発動を確認したわ』

「珍しいですね。トーレ姉様がこういう作戦に能力を使うなんてよっぽど確実に仕留めたかったとか？」

『……今も、依然として稼働中よ。途切れることなく』

この打ち合いが一体何合目になるのか、トーレには皆目分からなくなっていた。

「はあっ！ー！」

紫紺の刃を振り翳し、今度こそ眼前に立つ男を袈裟懸けに斬り倒さんと水上を駆け抜ける。飛び跳ねた水飛沫が宙を舞いまた地面へと落下するよりも、発した呼気が空気を震わせ対敵の耳を打つよりも、今のトーレは遥かに疾い。

追いつける者など居ない音速という名の舞台をトーレは我が物としているのだ。

「っ！」

「・・・・・・・・」

刃から伝わるのは硬い金属と破れ得ぬ白布の歯痒い感触。上段から振り下ろした必殺だったはずの一撃は完璧に止められた。構わず、大刀の壁を男ごと跳び越えその背後に着水。死角から間髪入れず斬り上げる。こんな芸当コンマ1秒とさえ要らず行える。

——そしてまた防がれる。

こちらの一刃は男の左手に握られた大刀で上から抑え付けられていた。

（何時刀を持ち替えた？何時こちらに振り向いた？それ以前に……）

「・・・・・・・・」

トーレが持つ先天固有技能^{インヒューレントスキル}、通称ISの名は高速機動『ライドインパルス』。

その名の通り、トーレの頑強な素体構築が可能にする超高加速機能を指す。発動と同時に人間の視認速度を凌駕し、最新鋭探查機器の追尾を以てしても映像はおろか反応を捉える事さえ不可能となる。音速域を駆けるトーレにとって視界内の全ては静止しているに等しい。戦場の只中において動きを止めることはイコール死に直結する暴拳の一つであるが、トーレは、云わばこの暴拳へ対敵を強制的に引き摺り込めるのだ。

凶悪とさえ言える圧倒的速力を前に、どれ程の技もどれ程の力もどれ程の魔力もその意味を取り去られる。

それなのに――

（何故反応できる！？）

内心の絶叫全てをその眼光に叩き籠めて、トーレは幾百回にも上って巨大な刀の壁を睨ね付けた。

地を蹴り、何の工夫も無く正面から突っ込む。当然ながら大刀に阻まれることなど自明。刃を弾かれた反動をそのまま跳躍へ移行した。着地点は先刻同様坑道の天井。全力で蹴り付けた。足がコンクリートを発破のように抉り、破壊的突貫力を生む。

「っらあああああ！！！！」

握り込んだ拳にはあまり意味が無い。右手首に生えた高密度魔力ブレードをこそ対敵にぶち当てなければならぬのだから。それでも激情は全身の血をマグマのように沸き立たせる。

男の直上から隕石の飛来が如くトーレの紫紺の斬撃が振り下ろされた。そしてまた、何時構えたのかさえ分からない男の大刀の表面をくぐもった金属音を響かせて刃は空しく滑り降りる。

逸れた拳は流水の上から着弾し地面を吹き飛ばしていた。先にトーレの蹴りで爆砕した天井の瓦礫と派手に打ち上がった水飛沫は、眼前をスローモーションか静止画のように浮遊、落下、四散している。降り掛かるそれら全てを無視してトーレは男を斬る。

（そうだ。刀の軌道が見えないのは奴が私よりも『早く』動いているからだ。こちらが行動を取った瞬間にはすでに刀を所定の場^{ばた}に持つていかれて防がれる。並外れた動体視力かそもその五官性能の差か。動きを読まれるとはこういうことか……だが、それなら、奴よりも『速く』動けばいいだけ！）

小賢しく策を弄するなどという思考はトーレには無い。

初動で出遅れようと速度で勝る今、出し惜しみは何の意味も効力も結果も生まない。

つまりは手数を増やすまで。

「だああああああつ！！！！」

トーレのその有様こそ正しく猫だった。

壁も天井も今のトーレにはただの足場に過ぎない。ある時は壁を踏み台に、ある時は天井を緩衝材クッションに、両手足に具わった鋭利な爪を絶えず絶えず絶えず対する黒い敵へ敵へとぶつけて斬り裂き突き刺さんと撃つ。

まるでボールが跳ね回るように、或いは幾百の弾幕全てが坑道内部で兆弾と化しているかのように、トーレは跳ねては斬り付け続けた。紛う事なき最大戦速。先刻までの幾百合など手遊びと嘲笑う？斬撃の弾幕？だ。

もし仮に凡百の魔導士がこの一種狂った斬撃の雨の下に居たならどうなる？それは死とさえ呼べぬ死が魔導士には待ち受けているのだから。細切れ、挽き切れ、摺り潰れ、哀れな肉塊はただの物に成り下がる。

では、それが、凡百の魔導士ではない『ナニか』だったなら。

「・・・・・・・・」

「はあ！、はあ、はあつ、はあ！——」

半ば静止していた時は動き出し、四散した瓦礫も跳ね上がった水飛沫もばしやばしやと音を立てて舞い落ちる水路でトーレは激しく息を荒らげていた。

最大出力でのISの連続使用は彼女の体力を根こそぎ奪い去っていた。額からは汗が滲み、鼓動が激しく胸を連打する。

甚大な疲労感が全身に重く押し掛かる現状ではただ立っていることさえ耐え難い苦痛に変わる。

それだけの全力をトーレは発揮した。決して生半な力ではない。時空管理局に所属する数多の魔導士の中で、彼女に匹敵出来る者が一体何人存在するか。そんな、本来なら気の遠くなるほどに途方も無い次元に在る力だった。

断言出来る。ナンバーズNO。？トーレは間違いなく強い。

「はあっ！はっ！はあはあ！はっ、化物めっ！」

「・・・・・・・・」

それは依然として沈黙を保ちながら其処に在り続けている。
闇よりも黒い外套を揺らし、白布に巻かれた大刀を握って佇む様は
つい数十分前となんら変わらない。変わらないのだ。

トーレが放った計一千合を超えるおびただ夥しい斬撃は、ただの一度も男の
刀を越えることはなかった。

如何にも苦々しく吐き捨てられた女の言葉は、正しく至当。
この身は真正正銘の化物である。

呪文ともコマンドとも取れる一合の気合と共に女の速力は爆発的に増大した。身体能力とそれに見合うだけの体術を兼ね備えた彼女はただそれだけでも十分な脅威——強者であつたろう。そこへ度を越えた超加速が加われれば正に無敵。目算でほぼ音速に届く程の驚異的速力は何人の追隨も許さない力だ……

「……………本当に、持ち腐れた力だ……………!」

蟲唾が背中を駆け抜けた。

誰よりも何よりもどんなモノよりも、俺は自分^{コレ}が、悍しくて仕方ない。

全て視えた。

女の刃、足運び、反応速度、行動慣性、魔力増減、能力行使、筋伸縮、血流、心音、息遣い、心さえ——

「……………っ!」

「？」

この能力が一体何なのか、何を起源とし、何時何処で根差し、そして誰のモノであるのかも理解していない。そんな愚かに過ぎる在り様。

断じてこれは俺のような者が持つべきではないのだ。断じて。

力には大いなる責が、意志が、強さが有らねばならない。そしてそれに真に相応しいのはスバルやティアナ、高町、ハラウン、八神らであり、吸血鬼の少女でもあり、衛宮士郎でもあり、目の前にいる女でさえもある。少なくとも俺ではない数多の誰か達でなければならぬ。それだけは何を置いても理解^{わか}る。

己のような畜生が彼の女を圧倒しているという現状の事実は耐え難いほどに忌々しい。

「・・・・お前・・・・・・？」

「おあつ・・・・・・！！！！！」

沈黙化していた自己憎悪がまたその鎌首を擡^{もた}げようとしている。残月をぎりぎり握り締めても体中を廻る厭なモノは消えない。刻々と時間は過ぎ行く。残酷なほどそこには躊躇も容赦も無い。懊悩の中にいる女一人助けられぬ今、何を置いても可及的速やかに全能力を発揮しなければならぬにも拘らずだ。

ライダー自身がその心情を吐露する必要は感じなかった。主を救いたいという言葉一つですでに十分過ぎた。助けるのだ。彼の少女を

必ず。

そも、こうして悠長に生き永らえる権利を己が有していると、本気で思っているのか？

分らない解らない

判らない。何故何故何故何故何故、俺はこんなにもこんなにもこんなにも、汚い穢らわしい忌々しい憎らしい胸糞が悪くて吐きそうだ。いくら唾棄してもまだ足りない。いくら罵り、詰り、悪口の下に切り刻んでもまだまだ足りない。嫌悪か憤怒か侮蔑か諸々を以て殺意を掲げても意味が無い。嫌い悪し様に斬り捨てようと、怒りのままに叩き壊そうと、蔑み貶め処断せしめようと、それでは意味が無いのだ。形ばかりの感情、心だけを殺してもそれは到底充足には、否、終息には程遠い。自己満足。気持ちの悪いソレが残るのだ。それは自慰行為に等しい吐き気を催す不快の極みであり醜悪の塊を腹の底へどろどろと流し込むも同じだ。そんなものが存在して善いのか？

否否否否否否否

では、どうするのか。

決まっている。決まりきっている。【すしかない。】してしまわねばならない。でなければ、そうでなければ、俺は、オレは、赦されない？ 違う赦しなど求めていない。与えられるとさえ思わない。他者がオレを赦しても俺がオレを赦さない。だから【すしかないではないか。誰でもない俺自身がオレを。誰も裁きをくれないのだから。誰にも安息を求めてはならないのだから。贖罪は解放への道。罰は赦罪への兆し。自らを【す。其処には一切の安樂があつてはならない。なんとしても己を苦しめ痛めつけ責め上げる。そう、一切合財のユルシを排した究極の断罪こそが、自らを【すことが出来る。だから、女神はそれと

紫紺の光が舞い踊った。薄闇の中をいとも軽やかに、ひどく美しい軌跡を描いて。

「何処を見ている!!」

「！」

腹の底から響き渡る怒声に体は発条^{バネ}を仕込んだ玩具のように跳ねた。神経伝達は末端神経から脊髓、脳へ達することなく、或いは脊髓さえも介さず、運動器官そのものが瞬きの内に刀を振るわせる。

金切り声を劈^{つんざ}く刃と刃。眼前で異様な程に鋭く、それ以上に真直ぐな眼光が己を射抜いている。まるで心臓に矢を打ち込まれたようだ。

「臨戦の最中に余所見とは大層な余裕だな？それとも、私は戦^やり合
うに値しないと暗にほざいているのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

咄嗟に言葉を返すことが出来ない。いや、それ以前に、解らないのだ。

目の前の女は、どうしても晴れやかに笑っているのか。

「ふんっ、面は見えんが腑抜けが透けているぞ。先の剣鬼ぶりは見
掛け倒しかっ！！」

「っ！」

女は鏢迫り合う右腕の魔力刃を弾き、横合いからこちらの脇を薙ぎ
に来た。

後方へ退き回避。すぐさま斬月を晴眼に構える。
しかし女は追って来なかった。そしてくつくつと漏れ聞こえる女の
忍び笑いは、更に己の愚鈍な思考を混乱させる。
窺える感情は唯一色、喜悅。

「ふふつ、ようやく抜刀したな。黒猫！」

「あ……………」

間の抜けた声が漏れた。

晴眼の視線の先、片手で掲げた鈍い銀が在る。

反り返った片刃。刃を支える鉄の峰^{くろがね}。鮮烈に砥がれた切先が闇の中
で光る。

白布はだらりと柄から垂れ下がっている。思わず解いていたらしい。

「つくづく頭にくる。閉所とはいえ、こちらが「能力（IS）」を開
放してなお納刀したままとは……………」

「……………返す言葉も無い。無礼は詫びよう」

「……………やっと口を利いたかと思えば……………」

「……………うむ……………」

その、なんだ。面目次第も無いとは、こういうことなのだろう。阿
呆な思考が頭を過ぎった。

まさか抜刀し忘れていたなどと、決して言えたものではない。

空気の弛緩に幾らか辟易した様子で、対する女は仕切り直しとばかりに手にした刃で一閃、空気を切り裂いた。鋭い風斬り音は耳に痛く、己の愚鈍を露にされるようだった。

「ゴチャゴチャと何を考えているのか知らんが……………」

「？」

「動きに迷いが有り過ぎる。なんなんだその為体は。^{ていたらく}見ていてやたらに苛々するつ。そして、そのやたら

な迷走の渦中に在りながらこちらの攻撃はきつちり防ぎ切りやがつて！」

「……………」

怒気、と言つほどに激しくはない。機嫌を悪くして拗ねる子供にも見える。

迷っている女は言う。

そうなのだろうか。そうなのだろう。

お世辞にも、己が戦闘の何たるかを理解し実践し、挑んでいるはずはないのだから。矜持^{プライド}を持たぬ畜生では決して届かない境地が存在する。其処に往けるのはそれを心得た者だけ。

では己の迷いとは何だ？先刻の数秒間、記憶が『欠落』しているのに関わる事だろうか……………果して、それは答か？

「・・・・・・・・」

違う。小難しい小理屈を弄する愚かな自身にもう一度唾棄しよう。簡単なことだ。何を迷うことがある。最初から自身は目的を定めていたのに。

己の背後。薄暗い坑道の向こう。今もまだ脇道で隠れ待つライダーと少女。ああ、目的などそれだけだった。それ以外無かった。

歪な偽善は悪果を生む。だが、何もしなければ誰かが死ぬ。選択の余地など、初めから無い。

「お相手、願えるだろうか・・・・・・・・」

「？」

唐突なこちらの呟きに怪訝な視線を女は寄越した。それも当然だろう。今の今まで、女の言葉を借りれば腑抜け切った滓——もとい阿呆も同じだった者が突然口を開いたのだ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

言葉は要らなかった。女は即座に応えてくれた。

女の刃は恐ろしい程に魔力密度を上げている。
霊圧を刀身に籠める。鈍い輝きが鋭さを増す。
沈黙は重く重く空間を圧迫し、両者の動きを封じに掛かる。
先に動いて制すか、先に動いた相手を制すか、後に動いた相手を捻じ伏せるか、如何にも陳腐な脳内の計略。
全て無視する。

呼吸は落ち着いていた。この身に呼吸器が存在する訳ではない。つまるところ心が欲するのだろう。

女のそれも酷く静かであった。耳を澄ませば微かにだけ聞き取れる。しかし辛うじて読み取ることには出来ない、繊細な呼吸。

彼我の間に敷かれた距離凡そ五間。束の間の静寂。終わりは近い。

「っ！」

「っ！」

極小の呼気。苛烈な踏み込み。共に同時。
向かい合う敵同士、互いの急速接敵は五間の距離などたちまち無に帰した。

瞬きさえ不可能な超速の只中で、巻き上がった水飛沫を弾き飛ばして女はこちらから見て左側やや上段から斬り下ろして来る。

応じる。左脇から振り抜き斬り上げ、ただ一太刀の全力。

刃と刀身の接触。こちらの一刀は止められ——女の狙いとは正にこの瞬間だった。

左手の刃。それこそが対敵の本願。

右の刃でこちらの一刀を無力化した後、左の一刀の下この身を斬り

裂く。言葉にすればいとも容易く、実を伴えば困難を極めよう。何より始解状態にある斬月の過重にして凶悪な一刀をこの女は右腕の小刀程度しかない刃だけで受け止めた。一点集中した過負荷は尋常を超えているだろうに。

驚嘆が腹を駆け抜ける。賞賛が喉下までせり上がってくる。対敵は違えようも無く強い。危険な^{リスク}など微塵たりとて怖れず、正面から挑みかかってくるその有様は真なる闘争者だ。眩い程に。

——それでも

止められた一刀。しかしてそれは未だ死んではない。

霊圧を上げる。迷いを断つ。心胆から全霊を籠めて己はその一太刀を放ったはずだ。

それは、如何なる矛、如何なる盾、如何なる矛盾を赦さない。唯一つ純然たる事実のみを物語るモノ。

曰く、斬る、と。

超高密度を誇る紫紺の魔力刃に、斬月の刃は喰い込んだ。

そうして後は正に一気呵成。対敵の紫紺に輝く魔力刃を完全に両断した。女は、守りを失ったのだ。

限界まで濃縮された刹那の中の刹那。瞬間の夥しい攻防は決着する。女の左刃は届かない。奇襲の為に敷いた一拍分の誤差は此处へ来て決定的致命となった。

斬月の一刀は女の首を——

唐突に、少女は沈黙を破った。

「逮捕も、いいけど」

拘束されて以後、何一つとして口を利かない少女を前に、どうしていいか解らず待機を余儀なくされていたフォワードメンバーおよびヴィータ達は大層驚いた。

「大事な猫には、もう、」

取り分け、その語られる内容に、愕然と。

「会えない、ね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

誰も声を出せずにいた。ただ一人スバルの無意識に出されたであろう呆然とした呟き以外は。

そして、次の瞬間響き渡った通信によって厭でもその意味を理解させられるのだ。

『市外地に高エネルギー反応！こ、これは・・・・・・・・砲撃の充填確認
チャージ
！物理破壊型、推定Sランク！？』

数秒か数分か、冷たくせせらぐ流水の音は限界まで研ぎ澄ませた心魂を柔く撫でる。全身に充実していた集中力は徐々に張りを無くし、唯一個体のみ捉えていた自身の眼も周囲を窺うだけの余裕が生まれ

た。

地下道には到る所に穴が穿たれ、亀裂が走り、壁に深々と刻まれた刀傷は罅の爪痕を思わせる。巨大な掘削機で手当たり次第に走り回ったような、酷い有様だ。

対する女も先刻の激昂は鳴りを潜め、ただ静かにこちらを睨むばかり。

女の首筋には抜き身の斬月が静止している。

後ほんの100グラムばかり力を籠めて引き抜いたなら女の首と身体などいとも容易く分断してしまえるだろう。無論、そんな心算など毛頭無い。

刃を下ろし、女から一步距離を置く。血振るいの要領で斬月を一振りして白布の鞘を巻いた。そして引き抜いた時同様、そのまま切先を胸に突き刺し、ぞぶりと自身に斬月を納める。

そうして、自身が発する水と衣擦れの音が鳴り止むと矢庭に地下道は静かになった。

僅かな疑念が女の瞳に宿る。

「……………止めを、刺さんのか」

「ああ」

当然の疑問だろう。だからこそ返す言葉もよくよく簡略なものになった。

己に差し向けられた女の殺意は本物だ。繰り出される斬撃に慈悲は無く、その一つ一つが必殺という意志を体現していた。

そしてその意志に相応しい技量と精神を彼女は持ち合わせている。罷り間違っていれば、今頃黒い屍骸が地下水を汚していた事だろう。

それを思えば、己の行動は酷く無粋なのかも知れない。
しかし――

「其方の目的はあの娘か？」

「・・・・・・・・・・そうだ。そしてお前、黒猫の捕獲もまた任の一つ」

「・・・・・・・・・・そうか」

油断の無い言葉選び。こちらが受け取れる情報も最低限度を保っている。それでも、僅かなりと回答を寄越してくれたのは彼女なりの線引きあつての事だろうか。

だが、これではつきりした。俺は彼の女を害することが出来ない。

女に背を向け、ライダーの待つ通路へ歩き出した。

背中から斬りかかって来ることは万に一つも無いだろう。確信にも似た手前勝手な心象が胸中を過ぎる。

「・・・・・・・・・・ありがとう」

「な」

無責任な謝辞は、果して彼女の中で意味を成し得ただろうか。

その時、

「あ、おい——っ！」

「!？」

突如として、身体を貫くが如く魔力と熱量の発散を知覚した。苛烈にして膨大、凶悪な収束力を以て高まり続ける違いようも無い暴力。その矛先が狙いを定めるのは——考えるまでも無い。

「あの子か……」

そして、迷う暇など尚有り得ない。

無骨な砲身が低く唸りを上げる。内包した熱量は時を追う毎に高まり、同時に巨大な砲口は強烈な光を辺りに発散する。ディエチの足下、罅割れたコンクリートの足場では橙に輝く魔法陣が回転を繰り返す。

脇に抱え上げるように超長距離狙撃砲『イノームスカノン』をディエチは眼下の街並み——その遥か向こうに在る『目標』へと差し向けた。

「…………でもさ、いいの？」

「ドクター曰く、アレが本当に聖王の器なら砲撃くらいじゃ死んだりしないから大丈夫。だそうよ」

ディエチが保有する先天固有技能『ヘヴィバレル』は、精密射撃、弾丸の固定や自身のエネルギー変換、性質付与等の技能全般を指すものである。自身のエネルギーを弾丸として砲に装填し撃ち出すのみならず、状況に応じて多種多様な性質の『弾薬』を使用した砲撃を可能にする。そして威力や弾速に関しては言わずもがな。都市の一区画程度塵も残さず焼き払える。

それ故の問いであったのだが、返ってきたクアットロの答えは酷く辛辣であった。

「……………」

「ん？…………あら、ディエチちゃん、もしかして黒豹の心配までしてるとか？ふふふふ」

「別に……」

クアットロの多分にからかいを含んだ声音にデイエチは務めて素気無く返す。

しかし、如何にも愉しげにクアットロは口元を歪めた。そして

「まあそうよねえ。一応は捕縛対象な訳だし。デイエチちゃんの言い分も全然間違いじゃないんだけど……」

無意識の内にデイエチはクアットロへ視線を向けていた。その言葉に、ほんの少しだけ心を軽くする何かを感じ取ったからなのかもしれない。

「……じゃあ——」

「ドクターがね」

そんな少女の些細な希みを少女は嬉々として断ずるのだった。

「『砲撃で死ぬ程度なら別に要らない』、だって」

「……」

ディエチの顔に色は無い。先刻から変わらぬ無表情が其処にはある。ただその大きな瞳の奥で揺らぐモノをクアットロは心地よく眺めていた。

「さ！お仕事お仕事。ディエチちゃんも、ちやうど準備してね？
一区画中を残らず燃やさないといけないんだから。ああ！遠慮なんて要らないのよ？トーレ姉様ならすぐに動けるでしょうし」

「・・・・・・・・」

「ダイレクトカノンサポート直接火砲支援開始。なぐんてね♪」

「・・・・・・・・カウント、10秒前・・・・・・・・9、8――」

思考は捨てた。唯々諾々と圧しかかるだけの無意味で無価値で無力なそれをせめて今だけ投げ捨てる。

必要なものは手段を講ずる演算だけ。

（彼我との目算距離凡そ二千四百m。魔力質量、収束率、砲身スケール確認。回避行動——否、破壊規模甚大。敵器再装填所要時間不明。保護対象傷害の可能性有。同見解より防壁展開を否認。邀撃または砲撃阻止推奨。局点防衛用超長距離砲撃戦装備『ハルコンネン？』——不適、遮蔽物過多、弾道補正難、現世界での使用は問題大。『偽・螺旋剣』、『赤原獵犬』、有効武装の投影——不可、対敵殺傷の危険性大。結論——斬魄刀解放）

コンマ一秒と要らず、瞬きの間一つ己には赦されず、結論を喚び出す。

自身の胸倉に右腕を突き立てる。黒い波紋を立てながら己の奥深くを抉り、破り、掘り起こし、今この時最も有効な武器しゅだんを掴み執る。黒みを帯びた柄糸が巻き付いた柄。鰐は切羽からそれぞれ蛇の様に

鉄が伸び小さな楕円を描く。そして抜き身の短刀は、酷く鋭利な銀を放つ。

5

四尺を優に超える斬月の長大さに比してその様相は正に脇差。小刀と見紛う程覚束ないこの刀で一体何が出来ようか。

解

言霊を一つ呟き斬れば世界はするりと片付き申す。
溢れ出す霊圧は地下を地上を構わず揺らし、震えは坑道を響き渡り、脇に構えた死突が騒ぐ。

この刀に、一体何が出来ようか——出来ぬことなど何処に在ろうか。

高々二千四百メートルでは、対峙する事と何ら変わらない。眼前で矛を構える敵をしかと視据えて放さない。

限りを知らず高まる霊圧。炸裂前の死の斬撃。ぎりぎりと握りこみ、圧縮凝縮収束収斂。死突は生まれる出ずる瞬間を待った。

4

カウントダウン

死刑宣告という少女の囁き。

己にとって極上で至上で甘美なソレを今は、殺す。

「
かみしにのやり
神殺鎗」
」

ナンバーズNo.？ディエチはとても目が良い。

保有する技能が砲撃、狙撃を目的としている事からも、それは製作段階から在るべくして備えられた能力なのだと言い得る。極単純な遠見視力は勿論、遠近、立体、空間の視覚的把握能力は彼女自身の弛まぬ訓練も後押しし並の人間を容易く凌駕する。

だからこそ、ディエチには『ソレ』が見得たのだ。

視線の向こう。廃墟の間を縫う様にまるで蛇の如く躍り出て、ただそれでも大気を貫き裂きながら進撃するその軌跡は真直ぐだった。人の思考速度など嘲笑うかのように、デイエチが辛うじて認識したのは前述のたった一瞬。気付けば腕の中に在ったはずのイノームスカノンは姿を消し、己の遙か後方、青空の彼方へ弾け飛んでいた。振り返り自慢の眼で己が砲を見る。砲身は深々と穴が貫かれ、内部で猛り狂う熱量が随分と遠くなった此処からでも見て取れる。ぎりぎりまで圧縮され続けたエネルギーに突然砲口以外の出口が与えられたのだ。次の瞬間に起こることは仕手のデイエチでなくとも、事態を把握出来ず啞然とするクアットロでも早々に理解出来たことだろう。

圧倒的光量が空を埋め尽くす。これ以上無い程の強烈な『暴発』だ。上空高く高く舞い上がった砲の爆発は少女らに軽い衝撃波を見舞うだけで甚大な殺傷を齎す^{もたら}ようなことは無い。問題が有るとすれば、管理局側に位置を特定されるくらいのも。それも酷く派手に。

だからだろうか。デイエチは呆然と、奇妙な感慨をその胸に得ていた。

状況は切迫している。何時追手が掛かるとも知れない現状においてそれは間違いなく暴拳である。視線の端でクアットロの顔が見る内に苦虫を噛み潰していくのが解るのだから尚の事だ。無色な表情に変化は無い。ただ、瞳の奥で仄かに揺れる。

「……………私、刀に負けたんだ……………」

常軌を逸した超長距離の刀身。街を横断する鮮やかな銀色。

ディエチの網膜には、不可思議な光景だけが確りと残った。

「あっ」

ライダーの腕から少女はするりと己の腕に移った。相も変わらずその小さな手をして驚くほど強い力で外套を握り締めている。

「・・・・・・・・すまない。酷く待たせた」

「・・・・・・・・」

陳腐な申し開きにどれ程の意味が有ろうかとも思っ。だからと沈黙でその尊大な在り様を見せびらかすことこそ忌々しい。

こんな者の腕の中で安堵してくれる少女に、己は何を求めているのか。

「・・・・・・・・・・？ ライダー？」

「え」

ふと、異様な程気配を断つて、と言うより呆然とした様で立ち尽くすライダーがそこにはいた。

平素の物静かな性質は彼女の美德であり自身にとっても好ましいものであるが、今の有様はそんな愚かな心象からかけ離れている。

魔的な白さを放っていた肌は、この薄闇の中、遂には病的なまでに青白い。血の気が根こそぎ奪われ、力無く佇む姿は揺蕩たゆたう陽炎を思わせる。どちらにせよ綺麗なのだと、脳を掠めたその思考に反吐が出そうだった。

「魔力欠乏？ いや、しかし・・・・・・・・まさか偽臣の書そのものに齟齬そごが！？ 待て、今――」

「い、いいえ！ 令呪は問題なく稼働しています！ 現界に何も支障はありません」

「？・・・・・・・・・・そうか・・・・・・・・」

無様に慌てふためいた自身へ即座に釘を刺された。矢庭に胸中へ安堵を得る。

「・・・・・・・・・・・・・どうして、貴方はそんなにも・・・・・・・・」

ほんの微かな囁きが耳元を掠めた。

無駄に精緻な聴覚はしかし、言葉の全容まで捉える事はなく。物悲しい残響だけが耳に居座り続けるのだ。

問いを返すことは何故か躊躇われた。

不意に人の気配の接近を感覚器が告げる。数にして七つ。ほぼ見知ったそれだ。

ライダーは一瞬だけこちらに視線を寄越すとすぐにその姿を消し去った。霊体化。生物に対してならばほぼ完璧な隠形と言える。今この時、己はその思慮に胡座を掻くことしか出来ない。

スバル、そしてランスターを想う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・？」

陳腐な言葉が喉下まで競り上がる。どれ程に美麗な言葉を尽くしても、結局自身では分不相応。黙して叱咤を拝領出来ればそれ以上のものは無い。

終わり無く回り続ける思考に瞑目する俺に、腕の中で少女は暫し小首を傾げていた。

これから未来を思ったとて、畜生に解る道理など無い。
これより過去を思い返したとて、空の記憶は虚も同じ。
世界も時間も存在も曖昧模糊と定まらず、出会いは未来へ或いは過去へ、そして何処へ向かおうと己に知る術は無いのだ。

展開したウィンドウには通信者であるティアナの他、見慣れたフォードメンバーが映っている。

「――」

画面の奥、地下という暗所において闇よりも色濃く浮き上がった黒の男。

瞳の深みは複雑に色彩を変え、感情の波は大きく揺れ動く。

「なのは？」

「――え」

訝しげにフェイトはなのはの名前を呼んだ。

第13話 死せず（後書き）

お久しぶりです足洗です。

・・・・・・難産が怖い今日この頃。

生みの苦しみなんて言いますが、小説を書かせていただいているとこれは最たるものだなあ、なんて豪そうに思ったりします。

皆さんはどうなんでしょうか・・・・？めっちゃすいすい書かれている方とかがいますよね・・・・？

どうでもいいお話

読んでいただければお解かりかと存じますが作者が好きなのは？番さんです！・・・・・・いやホントどうでもいいですなはい。

兎も角も、読んでいただき本当にありがとうございました！

第14話 身に過ぎた平穩（前書き）

他の愛情というものを比べるとして、一番強いものはなんだろうか、という問いに行き着きました。

友人知人

上司と部下

異性との恋

同性との恋

家族と自分

例えば親子の愛というのは、どの程度のものなのでしょう。

と、阿呆なこと書いとりますが、どうぞお暇潰しの種にでもしてやってください・・・本当に読んでいただきありがとうございます。
今回多分に厨学二年生絶好調です。

第14話 身に過ぎた平穩

闇い黒、闇黒、	↓
暗い黒、暗黒、	↓
昏い黒、昏黒、	↓
濁る黒、濁黒、	↓
穢い黒、穢黒、	↓
憎い黒、憎黒、	↓

五感は死んでいた。

いや、静止している、と言う方が今は正しいのかもしれない。

視る事、聴く事、嗅ぐ事、味わう事、触れる事。生きる為の手段達はその尽くが眠りにつき、同時に、生の実感刻々と自身の手から滑り落ちていく。

感覚とは己の存在の『主張』だ。外界と自身とをその酷く不確かで、不明瞭で、頼りなげなたった五つの情報群によって、繭糸で断崖に橋を架けるように、臍に繋ぐ。

五つあるこの橋を一步でも踏み外してしまえば、外界を、世界を、

主張を一つ失う。そして失う毎に己の存在はごそりと殺ぎ落とされてゆく。

一つ、二つを失う事は、まあ稀にあるだろう。

では、三つ、四つと失ったら？ 視る事しか出来ない、聴く事しか出来ない、嗅ぐ事しか、味わう事しか、触れる事だけが、唯一つだけぼつんと己の掌に載せられていたら？

死に物狂いで残るたつた一つを守り続けるだろうか。ああ、でも、それさえ叶わないのだろう。一つ出来るのではない。四つ全て出来ないのだから……。

ではもし、五つ全てを失ってしまったら？

それこそを『死』と呼ぶのではないだろうか。

己の存在という外皮は頭の頂から爪先、髪の毛の唯一本さえ余すところ無く此処に満ち満ちた『死』に包み込まれている。

暗く闇く昏い黒が存在を飲み込んだまま滞留し混濁しぐちゃぐちゃと掻き回されてまたぐちゃぐちゃと流動する。

コールドールの海を己はただただ浮遊、否、漂い続けていた。何故なら浮かび上がるべき水面など此処に有りはしないのだから。此処は黒で満ちた立方の水槽であり、同時に終りのない無間の闇なのだ。

—— 逃げる事など、赦されていない ならば逃げてはならない

五つの主張を剥ぎ取られた今、自身には何一つ残っていない——
訳は無い。生き物ならばあと一つ、厄介な持ち物があるだろう。

ココロが在る。此処にはココロだけが在る。刻々と移ろい変わり続ける色^{ニロ}が。

一時とて同じ色を保てぬ、ともすれば脆弱、時として堅固。そんなこれ以上無い程不確かで不明瞭で頼りなげなモノ。

主張を失った外皮には塵芥程の意味も無い。だから今、ココロは剥き出しのままだった。剥き出しのまま、黒の中を漂い続けた。

そう、独りぼつんとココロが、——そう認識した。してしまつた。

一つ、前述を改めねばならない。やはりココロは脆い^{よわ}ものだ。

——逃げてはならない 逃げるな 己の最も脆い部分から、
【せ——】

憎い………

外気に晒された弱いココロに

憎い、憎い・・・

己の最も弱い部分ところに

憎い、憎い、憎い・・・

黒い刃そつおを突き刺して

憎い、憎い、憎い、憎い……

決る

憎い、憎い、憎い、憎い……

それを奪ったんだよ

他のならよかった 他のものなら全部なくなってもよかった くれ
てやった

だがそれだけはだめだ
それだけはだめだった

―― 赦してくれ？

赦すと思っているのか？まだ 此处にきてもまだ赦されると 赦し
を請えると

憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い
憎いっ！！！！

なら

泣いて慈悲を請うか？

その生命全てを贖罪の為に焼べるか？

己の罪業に億刑の処罰を約束するか？

もし、もし仮に、そうするのなら、そう誓いを立てるのなら、或い
は――

奪った
だから、
お前は^{オレ}奪い返されるんだよ

——
赦すわけがないだろう？

夢と現実の境界線を酷く覚束ない足取りで歩いていた。
意識は霞が掛かったように濁り、身体感覚は随分と遠くに置いて来てしまっている。

最初に戻ってきたのは視覚。ガラス窓を徐々に徐々に布巾で磨くが如く、バイザー越しの眼球が透過するぼやけた映像に細部が顕れ始めた。

壁に張り付いたカーペットとテーブルと観葉植物。
眼前の大窓にはこれまた重力を無視して水平に伸びるレースカーテン。

視線を動かしてみれば、部屋中の家具や調度、生活器具の尽くが自身から見て右側の壁に固定されている。

「・・・・・・・・」

などと言う奇物、もとい可笑しな部屋がある訳もなく、単に自身が体を横たえているだけだった。

本来、睡眠を全く必要としない英霊をして在り得ないことではあるが、どうやら自分は寝惚けているらしい。

上体を起した拍子に額へ垂れ下がった己の無駄に長い髪を一度手で掬い、未だ朝陽が乏しく薄暗い室内を見渡した。部屋の内装を与えられた知識と照らして表すのなら現代的なホテルの一室、^{モダン}と言ったところ。元々一人部屋として宛がわれたものだったはずだが、もう一人二人増えたとしても大して不自由はしないだろう広さがある。ベッドを運び入れてしまえば

「起きたか」

「あ・・・・・・・・」

ソファの背面、部屋の奥にはベッドが一つ設えてある。ダークブラウンの太く丸みを帯びた支柱は造りの頑強さが見て取れる。その上に取り付けられた厚いクッションは未だ眠る少女——彼はスバルと呼んでいた——の沈み（・・・）具合からして中々に上等なものだろう。

本来の部屋の主たる漆黒の猫はそのベッドの脇で慎ましげに伏せていた。薄暗がりの中でその澄明な金眼は柔く、鋭い光を放って自身を静かに見詰めている。

「おはよう。よく眠れたか？」

「え、あ、はい。おはようございます」

穏やかな声で猫は朝の礼法をこちらに寄越した。

何処までも深い深い慈愛——猫の声にどうしてかそんな幻想を聴いた。まだ寝惚けている。

ふと、肩を柔らかな感触が滑る。毛布だった。

「私は……………」

「あの後、夜に突然実体化した。覚えていないか…………ライダー自身の意思を無視して行われたものであることはすぐに見て取れたので、身体を診断した後そのままソファに運んだ。俺は異常無しと判断したが……………」

沈黙とその視線の意図は容易に知れた。

すぐさま己の内部に向けて意識を集中する。元より問題が有るなどとは思っていない。ただ、こうした方が彼は安堵してくれる。そう思ったのだ。

「…………ええ、何も問題ありません。魔力は円滑に補填されます」

「そうか……………」

案の定、猫は微かな吐息と共に深い安堵を漏らしていた。

己は聖杯戦争に呼び出されたサーヴァントの一騎である。

死後、英霊として世界に魂を拘束された自身は都度の召喚に応える以外に現世へ留まる手段を持たない。そして現界を維持するには膨大な魔力を必要とする。

召喚、契約、と正規の手順を踏んで魔術師^{マスター}を得たならば、ほぼ自動的にサーヴァントとマスターの間には魔術的縁、所謂“パス”が結ばれるのだが、自身は生憎と例外を踏んでいる。現在の己は主との繋がりを一時的に断たれ、パスを利用して魔力を受給出来ない。

だからこそ、シンジは“対外的”手段を講じたのだ。自身の、生前からの特性を利用して。

「・・・・・・・・」

非道な行いだっтарう。正しく化物の所業であっтарう。それでも文字通り生血を啜りながらも、生き長らえて為したい事があった。まあそれは、何の言い訳にも成らないのだが。

「ライダー？」

静かな声音でまた彼は自身を呼ぶ。

そんな彼の口から、まさか「血を飲め」などと聞かされた時は、己

の耳を疑ったし、失望のようなものが胸の内を占めたのも覚えている。全く以て筋違いも甚だしいことだが。

勿論、それは勘違いである。

極々当然のように彼は何の躊躇いもなく自分自身の手首を切り裂いていた。他者の傷を厭う男の当然の帰結であるかのように。

その時、フードの奥に隠れた貌がどのような感情を形作っていたかは知る由も無い。しかし、薄闇の中に浮かんだ金眼はひどく穏やかだったことを思い出す。

深々と裂けた薄桃色の傷口。

次々と溢れ出る鮮やかな紅。

部屋中を満たして鼻腔を擦る濃密な芳香。

そして、舌を、喉を、胸を、腹を、全身を余すところ無く冒し尽くす途方もない熱。

「はっ……あ……ん……」

「？」

視界がまたぐらりと揺れる。余計なことまで思い出してしまったらしい。

嫌に熱っぽい吐息が喉の奥から溢れてくる。背筋を伝うこの震えは決して朝焼けの寒さの所為ではない。

ただほんの少し記憶を撫でただけで自身の肉体は使用者の意思など

まるで無視して卑しく反応を繰り返す。心の臓腑はどくどくと脈打って炎熱した血液を体中に送り出し、服の下で滲んだ汗までもが俄かに熱を帯びていく。同時に、胸元から下腹部にかけて何かがキュンと締め付けられた。

「っあ……ふぁ……ん!……あ」

「……………執拗いことを承知で重ねて問うが………本当に大丈夫なんだな？確かに効率を考えれば俺の血を使うのが最善なのかもしれないが、やはりエーテル等の薬品が簡易な魔力パスを設けることも視野に……………」

何時の間にか、黒猫は音も無く、するりとソファの肘掛へ飛び乗っていた。手を伸ばせば容易く触れられる程の距離に。

自身を見上げる水晶のように澄んだ瞳は、彼のその思慮深い有様をよく表している。

朱の差した頬がまたさらに紅く染まるのを感じる。ほとんど反射的に己は猫から、その誠実さから顔を背けていた。

「い、いいえっ。それ、は……………それは……………」

「……………」

そしてこの口は、猫の気遣いを前にしてなお、欲求には抗えずにいるのだ。こんな自己を嫌悪するのに一呼吸の間も要らなかった。しかし、対する猫はこちらの煮え切らない返答を受けて暫し目を伏

せ、何やら熟慮している様子。

「……了解した。そも、俺が意見する事自体可笑しな話だ。
マスターサーヴァント
主と従者の縁にこの己が立ち入るなど、身の程知らずも忌々しい・
……」

「――」

瞬時にして容易に、途轍もなく好意的勘違いをしてくれているのだと知れた。

自身の不純がホントに嫌になる。

「……しかし、貴方の事は……」

「傷なら癒せば良い。血ならまた作れば良い。どうか、欲しいだけ使ってくれると善い。……勿論、畜生の血が不快だと言うなら……」

「そのようなことはありません」

不意に、その一言だけは随分はつきりと口を付いて出てきた。

この、己に何かを強いらずには居れない黒猫は、時として自分自身の存在をすら何処までも何処までも貶めねば気が済まないところがあるようだ。

即ち、自己嫌悪。否、自己憎悪とさえ呼べる苛烈極まる何か。

自身が彼との邂逅を終えて、その後行動を共にするようになってか

ら数日程度の時間しか経っていない。ただ、それでも、時折見せるその感情は、その激しい憎悪は、どうしようもなく響いてくるのだ。

「……手間を、取らせているな」

「いいえ……」

五日。この世界に留まってから経過した時間。たかだか120時間、悠久の時を過ごしてきた自身には呼吸するにも等しい儚い刻。

されど、そんな僅かな時間だとしても、ただの一時、一刹那、阿頼耶の暇さえも断じて赦さず、己に、自身に、その心魂に絶えず絶えず絶えず自戒を繰り返すとしたなら。

その一秒、一分、一時間の濃密さは筆舌に難く、永遠に続く煉獄にも等しいものなのではないのだろうか。

「――」

「……」

ひどく遠い目を窓の遙か向こう側に投げる猫。しかしその実、瞳には何一つ映っていない。

彼の胸の裡を何か知っているわけでもない。そう、己は彼自身について驚くほど何も知らないのだ。そして彼もまた自分に負けないくらい、己自身について無知だという。

でも、今だけは、彼が何を考え何を視ているのかが手に取るように解る。解ってしまう。

「――」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・サクラ・・・・・・・・・・」

炉から溶銅が溢れ出すように、じわりと焦燥が胸に満ちる。早く速く迅く、救わねば、何としても何をしても何に代えても。その覚悟は疾うの昔に済ませている。その決意は今も堅固に揺らぐことなくこの胸に在る。だからこうして立ち止まっている時間がどれ程に危険なのか。そしてその危険が己のものでは決してないことも嫌と言うほどに理解している。

そこでふと気付く。彼もまた同じことを考えていると。

自身の焦りを篝火と称すなら彼の焦りは獄炎のそれだ。

如何にして救う。如何にせば助けられる。動きたい。動けない。出来ることをしたい。出来ることなどない。

禅問答だ。答えなど出るはずは無いのに。それでも彼は辞めない。

「――」

猫は、サクラを救うことだけをずっと考え続けている。

結局また、私は夢のことを問えなかった。

「次元漂流者、ですか」

「ま、そういうことや」

部隊長室の扉を潜ると、まず目に入ってくるのは正面の壁一面を占める大窓。次に、一人で使うには少々大き過ぎる感のあるデスク。窓際にはつるりとした深緑の葉を垂らした観葉植物。自身から見て左側には応接用の対面ソファとテーブル。

どれもこれも見るからに上等そうな調度だった。しかし、どれ一つとっても、所謂金持ち臭さのようなものはちらとも感じない。並べるだけのブランド物と違って、きちんと用途が確定した物には無駄な気配が払拭されるのかもしれない。

部隊長・八神はやてを前に、ティアナは思考の端でふとそんなことを思った。

「・・・・・・・・」

「ん？納得できへん、って顔しとるね」

「・・・・・・・・はい」

ティアナは、何もわざわざ家具の配置の相談をするために部隊長室へ足を運んだわけではない。数日前の“事”の真相について、本人を除いて知り得る人物を吟味した結果、ほぼ自動的に此处へ辿り着いたのだ。

そして呈した疑問に対して返されるだろう回答を半ば予想してさえもいた。室内の調度品を眺めて品評を下す程度の余裕が生まれたのもその所為だ。

幾分肩を竦めてそつと息を吐くと、八神隊長はくると椅子を半回

転させ、デスク脇のキャビネットからファイリングされた資料を一つ取り出した。同時にその淡い栗色のショートヘアが凜と揺れるのを聞く。

「そない言われてもなあ……本人、つちゅうか本猫さんの話を聞く分には間違いあらへんで？100%混じりつけなしの次元漂流者さんや。少なくとも、ミッドチルダには『レーフェン』の戸籍とかその他の登録情報が施設使用やら購入者歴やら細々したところも含めて綺麗さっぱり無いし、局員の使い魔言う話も上がらんし、搜索願とかの類も局で照らして出てこんし……迷い猫のチラシまで引つ張り出された時は流石に引いたわ……グリフィス君で案外お茶目さんやつたんやね……」

「はあ……?」

「ま、まあ、そういうわけやから、レーフェンはミッドチルダの“外”から来た言うこと。位置付けとしたら、やっぱり次元漂流者って事になるんやわ。それが管理局の手が届く範囲の世界なんか、それともまったく未知の管理外世界なんかはまだ分かれへのやけど」

手をひらひらさせて笑う八神隊長。しかし、それでもティアナに引き下がる気配は見受けられない。

それにそもそも、ティアナが抱く最も不可解な疑問は、正確にはレーフェンの処遇ではない。

屹度視線を八神隊長へ向けて、ティアナは心持言を強めた。

「…………じゃあ、『アレ』は、一体何だったんですか？」

「突然転移したことやね。レーフェンが」

まるで己の胸中を見透かしたかのような八神隊長の言葉にティアナは息を呑んだ。そして、そんなティアナを平素となんら変わらぬ様で小首を傾げながら八神隊長は見ている。

文字通り息詰るティアナを他所に、視線を外した八神隊長は手元の資料をぱらぱらと捲りながら頷いた。

「そらあない突然に消えてしもうたら心配もするやろね。なまじ消えた」言っくんが比喻でも冗談でもないさかい、余計に」

「あ、は、はい。アレは……アレは間違いなく転移でした。それも『距離』を移動する類の簡易な転移魔法なんかじゃなく、もつと……そう、次元の壁を無理矢理破ったような、強引で、力任せな、酷い……」

無意識の内にティアナは目を伏せ、記憶を反芻していた。

何も無い虚空に突然『歪み』が現れ、それが一拳に黒猫の小さな身体を飲み込んだのだ。まるで蜃気楼が意思を持って獲物へと喰らい付くような、そんな不可思議極まりない現象。己の正に目前で成された事であるにも拘らず、それは、ティアナには未だ現実感に乏しい。

ただ、そんな己の常識の範疇外の出来事ではあっても、ティアナには確信があった。

あれは、断じて黒猫の意思で行われたものではないということ。そして、断じて自然の摂理の下成されたものではないということ。

「体質、らしいんやわ」

「は？」

にべも無く、八神隊長は言った。

「三日前の健康診断の時、ついでにいろいろと調べさしてもらたんや。そしたら、身体のおつちやこつちやにな、転移魔法の術式っぽいのが組み込まれとった。全身隅から隅まで徹底的にこれでもか言うくらい。ああ、だから、体質って言い方はちよつとちゃうかな・・誰かの手で、施術されたものなんやから」

「っ!？」

そしてまたもティアナは言葉を失っていた。見開かれた瞳は八神隊長を見る。感情を殺した静かな表情がそこには在った。

「ただやつぱりっていうんか、案の定ミッド・ベルカどっちのにも型が合わへん。そもそもこの世界の魔法、や、魔法ってモノに分類してええのかどうかも怪しいみたいや・・・」

「・・・」

「何処に行くのか、何時行くのか、機能の程度は、技術の進度は、

そもその目的は——疑問いっんやったら、数え切れんほど出てくるやろっね……ごめんな、ティアナ……」

「……………え」

突然の謝罪の言葉にティアナはふと俯かせていた顔を上げる。

胸中の疑問は解決を見るところかさらに難解なものへと成り果て、厭にティアナの心を揺さぶって止まない。只事を期待していたわけではないし、自身が力になれることなど高が知れていることも解っていた。それでも疑問が、否、この突き上げてくるような感情は疑問とは呼べない。やり場の無い、想いがあつた。

「レーフェンのこと。“なんも”教えてあげられへん」

「あ、い、いえ。そんな、八神部隊長が謝ること、ないです……」

奇妙な境遇の中に黒猫は在るのだろうと。安易な生を歩んできたのではないのだろうと。漠とした印象を当てはめて己は満足していた。でも、もう少し、知りたいと思った。

切欠は些細に過ぎて、人に話すことすら躊躇われる程。でも、気になつてしまったのだからどうしようもない。

何故あんな風に言葉を紡げるのだろう。何をして自身をあれ程認めてくれたのだろう。どうして……尊いなど言ってくれたのだろう。

「本当は、本人に確認取ってもらった方が一番早いんやろけど・・・
・・ホンマ、難儀やな。レーフェン君は」

「あ・・・」

そしてそれすら、彼は知らないのだ。

或いは、とはやては声もなく呟いた。

「（神っていうんがコノ程度なら、まだ話は楽なんかな？・・・）
」

「あーうー……」

各局員のデスクが整然と並ぶ事務フロアでスバル・ナカジマは奇怪な唸り声をあげていた。

眼前に展開したウィンドウを睨みながら、手元のキーボードを一身に叩いて報告書整理に励む姿は如何にも仕事熱心で真面目な管理局員然としている——かと言えばそんなこともなく。

少女らしい健康的な足はカツカツと絶えず軽快に床を踏み鳴らし、くりくりと大きな瞳は画面と時計の間で忙しなく行きつ戻りつを繰り返し、明らかに過剰な指力で叩かれるホログラムのキーは時折歪みが生じている。

「ううー！早くしないと訓練終わっちゃうよ！」

「スバル、気持ちは分かるから落ち着いてやろう？あ、ほらそこ、また誤字になってる」

「にゃー！？」

「あははは……。大丈夫だよ。訓練時間はまだまだあるんだし、

レーフェン君は逃げたりしないから、ね？」

そう言つてスバルの傍らで高町なのはは苦笑を浮かべた。

スバルがどうしてこつも解り易く焦燥を露わにしているのか。その原因はやはりレーフェンにあつた。勿論、本人が直接スバルに何かしたというわけではない。

『なあレーフェン、悪いんやけどウチの子らの訓練、見てあげてくれへんかな？』
フォワードメンバー

部隊長はやての鶴の一声であつた。

レーフェンの持つ能力、技術、その手管は過去幾度も見せ付けられ味わわされてきたのだから。そんな明らかに美味しい優良物件を利用しない手はない。彼の力は、未だ未成熟を否めない少年少女らには打って付けの強大無比さがある。

反対の声が上がらなかつた事と、何よりレーフェン自身が買つて出た事も後押しして『特別招来教導師』という今正に思いつきで取つて付けたような待遇が彼に与えられたのだった。

「猫さん、今日は軽く打ち合いをするつて言つてたから私楽しみにしてたんです……なのにい………」

「事務整理も大事な仕事の一つなんだから。今度からは小まめにやつとくんだよ？」

「ふあい………」

五日の間一つも手を付けていなかった書類はうず高くスバルの机を占領し、ずんずんとスバルの精神を圧迫していた。

「そういえば、昨日もレーフェン君の部屋に泊まったってティアナが言ってたよ？」

「うえ！？い、いや、いっぱい猫さんに話したいことがあって、それでなんかいつの間にか寝ちゃってて、気付いたら朝になっちゃったんですよ、アハハハハハ！……」

誤魔化すようなスバルの笑顔を見やりながら、なのははそつと溜息を吐いた。レーフェンに対して並々ならぬ思い入れを抱く彼女の在り方は知っている。そしてそれが少なからず自身に向けられているのと同質のものであるということも。

なのはとスバルの再会も様々な偶然を経て起きたことだった。試験場で相對した時の彼女の涙を今もなのははよく覚えている。それだけに、レーフェンとの再会がスバルにとってどれ程に奇跡的な価値を持っていたのかは言わずもがな。

猫の突然の失踪に、スバルは愕然としていた。驚くことも悲しむこともできない。眼前の事実を理解することさえできない。否、したくない。そんな虚ろの貌。

態度に出さないだけで、スバルはまたレーフェンが消えてしまうことを恐れている。だからより多くの時間を共にする。出来る限り近くでその姿を見ていようとする。突然居なくなってしまうよう

に。不安で不安で仕方ない心を押し留める為に。

「・・・・・・・・・・」

「くっ、なのはさん、やつぱり日にちを分けて地道に終わらせるっていう方向でどうでしょうか・・・・・・・・なのはさん？」

「え、あ、ごめん。何？スバル」

「いえ、どうかしたんですか？ぼおっとしてたみたいだから」

不思議そうにスバルはなのはを見上げている。暫時思考に埋没していたなのはは慌ててスバルに笑顔を向けた。

「だ、大丈夫。ちょっと考え事してただけだから・・・それよりスバル。いくらレーフェン君が猫っていつてもそんな簡単に泊り込むなんてしちゃダメでしょ？」

「え？なんでですか？」

なのはとてそこまでお固い貞操観念を持っているわけではないが、それにしてもスバルのそれは軽いを通り越して常識皆無のレベルではないのか？

心底意味が解らない、と言わんばかりのキョトン顔を向けられ、半ば本気でなのははそんなことを思った。

「だから、スバルだって見て、実際レーフェン君から聞いたでしょう？レーフェン君は男の人だったって……」

なのはの脳裏に黒が過ぎった。

「……………」

「？　なのはさん？……あの、ホントに、体調が悪いんじゃない？……」

「……ううん、大丈夫大丈夫。あゝ、でも実はちょっと寝不足なんだ。訓練メニューの見直しとかでどうしても、ね？」

「あ、そうなんですか！え、ええっと、いつもいつもお世話になってます！」

「にやはは、どういたしまして。でいいのかな？」

スバルは安堵したように笑顔を浮かべた。
なのはもまたそんなスバルへ微笑を向ける。

しかし、その胸中では依然として激しい混乱が渦を巻いていた。何故、どうして、なのはの自問は五日前から一切の進展を見せていない。表面上は平静を装っても、最早同室に住まうフェイトには隠し通せなくなっている。

その動揺の原因はレーフェン。だが一つだけ言えるのは、それが黒

猫ではない彼にあるということ。

黒の外套が放つ強烈な既視感デジャヴをなのはどうしても理解できなかった。

その時、フロアに電子音が鳴り響いた。二人もよくよく聞き慣れた通信回線の呼び出し音。

スバルに断りを入れてなのはウインドウを外線に切り替えた。通知表示は『聖王医療院』。画面上に現れたのは、紫がかった短髪を綺麗に切り揃え、修道服を身に纏うシスターシャツハだった。

『勤務中に失礼します』

「こんにちは、シスターシャツハ。今日はどうしたの？」

『はい、五日前収容した女の子のことで――』

眼前には、黒い瘦躯が静かに佇んでいる。

踏み締めたアスファルトの感触を確かめながら、エリオ・モンディアルは下段に構えた槍型ストレージデバイス『ストラーダ』の柄を再度握り直した。己の身の丈よりもやや長く、通常の槍に比べて刃もやや大きい突撃槍ストラーダはエリオの矮躯で振り回しても十分な威力を生む。さらに魔力による身体強化も合わされば成長途上の体というハンディキャップは無きに等しい。

しかしそれでも、エリオは二の足を踏まずには居れなかった。

対敵の武装は二つ。

一つは、右手に握られた一本の刀。薄く鍛えられた刀身には反りがあり、その切れ味は想像するだけに怜悧。飾り気が殆ど無く、鰐に僅かな紋様が刻まれているだけで、如何にも正しくその用途を遂行してくれるに違いない。

もう一つは、左手に無造作に握られた刀の鞘。殺傷力を期待してのものでないことは自明だろう。本命を右の刀と踏んでこの左を無視する、などという暴拳が取れるはずもない。

此処を戦場だと仮定したなら、その装備は簡素としか言いようない心許無さだったろう。

刀一本。戦力とさえ呼べない戦力。それを握る者が凡百の人間ならば棒切れを持った暴徒の方が幾らか迫力に勝る。どんなに優れた斬れ味を約束した刃も、使う者次第で棒切れにさえ劣るのだ。それだけの、事なのに――

「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・」

エリオは一人、そんな現実逃避を振り払った。

廃棄都市区画を想定して構築されたホログラフは周辺の景色は勿論、瓦解寸前の建造物やビル群、自身が立っている亀裂だらけの道路、荒涼とした空気、舞い散る砂塵、対するは己一人なのだという孤独感、恐怖心までも演出し尽くしている。

10m以上の距離を置きながら、それでも、光の中で闇を象ったような人型はエリオの瞳にはっきりと映し出されている。

身体のサイズにぴたりと合った黒い外套。その袖や裾から覗く手や足は余すところ無く手袋とブーツによって覆われ、頭からすっぽりと被さったフードはどのような角度から窺おうと顔の輪郭を拝む事さえできない。

唯一、時折煌めく金眼が彼の実在を虚から辛うじて現実へと留めていた。

そんな金の瞳が不意に細められる。

「・・・・・・・・・・お前は、頭がいい」

「え？」

「俺の武装を一目見ただけで、そこからどのような戦法を執るのか大まかに予測を立てようとしている」

胸中を見透かされたのではと、エリオの身体を俄かに緊張が走る。

しかし、対する彼、レーフェンの声はひどく優しげだった。

「その齡で……ああ、将来がとても楽しみだ」

「え、い、いえ！ええつと、ありがとうございます……」

心からの言葉であると何故か理解できた。同時に、そのひどく真直ぐな賛辞にエリオは照れくさそうに顔を赤くする。

ひゅんっ、風を斬る鋭利な音が辺りに響いた。レーフェンが刀を軽く振るつたのだ。

そしていつの間にか、刀の切先はエリオへと差し向けられている。

「緊張するな。俺のことは、そう……自動で動く案山子か何かだと思えば善い。高町とハラオウンに教わったことを自分なりに活かして、俺に叩き付けろ。^{カカシ}それが巧く糧になってくれるかは約束できないが……と、この為体だ。^{ていたら}何も気負うことはないだろう？」

「……はい！」

エリオの目に輝きが増す。

何のことは無い。エリオは圧倒的強者を前に自ら要らぬ緊張を己に課していたのだ。レーフェンに向けられた包むような視線を受けてエリオは知らず肩の力を抜いていた。

半身に構え、後足に力を籠める。

「行きます！」

「何時でも」

地を蹴りつけてエリオは一気にレーフェンとの距離を詰め、ストライダを下段から突き上げた。

エリオとレーフェンとの身長差は軽く二まわり以上はある。一度懐に入り込めばレーフェンがエリオの矮躯を相手取るのは至難だろう。小回りと手数の方で一挙に畳み掛け、『一撃』という目的を完遂する。

だが、突き上げた槍の矛先はいとも容易く対する一刀によって捌かれた。続く二撃、三撃の刺突もまたレーフェンは後退しながらその身を逸らし、或いはフェンシングのように軽快に刀を振るい往なす。

「っ？」

その時、エリオは奇妙な違和感を覚えた。

しかし現状、その微細な感覚に頓着する余裕などエリオにある筈も無く、巧にこちらの攻撃を躲し続ける対敵に絶えず絶えず追撃を加えることへ専心し続けた。

レーフェンの脇を通り過ぎた刺突から一転、全力で横薙ぎに槍を振る。ぶん、と鈍い風切音。当たり前のように、レーフェンはただ一歩後ろへと退いて疾風の如き一閃を躲した。

エリオは、歯噛みした。

明らかに己の間合いと速力を読まれている。それも高々数日の内に、高々数回刃を合わせた程度で、ほぼ完璧といえるこの精密さ。

「はぁあ!!」

焦りはある。しかし、頭に血を上げるわけにはいかない。それこそこの仕合の終わりを意味しているのだから。

薙ぎ払いからの遠心力を殺さずに活かす。身体を独楽の軸に見立て、時計回りに回転。ストラダをレーフェンの右袈裟へと振り下ろす。そして半ば予想していた通り、エリオの打ち込みは止められた。

「え!？」

唯一つ予想外なのは、止めたそれが刀身ではなく鞘の方であったこと。

「気を付ける。武器の位置が動かないとは限らない」

鞘は、レーフェンの『右手に』握られていたのだ。

視界の隅で鉄色の煌めきが恐るべき速度で迫る。

思考する以前にエリオはブリッジのように己の身を仰け反り、鼻先を掠める刃を見送った。

勢いはそのままに二度三度とバック転を繰り返し、レーフェンの間合いより全力で退く。漸うと着地して正面を見据え——眼前に黒い影が居た。

「っ!!?」

「その運動能力は凄まじいものだ。動体視力と咄嗟の回避判断も言うに及ばない」

上段から振り下ろされた一太刀を受け止める。甲高い金属音が頭上で鳴り響いた。

当然のようにそれで終わるはずもない。そこから先は猛攻の嵐だ。有りとはらゆる角度から奔る“二刀の”剣閃をエリオはただただ槍を掲げて防ぐ外なかった。刀と見せて鞘の方を槍で受けさせ、守りの手薄な箇所を刀で斬りかかるという単純な戦法はもとより、左右が入れ替わる攻撃などエリオは未だ嘗て経験したことがなかった。不用意に斬り返そうものなら、巧妙精緻を極める鞘がこちらの攻撃を絡め取り、残酷無慈悲な一刀によって己の意識は刈り取られる。

「ただ、一つ言えるとするなら」

レーフェンは、右足を前へ左足を後へ。半身になり二刀を左腰へと構えた。そしてその瞬間弾けるように地を駆け、二刀を同時に振り抜いた。

真横からの双刀。エリオは咄嗟に槍の柄でそれに応じた。苛烈な踏み込みと腰の回転、そして単純にして甚大な速力の乗った剛剣が掌から腕へ背筋へ電撃のような衝撃を伝える。

しかしそれでもエリオはその場に踏みとどまった。体格差を加味して、エリオの胆力は並みの領域を優に凌駕している。

「（やった！耐え——）」

「お前は少し素直過ぎる」

——ひた、と何かが首筋に触れた。

「え」

我が目を疑う。エリオの瞳は正にそう物語っていたことだろう。一体、一体何故、どうして、如何にして、防いだはずの刀が自身の首に触れているのか。

「俺が刀と鞘を振り被った時、その瞬間にもお前はどのような攻撃が来るのかを予測していた。先も述べた通り素晴らしい動体視力だ。しかし、如何せん反応が早過ぎる。そして行動が実直に過ぎる。真横から来る二刀を縦に構えた槍で防ぐ、それはいい。だが“とりあえず”防いでしまおうというのは駄目だ」

「と、とりあえず、ですか？」

レーフェンは刀をエリオの首から離すと刀と鞘を並べて横に、先程の横一閃と同じように縦に構えたままの槍へと添えた。

「俺は鞘だけで槍の柄を打った。そして刀は柄を擦るように振り抜き――」

「あ」

エリオの首に切先が差し向けられた。

「お前は、無意識の内にぶつかり合うことを前提で考えている。相手が防ぐことを解っているなら、わざわざその箇所には打ち込んでやる理由などない。防御をすり抜け、今のようないくつが通ってしまう・・・命を、落としてしまうだろう」

「・・・はい」

これがもし実戦であつたなら。

それは、どんな訓練を受けていても考えることだ。だからこういった模擬戦で一々負けたことをそんな風に悔やんだとて何の益体もありはしない。失敗を考慮し改善し、二の徹を踏まぬよう鍛え抜く。それが今この時一番に必要とされることなのだとエリオも十分理解している。

しかし、エリオは目を伏せていた。目の前の人は、それをひどく憂いている。そう感じたからだ。

「・・・モンディアル、それは美德だ」

「え?・・・あ」

不意にエリオは頭を撫でられた。強すぎることもなく、かといって柔すぎるといふこともない。優しくて暖かくて懐かしい感触を、レィフェンの手はエリオに与えた。

「正面からぶつかろうという気概はとても好ましい。俺には無い、正道に行く在り方だ。どうか、お前はそのままであって欲しい」

「正道、ですか……でも、僕のやり方じゃ……」

「そう難しく考えることはない。お前は幾つになる？」

「え？えつと10歳です」

「なら、今を悲観するには少々早過ぎる。お前の成長はこれからだろう？幼い、などと今更愚かしいことをのたまう心算はないが、発展途であることは認めなければ……いや、ある種喜ばしくさえある。お前は此処から、まだまだ強くなれるのだから」

エリオは少し不思議な心地に在った。

こうして訓練をして、今までも色々な人に様々な評価をされてきた。それは保護者としての、或いは上司としてのフェイト隊長であったり、教導官のなのは隊長とヴィータ副隊長であったり、度々訓練を付けてくれるシグナム隊長でもあった。

でも、“こういうの”は今まで無かった気がする。いや、一つ、記憶層を刺激する何かが在る。今はもう違う、変わってしまった現実

が。

「小狡くなれと言っんじゃない。ただそういったやり口を知っているだけでも十分だ。俺のような能力ばかりの狡い輩^{こす}を相手取った時、少しでもお前の生存率が上がってくれるなら、せめて幸いだ」

「・・・・・・・・」

本当に、この人はそれを願っている。心の底から、自分が、エリオ・モンディアルが生きること願っているのだ。

そう、それはまるで、親が子に抱く、無事の愛にも似て――

「では次に、対槍兵を想定して打ち込みの訓練を行う。突撃槍は持ち合わせがないので、むしろ薙刀に近いものだが・・・・モンディアル？」

「あつ、はい！」

唐突に思考の海から引き上げられ、エリオはびくりと肩を揺らした。怪訝と懸念をない交ぜにしたようなレーフェンの視線が痛かった。

「・・・・・・・・どうする？一度休憩を挟むか。どんな場合でもあまり無理はさせられない」

「い、いいえ！大丈夫です！僕、まだまだやれます。だから、その、
お願いします！」

「……………そうか」

見定めるようなレーフェンの視線は瞬く間に終わり、次いで薄い笑
みをその瞳は湛えていた。

自然と晴れやぐ自身の顔をエリオは自覚する。まるで、今この時過
ごす時間の価値を再認識したかのように。

レーフェンは鞘の鯉口と刀の柄尻を静かに合わせ、もう一度エリオ
に頷いて見せた。そして次の瞬間には――

「こちらから行く。延びろ『ほおすきまる鬼灯丸』」

「え、ええ！？」

「……………言い忘れていたが、対敵の武装の形状変化にも注意し
たほうが善い」

――刀は槍へと姿を変えていた。

離島に位置する機動六課の訓練施設。その休憩所として宛がわれているこの一室には大きなモニターが一台設えてある。隊員の監督、監視、考察、その他訓練データの収集や純粋な観戦等を目的に、このモニターは施設内部のあらゆる映像を出力可能なのだ。

ギンガ・ナカジマとキャロ・ル・ルシエの二人は、ベンチに座りながらそんな大型ディスプレイを見つめていた。

「や、やっぱりすごいです！レーフェンさん、まるでシグナム隊長みたい」

「あはは、それに喰らい付いてるエリオ君も十分凄いと思うけどね・
・・・」

素直な感嘆の息を漏らすキャロに対し、ギンガの呟きには多分に苦笑いが含まれていた。勿論それは、才気に溢れるエリオへの賛辞に他ならなかったが、ギンガにはそれ以上に、殊更にレーフェンの異様さが浮き彫りになって見えたのだ。

「エリオくんもレーフェンさんもすごく強いです……ううん、エリオくんがどんどん強くなってるんですね！」

「あ、うん、そうだね……」

キャラの弾むような、或いは嬉しそうな声に、ギンガの返答は少々曖昧だった。まあ、依然として食い入るように画面を、取り分けエリオを熱心に見詰め続けるキャラがギンガの態度に気付くことはなかったが。

画面の中でまた黒い軌跡が舞う。

「……『慙愧』、だったっけ」

咄嗟に零れた呟きに己自身で呆けてしまった。

何と小難しい言葉だろうか。確かこれは“ナカジマ”という姓の起源、第97管理外世界の日本という国の言葉だったはず。父親であるゲンヤ・ナカジマがふと口に使っていたのを覚えていたようだ。

曰く、自己を恥じること。

意識すると実に簡潔極まる、記憶も虚と化すほど些細な言葉。しかし、どうしてもギンガは思い出した。他ならぬ、レーフェンを見て当然のように、頭は疑問で満ち溢れた。何故、どうして、と。そこでふと、また一つ、記憶を刺激する何かがあった。それもまた、父ゲンヤがその言葉の意味と共にギンガへ漏らしたことだ。

「（そう、確か、心を……）」

「あれ？」

不意に響いたキャラコの声が、そんなギンガの思考を断った。隣に座るキャラコを見やれば、その目は未だ画面を見ている。

それに倣うようにギンガもまた画面を、そこに映っているであろう二人の姿を見た。

しかし、そこに居たのはエリオ唯一人。

「え？レーフェンは？」

口をついて出てきた当然の疑問は、しかし妙に間が抜けている。暫しの間、状況が解らず呆然と画面を見詰めるばかりだったギンガとキャラコに回答を寄越してくれたのは、画面上に佇むエリオだった。マイクが切り替わり、無言だったスピーカーから音声が出力される。カメラがズームし、エリオの顔が画面の中央で大写しになった。

『あ、二人とも聞こえてますか？今日は午後からの教練、中止になるそうです』

「う、うん。それは分かったけど、えっとレーフェンは？」

『はい。なのは隊長から通信で、なんでもこの前の子に会いに行く

つて
『

「この前の子に……?」

緑の豊かな場所だ。

ミッドチルダ北部ベルカ自治領。

件の聖王医療院を見上げながら、俺はそんな益体も捻りもない感想を抱いた。

機動六課本部施設より車でほんの数分と都市部からもそう遠くはない場所に位置しながら、このベルカ自治領は天然自然の宝庫であった。ほぼ手付かずと思われる広大な森林と山から汲み上がり流れる澄明な川。聴覚の範囲を広げるに、数km歩けば雄大な大瀑布が拝めるだろう。

何処か社会と隔絶したかのような環境は成程静養に適している。

先達で連絡を寄越してくれた高町は既に院内にいる。気配を嗅いだところ、近くにシグナム副隊長もいるようだ。

連絡を受けてすぐこの足で此処へ向かったのだが些か遅れたか。

「・・・・・・・・猫では、不味かるうな」

ふと、自身を顧みて口を付いた。細い体躯、細い四肢、黒い体毛、尖った耳、言い訳染みた猫の殻。

仮にも病院施設に畜生が出入りするのはいくら条理を逸した肉体であろうと——憚られる。細菌や感染症等の可能性が皆無であったとしても、だ。

「・・・・・・・・すう」

一息の間に済む。最早手慣れた工程を終える。

腕を伸ばし、地を二足で踏み締め、風が外套をひと撫でした。

レンガ造りの門を越え、ガラス張りの入り口へ向かって歩く。扉の先は受付と待合室を兼ているようだったが、受診者やスタッフはおるか、人の姿自体見受けられない。休診日なのか、それともこれが日頃の光景なのか。まあ今は気にすまい。

入院患者用の病棟は一番奥らしい。

大理石の床にブーツが硬質な足音を響かせる。入った瞬間から気に留まっていた事だが、此処は内装からして病院らしからぬ。随所が西洋建築風の佇まいを持ち、所によりギリシャ建築にも見える精緻な彫刻が施されている。歩み過ぎる廊下の窓には時折ステンドグラスが嵌め込まれており、夕刻特有の強い西日で仄かに赤らんだ色とりどりの輝きを放った。

「これではまるで協会のようだ……」

誰にともなく呟きながら、程無く廊下を抜けて中庭へ出た。

四方を病棟で囲まれた此処にも、多くの草花や木々が植えられている。茜色に映える花々の彩には僅かに目が眩む。

宛ら箱庭と呼ぶに相応しいこの場所は、しかしどうしてか開放感に満ちていた。中庭を見下ろすように佇む建物達からさしたる圧迫感を感じない。

四角く区切られている空が、ただ見上げるよりも広々として見えるのだ。

茜色の夕べは少しずつ蒼い夜に塗り変わっていく。

「レーフェン君」

「ああ」

空へ投げていた視線をそちらへ向けた。遊歩道から少し逸れた芝生の植えられた場所。茶褐色の機動六課隊服に身を包んだ高町は木陰に佇み微笑んでいた。

「ごめんね、連絡が遅れて。様子を見に行くだけのつもりだったから、こんな風になるなんて思ってた……」

「いいや。無事に見付かったのなら、それで何よりだ」

言いつつ、高町の足にしがみ付いている少女を見やった。
柔らかな金系の髪が風に揺れる。小さな体軀は病院着で包まれ、裸足のまま歩き回ったのか足は少し汚れている。

少女が病室から抜け出してしまったという連絡を受けてからそう時間は経っていないように思っていたが、甘い考えだった。

「・・・・・・・・あ」

「・・・・・・・・」

不意に少女が小さく声を上げた。高町の背後に隠れていた顔が露になり、美しい深緑と深紅のオッドアイが淡い光沢と共に己を捉える。少しだけ赤く腫れた目元と、まだ僅かに残る雫。また、この娘は泣いてしまったのだろう。それを高町が宥めてくれた。

束の間、筋違いな安堵を感じながら自身もまた少女の濡れた瞳を見詰め返す。

——瞬間、涙が少女の大きな瞳に溢れかえった。

「な」

「っ！」

そして気が付けば、何時の間にか少女は己のコートに取り付いていた。

「う、ふえっ、あ、ううええっ！っ！」

「・・・・・・・・・・」

「あ・・・・・・・・そっか、そうだよね」

何処か得心入ったという風情で高町は頷いている。自身はと言えば正に腑抜けの如く呆けるばかり。
そんな愚か者へ高町はひどく優しい笑みを向けた。

「・・・・・・・・この子はね、さっきまでずっとお母さんとお父さんを探してたの。当然だよ。目を覚ましたら病室に一人つきりで・・・・うっん、“ずっと”独りきりだった・・・・・・・・」

最後の囁きは少女には聞こえなかったろう。空気を僅かに震わせる程度のほんの小さな言の葉だ。そして、決して聞かせてはならない。

「だから、初めて手を差しのべてくれた人なんだよ。レーフェン君は」

「・・・・・・・・約束を」

手前勝手な約定を俺はこの娘に押し付けたのだ。有無など言えぬ。

選択の余地、否、選択肢すら与えられないそんな状況で、烏澁がましい言葉を垂れ流した。そうだ。本来ならこの娘が此処で眠っている間も己は傍にいてやらねばならなかった。責任などと大層な言葉は要らない。極めて当然の思索がこの畜生には欠如していた。少女の小さな頭を撫ぜる。

脳裏に過ぎるのは罪滅ばし、贖い、救済、陳腐な言葉の羅列。涙に暮れる女の子を前に思考する事とは、そんな糞のような感情しか持ち合わせていないのか。

せめて、少女を撫ぜる掌に乗せる感情を己はただ一心にのみ収束する。

「名前を、教えてくれるか？」

「っ！ひつく、ヴィヴィ、オ……！」

「そうか。とても、とても愛らしい名前だ」

涙で滲むその顔が、ほんの少しだけ微笑んだように見えた。

或いは、それを望む余りの都合の良すぎる幻覚か。

どちらにせよ、己の浅薄な口舌がこの娘の助けたり得るとは、やはりどうしても思えない。それこそ真に烏澁がましいのだ。

安らぎのようなものが目の前に在る。

手を伸ばせば届くほどに近しく、手に取るまでもなく暖かなモノ。

それを手にすることが出来ないのは偏にこの手が汚濁に塗れているからだ。

何かを尊べば尊ぶほどに、自身の穢れは浮き彫りになっていく。

夕闇が帳となつて、中庭は夜に覆われ始めている。陽の温かさを得られぬ風は伶俐な針のように肌を刺す。

先刻のように嗚咽を漏らさなくなったのは幸いだが、少女は未だコートに顔を埋めたまま動こうとしなかった。或いはそれも、無理からぬ事だろうか、暫時されるままに任せてはいた。

しかし、満面と月が顔を現わす段になつても少女は黙して動かない。ただただコートを握る手は相も変らぬ強さで以て自身をこの場に縫い付けている。

「ヴィヴィオ、もう遅いから病室に戻ろう？風邪引いちゃうよ」

「・・・・・・・・・・」

ひどく穏やかな声音で高町は言う。それでも少女は頭を振るばかり。騒騒、騒騒、風が木々を薙いでいる。まるで、何かを掻き立てるように。何故だろうか、ひどく予感めいている。

「・・・・・・・・・・」

少女が返すのは強まる腕の感触と明確な“拒絶”の意思だった。どのような要求も懇願も断固として受け入れはしない。我儘とは違う。そう、まるでそれは一つの“決意”のような。

だが、一体彼女が何を拒んでいるというのか。俺には、オレには、如何にも判断出来ない。理解することなど——否。

「・・・・・・・・」

否、否、否、断じて否。己は、これを知っている。

いや、いや、違う。オレは何も知らない。オレは何も覚えてなどいない。だから、そう、これは違う。こんな“モノ”、オレが、オレ風情が持ち合わせて良い“モノ”ではない。

さあ、風が強くなってきた。早く部屋に戻ろう。高町の言うとおりだ。急ごう。早く急いで。逃げ逃げ。

風は耳から奥へ奥へ。鼓膜を揺さぶり急ぎ立てる。嗚呼、そうか。解ったぞ。これは警告なのだ。では早くしなければ。あつという間に間に合わなくなる。早く早く早く、さもないければこの娘は——

——
パパ

「——」

全てが、消え失せた。

音も色も匂いも、身体も心も魂も、全部全部全部何処かへ遠退いて

いた。

高町が何事を語り掛けてくる。しかし、わからない。

音は耳が捉えている。言語は脳が理解している。だが、そこに乗せられた意思が、どうしようもなく遠い。意味を解するという行為が、どうにも他人事めいている。

凝固した身体。機能しない心。魂だけが刻々と熔解を続けている。

紛うことなき愚鈍となり果てた己というモノは、不幸なことに未だ死んだ訳ではない。究極的に役立たずになっただけだ。

だから、不意に差し向けられた二色の美しい宝石をオレは反射的に見てしまった。

まっすぐな少女の、畜生へ向けるには美し過ぎる大きな瞳。それが物語るのは狂おしいほどの情愛と無上の“喜び”。

パ
パ

そう、唄うように呟いた。

[illegible]

△

ス

メ

が

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1241n/>

ジサツ転生者

2011年11月16日14時18分発行